

『まちを元気にする方法 － 仕掛人6人へのインタビュー』

VOL. 13

戦略的研究基盤 団地再編プロジェクト

わが国の公的集合住宅団地は、人口拡大・都市化の時代に大量に建設されました。そこでは、住宅の老朽化や設備の陳腐化などの物理的な問題のみならず、高齢化率の上昇やコミュニティの弱体化などの社会的問題をも抱えています。その数は、公営住宅で約 219 万戸、UR 都市機構賃貸住宅で約 77 万戸にもものぼり、再生・更新のみならず維持自体も困難を極めています。さらに人口減少時代を迎え、団地の縮退や住宅以外の機能の導入など、住宅地そのものの再生（＝再編）が重大な課題となっています。

関西大学戦略基盤団地再編プロジェクトは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受けた、平成 23 年度から 5 年間にわたる技術開発研究プロジェクトです。本プロジェクトでは、集合住宅団地を、住宅および環境ストックの活用を図りつつ住民が守り育て自立的に更新していけるような“まち”に再編する技術（＝団地構造の修復型再編技術）及び、それらの事業を展開する手法技術を開発し実践に活かすことを目的として、特に、大規模公的集合住宅団地の修復型再編手法に関する技術開発研究を行っています。

本プロジェクトでは、現在、具体の団地を対象とした再編技術提案などを行っていますが、関連して行っている講演会・レクチュアシリーズ、事例調査等の活動成果を、簡潔にわかりやすくお読みいただける団地再編リーフレットとして公表しています。本団地再編叢書は、同様の趣旨で、関連の知見をブックレットとしてまとめるものです。描き下ろしもありますし、過去の出版物の中から抜粋したものもございます。お読みいただき、議論が展開されることを望んでいます。

2015 年 11 月

関西大学 戦略基盤団地再編プロジェクト 代表 江川直樹

本書の作成の趣旨

本プロジェクトが再編の対象とするのは、1960年代、1970年代に大量に建設された日本住宅公団の団地です。新しいライフスタイルを実感したいとの思いで団地に移り住み、その団地をステップとして郊外の戸建住宅に移り住む、そのような同じ思いを持つ家族が団地には住んでいました。それから45年が経過しました。最寄駅からは遠いのでバスを利用しなければならず、エレベーターが無いので階段で部屋まで上がっていかなければならない、そのような5階建て住棟が並んでいます。今の団地に暮らす人々は、戸建住宅に移り住むこと無く住み続けてきた人、部屋の広さのわりに家賃が安いからと移り住んで来た人、短期間の住まいだから転居しやすいUR賃貸住宅を選んだという人、思いの違うさまざまな人が同じ団地に住んでいます。地域でのお付き合いも、団地への愛着も薄く、住む人々の思いはバラバラです。まち全体が静かで、淡々とした暮らしの場になっています。このような団地はどうすれば元気になるのでしょうか。どのようにすれば、思いの違う人々が幸せだと感じるができる日々を送ることができるのでしょうか。人々が楽しくまちづくりに参画する、まちづくりに参画できることがまちの魅力になる、そのようなまちにするには、行政は、コンサルタントは、住民は、どのように取り組めばよいのでしょうか。

そこで、自他ともに認める「まちの元気の仕掛人」6人にインタビューを試みました。2014年5月から12月の間に、それぞれの方が活躍されている場を訪ねて、インタビューしました。ここに紹介する「まちの元気の仕掛人」達は、それぞれ立場は違うのですが、まちづくりや日々の暮らしについての考え方に、共通するものも多く見られます。まちづくりは、自治だとの考え方もありますが、内発的にまちづくりの機運が生まれにくい場合には、仕掛人の手を借りるのも1つの方法。それは新しい職能と言ってもよいでしょう。

今、団地に限らず、まちを元気にしようと思う人々にヒントを伝え、仕掛人として団地やまちで活躍し、多くのまちが元気になることを願っています。

2015年11月

関西大学 戦略基盤団地再編プロジェクト 岡 絵理子

| 目次 |

第1章	まちを元気にする仕掛人	7
第2章	震災移転先丹波前山(さきやま)・思いがけずの地域活動	13
第3章	ふるさと尾道・楽しい空き家再生でていねいな暮らしの場づくり	21
第4章	ハイセンスまちづくり・“やりたい”を実現させる達人	31
第5章	松戸・エリアマネジメントで廃墟ビルをアートの拠点へ	39
第6章	富山グランドプラザ・豊かな心をとどけるまちなかヒロバニスト	47
第7章	市民の“やりたい”を実現させる・伊丹のまちの仕掛人	59

第1章

まちを元気にする仕掛人

関西大学 戦略基盤団地再編プロジェクト

岡 絵理子

団地の住環境の質はどのよう計られるのでしょうか。

従来型の住環境指標では、交通利便性や安全性、防犯性、住まいの広さなど、数値的指標で計られ、その指標は全国一律に評価され、地価に反映するものでした。しかし、人がそのような環境指標すべてが高い評価を得ているから、幸せに暮らすことができるとはいえません。良好だと言われる住環境が、居住者にとって幸福感をもたらし、豊かだと感じる事の出来る暮らしを実現するとは言えないのです。不便な場所であっても、家の賃料は安いから住居費の負担が少なく押さえることができ、その分日常生活にお金をかけて暮らすことができる、古い家を借りているから自分で手を入れることが許され、自身の気に入った暮らしの場を実現できる、都市から離れた小さな村に住んでいるから、自身の小さな活動が地域の人を動かし、まちやまちに暮らす人々の気持ちや少し変えるきっかけをつくる。そのように、市民、住民が自発的に自己実現出来ること、そのような場があること、そこなら生まれる幸福感、ゆたかさは、今後の住環境を考える上でのあらたな指標になるのではないかと考えています。市民、住民が自分の思いをもって行動できるまち、それが「元気なまち」なのです。

いま、地域の各所にこのような市民、住民の自己実現を地域でコーディネートすることによって、地域のまちづくりを推進している人たちがいます。このようなまちづくり市民コーディネーターともいえる人々は、市民の立場から、コンサルタントの立場から、行政の立場からと、その立場は様々です。実際にその活動をヒアリング調査したところ、それぞれの方が発した言葉の中に共通する考えを見いだすことができました。

ここでは、次章以降に紹介するそれぞれの立場からの、「まちを元気にする人たち」としてのヒアリング内容を整理し、キーワードを拾います。

(1) 震災移転先丹波前山(さきやま)・思いがけずの地域活動：北村久美子氏

北村久美子さんは、1995年1月の阪神淡路大震災に会い、神戸から丹波市前山の市営住宅に移転しました。前山は、福知山線で大阪に結ばれており、農業を中心とした自然に恵まれた地域です。しかし、高齢化も進んでおり、高齢化率40%を超える地域もできています。

北村さんは、それまでは地域活動などしたこともなかったのですが、小さな町に移住してくると、子供たちのつながりなどから、いつの間にか寄り合いに参加、地域活動に関わり始めました。

丹波市前山の地域活動は、まだまだ男社会で、何も知らずにその中に入ってしまった北村さんは、大いに戸惑ったそうです。そんな中で、問われるままに意見を言っていたら、いつの間にか地域自治組織の最前面に立っていました。そこから、地域の人々と元気に過ごす場づくりが始まりました。今では、前山公民館の館長をしながら、NPO法人いきいき前山、生涯学習応援隊so-soの代表など地域づくりに欠かせない人物となっています。

北村さんの言葉の中から、まちづくりのキーワードを拾いました。

- ・小さな町の利点、身近な行政
- ・人のネットワークで人を呼ぶ
- ・話を聞いてくれる人、ほっとできる場所づくり
- ・自分の思っていることを形にする。
- ・思っていることを形にできる環境づくり
- ・「ねばならない」地域活動ではなく、自分が素直になれる場所づくり
- ・消費に価値を見いださない価値観、繋がる価値

小さな地域社会であると、市民がやりたいことを出来る環境を作りやすいと考えられます。しかし、そのような社会では個人のやりたいことを聞き出す方法が難しいのです。そのために必要なのが、自分の思っていることをきいてくれる人、話すことの出来る場所だと木村さんはおっしゃいます。集落を中心とする地域社会では、未だ、家と地域が密接な関係を持っており、その中での個の存在は、なかなか浮かび上がりません。しかし、あえて、個のつながりをつくり出す活動が、北村さんの活動です。

(2) ふるさと尾道・楽しい空き家再生でいいいな暮らしの場づくり：豊田雅子氏

豊田雅子さんは、NPO法人尾道空き家再生プロジェクトの代表理事を勤めておられます。尾道の山手の住宅地は車の入らない坂のまちで、郵便局や宅急便の配達員が、階段を上がったり下りたりして配達をする姿は、よく知られています。この斜面地の裾野の地域には寺が江戸時代から並んでいました。その上には明治、

大正時代までは別荘地であり、私財を投入した立派な別荘建築が点在しています。その間を埋めるように、戦前戦後に普通の住宅が立地し、階段で敷地をつなぎながら市街化していきました。

その結果、斜面地には多くの非接道敷地が出来上がっています。非接道敷地では、一度建物を除去してしまうと、二度と建てる事が出来ません。近年は、斜面地に立つ住宅に空き家が増えており、これらの中には永年手入れもされず朽ち果てようとしている住宅も少なくありません。

豊田さんは、一軒でも多くの斜面地の住宅に人に住んでもらい、空き地になることを避けたいとの思いから「空き家バンク」始めました。子どもから大人まで巻き込むイベント仕立ての実践的空き家再生「尾道建築塾」など、空き家の再生を楽しみ、新しい居住者を募る手法は、全国的な「空き家問題」解決のモデルとして取り上げられることも多くなっています。「尾道建築塾」では、社会人、学生を対象とし、空き家の再生を6泊7日の合宿仕立てで行なうもので、坂暮らしをしながら実際の空き家を再生し、再生技術を学ぶものです。参加費は48,000円（2015年、宿泊、食事、レクチャーなどすべて含める）ですが、例年大変な人気のイベントとなっています。

尾道の斜面地では、空き家の再生、新規入居、その結果的に子供の数が増えてきています。子育てのまち



図1. NPO 尾道空き家再生プロジェクトで再生された斜面地の家々（NPO 尾道空き家再生プロジェクト HP より）

として唱っている訳ではありませんが、「子どもが生まれるまち」となり、斜面住宅地に暮らす地域マネジメントの担い手が育っています。

豊田さんがヒアリングの中で発したキーワードを示すと次のようです。

- ・自分から情報発信して価値観を共有する人を探す。
- ・みんなの手が加わって、みんなに愛着を持ってもらう。
- ・面白おかしく活動して、人を集める
- ・一緒に作業して、一緒にご飯をたべる
- ・掃除も大工仕事もワークショップで楽しくやる
- ・丁寧な生活を求めて、ライフスタイルを変える。
- ・自分の生活を大事にする。
- ・人が近いことが当たり前のまち
- ・元気になっていることがわかる町のサイズ
- ・出て行った息子より、わざわざ住んでいる若い家族
- ・子育てのまちではなく、子供が生まれるまち

ライフスタイルとして斜面地を選んだ人々が、小さなエリアで行うまちづくりであるからこそ、そこに関わるひとりひとりの満足度を高めています。個人の満足から始まるまちづくりが実現されているといえます。

(3) ハイセンスまちづくり・“やりたい”を実現させる達人：若狭健作氏

若狭健作さんは、株式会社地域環境計画研究所の代表取締役です。この会社は、阪神間の地方自治体でユニークなまちづくりを行う、実践派の仕掛人です。

若狭さんは、学生時代に尼崎の調査をしたことからそのまま尼崎に関わり、尼崎に事務所を構えて、“機嫌のよい”場作りを通して街に関わるプランナーです。フリーペーパー「南部再生」からはじまり、「尼崎21世紀の森」森の会議の運営や、地域物産展「メイドイン尼崎」カタログ作成など、デザインの優れたパンフレットを作成し、まちおこしに取り組んできました。若狭さんのキーワードを示します。

- ・公共空間を考える緩やかな民意
- ・やりたいことを持ち寄って
- ・わが町は、「自分がやりたいことが実現できる町」
- ・めっちゃ面白いから、次につながる
- ・面倒なことをやらせるのではなく、やりたいことに社会的意味をつける
- ・取材することから始まる人の縁
- ・「これ、めっちゃ得意やねん」を活かす
- ・人の顔が見えすぎないコミュニティ
- ・世話させられる地域活動から、やりたいことができる地域活動へ
- ・「機嫌よく」何かをし出す
- ・自慢できるシビックプライド

地元を大事にしながら、さまざまな自治体のまちづくりに関わる若狭さんは、面白いことをすることが大



図2. 株式会社地域環境計画研究所がまちと人をつなぐ情報発信印刷物の数々(株式会社地域環境計画研究所HPより)

好き。面白いことを市民に体験してもらい、自分もいっしょに楽しむ姿勢を忘れません。同じ会社の経営者、綱本さんは、抜群のデザインセンスと描写能力で、パンフレットや堅苦しい計画書の市民版を作成し、人々に分かりやすいまちづくりを発信しています。デザインの力も、まちを元気にする必須要素です。

(4) 松戸・エリアマネジメントで廃墟ビルをアートの拠点へ：西本千尋氏

西本千尋さんは、蔵造りの町家のまち川越出身です。高校生のときから川越のまちづくりに関心を持ち、大学生になるとエリアマネジメントの会社を立ち上げました。地域固有の文化に根ざす自立型まちづくりを支援しています。全国のまちづくり団体とともに、屋外広告によるまちづくり財源創出と景観向上を進める「エリアマネジメント広告推進委員会」の発足にも関わっています。

今最も夢中になっているのは、MAD City(マッドシティ)、JR 松戸駅西口周辺のまちづくりプロジェクトです。

松戸は古くから水戸街道の宿場町として栄えてきました。1960年代から周辺にいくつもの団地開発が始まり、その交通拠点としての役割を松戸駅が担うようになったのです。それに伴って、1973年に土地区画

整理事業が完了し、百貨店をはじめ一斉にビルが立ち並びました。しかし、現在それらのビルが一斉に老朽化し、上部は空き床が目立つようになってきています。

そこに目を付けたのが、MAD Cityの代表取締役である寺井元一氏です。寺井さんは、民間企業によるまちづくりプロジェクト、再開発手法によらない、「人」によるまちづくりを進めることをめざしています。松戸に新しい価値観をもつ「クリエイティブ層」という担い手を設定し、松戸の空き物件と「クリエイティブ層」である人々をつなぐ役割を果たそうとしています。西本さんは寺井さんの思いに賛同し、MAD Cityの経営者の一人として、松戸のまちづくりに関わっています。これまでの経験から、西本さんのこだわりのキーワードを示します。

- ・「まちづくり」は日常生活を豊かにする活動
- ・不動産価値でなく、借り手にとっての価値の発見
その価値を引き継ぐ文化
- ・地域とのコミュニティを維持管理するスタッフ
- ・「活性化」ではなく「豊かに暮す」
- ・自分たちの空間を自分たちでつくる「豊かさ」
- ・暮らしぶりの地域とのシェア
- ・「使える場所」に変える
- ・やりたい人、楽しみたい人を呼んでくる

負と価値付けをされている地域資源を、新しい価値観にもとづく生活像を示すことにより、同じ気持ちを持つ人々を、地域資源を活かしたイベントで引きつける、地域資源を生き返らせ、地域のおこなっています。まちづくりは、今の価値観だけでなく、新しい価値を生み出すことから実践できます。

このような活動の中でMAD Cityがもっとも気を使っているのが、これまでの居住者、地域との関係です。地域に受け入れてもらわなければ、地域資源の活用は成り立たちません。地域とのコミュニケーションは、ハードだけではなく、ソフトも重要です。

(5) 富山グランドプラザ・豊かな心をとどけるまちなかヒロバニスト：山下裕子氏

山下裕子さんは、富山市の中心市街地にある広場、グランドプラザ富山の運営・マネジメントを、「株式会社まちづくりとやま」に所属しながら進めて来ました。その能力を買われて、今は久留米に新しい市民のための広場を立ち上げるヒロバニストとして、活躍中です。

富山グランドプラザは市街地再開発事業の中で生み出された広場です。運営を「株式会社まちづくり富山」が行なっていますが、市民がこの広場でやりたいことを、次々実現させている運営方針は、公共でもできない、民間でも出来ない、第三の公として、市民の背中を押す活動となっています。

毎年行なわれる地元の高校のダンスの発表会など、



図3. 富山グランドプラザとそこで行われる市民のイベントの様子（山下裕子氏より提供）

まさに市民の晴れ舞台となっています。高校生は、この場でダンスをみんなに見てもらうために、全員で広場の賃料を負担し、自分たちの思いとして発表会を実現させています。このような広場の富山での位置づけや、山下さんの活躍については、山下さんの著作「にぎわいの場 富山グランドプラザ」に詳しく記されています。山下さんのキーワードを次に示します。

- ・「人のいる景色」をつくる
- ・イベントは、そこにいることを楽しむためのもの
- ・気持ちの上でのリッチ、リッチな日常
- ・消費の豊かさをねらわない
- ・ちいさな経済活動
- ・人とのつながりをつくる「挨拶」
- ・子供の時から引きつけて、成長をまつ
- ・昼と夜の顔をもつ、24時間解放の空間
- ・まちをえらぶ感覚を育てる
- ・2：6：2の原理（前向きな人は2割だけ、2だけで走る！）
- ・市民がやりたいことができる空間
- ・次の目的をつくることのできる場所
- ・わかりやすい楽しさの伝達

山下さんは、市民のやりたいことができる場を、ソフトで支えながら、市民が思ってもいなかった活動まで、

背中を押す役割も担っています。その一方で、公共空間の景色をそこに表れる人によって作り出すことも常に考えています。都市での場づくりで必要なのは、その場が都市にある様々な空間の中で、市民の生活に取ってどのように位置づけられるかです。活動の内容、時間帯によって空間の位置づけが変わる。それによって、参加する人々の気分も服装も変わる。イベントが行われていないときこそ、市民にとっての広場の役割は大きいのです。

こうして、その場の存在が市民の心に根付き、シビックプライドを生み出す素地となるのです。

（6）市民の“やりたい”を実現させる・伊丹のまちの仕掛人：綾野昌幸氏

綾野昌幸さんは、伊丹市に勤める行政マンです。都市企画室室長と、都市活力部参事を兼任するソフトの仕掛人です。

新設の伊丹市立図書館「ことば蔵」は、コミュニティスペースを併設した図書館です。「ことば蔵」は、伊丹市の中心市街地から北に伸びる旧街道、猪名野神社へ向かう通りである宮ノ前通りに面しています。歴史や伝統を感じることが出来る道として新たに建物の景観整備、街路整備を行ないました。図書館への入り口は、その町並みの一部となっており、公共施設としては珍しい造りになっている建物です。

図書館のコンセプトは、「公園のような図書館」。だれもが気軽に訪れる図書館を目指しています。図書館の1階の「交流フロア運営会議」では、市民の「こんなことやってみたい」のアイデアから、様々なイベントが生まれています。

昨年（2013年）の秋には、11回目の伊丹まちなかバルが開催されました。伊丹のバルは、本州では最も歴史あるバルです。バルを第1回の立ち上げから支えてきたのも綾野さんです。

綾野さんは、「伊丹市民は絶対幸せ！」と公言します。そのように自信を持って言える、その訳を綾野さんのキーワードをから紐解いてみましょう。

- ・行政と民間がいっしょになって、町を元気にする。
- ・市民からの「こんなことやりたい」の声に応える。
- ・「楽しい・面白い」を伝える。
- ・人のネットワークでつなげていく
- ・実現できる方法を考える
- ・できることを役割分担する
- ・いろいろなグループとコラボする
- ・ちょうど歩けるいいサイズの町が舞台
- ・地域が儲かることをめざす
- ・「使っていないとき」に「使われる場所」にする
- ・楽しい場所のある、楽しい町

綾野さんは、市民の「やりたい」の声を拾い、その実現をサポートする。それが行政の役割だと言います。



図 4. 伊丹市立図書館「ことば蔵」、NPO 法人伊丹タウンセンターのイベント告知パンフレット（伊丹市 HP、NPO 法人伊丹タウンセンター HP より）

参加する市民が楽しめること、儲かることが大事であると。

伊丹市では、今街のなかの居場所づくりに取り組んでいます。伊丹市の中心市街地である伊丹郷町にある三軒寺前広場、そこから北に伸びる宮ノ前通り、東に伸びる酒蔵通りの人々が集うことができる場としての整備を行ってきました。その空間で、NPO 法人伊丹タウンセンターが、次々と市民発意のイベントを繰り広げています。このような、まちづくりを推進する組織の存在も重要です。

以上の6人の共通したキーワードは、「やりたいことができるまち」。そこには、地域資源を活かした、あるいは新しく作り出した、「人々をつなぐ場」と、そこで展開される人々の「やりたい」を支援する「行政」があります。特に、行政の市民に対する接し方は、これまで行政が考えてきた“住民参加”による街の活性化への取り組みとは、真っ向から対立する考えが根底に流れています。

行政は市民に対し、平等な“住民参加”機会を用意することを第一に接してきました。同じ情報を市民に与えて、手を上げた人に参加していただくという方法です。しかし、この事例に見られる行政と市民のかた

ちは、行政が場所を提供して、そこに何気なくやって来た人々の「やりたい」というつぶやきに耳をかたむけ、その気持ちに応えること、それがその人の地域での存在を認めることであり、自身の幸せにつながります。さらに、その幸せが周りの人を巻き込み、結果として多くの人々の幸せにすることにつながるという考え方は、

個人の「やりたい」気持ちからはじまるまちづくりを、どのように導きだすかが、幸せな市民のいる街の仕掛人が考えることです。

まちを元気にするには、すべての人のことを考えるのではなく2割の人が活躍すること、それが残りの6割の人々を巻き込む。最後の2割まで振り向かせようとは考えない。人を選ぶまちづくりを進めること、共通の価値観、ライフスタイルを提示して、人々を集める。このことも、まちを元気にする取り組みの大きな鍵となります。

第2章

震災移転先丹波前山(さきやま)・思いがけずの地域活動

丹波市 前山コミュニティセンター
北村 久美子

岡：現在、どのような活動をされているのでしょうか。

北村：丹波市市島の前山にきて20年目に入ります。阪神大震災で家が全壊しまして、ここに住むことになりました。生まれは西宮で、結婚してからは神戸市灘区、最寄りの駅は阪神電車なら新在家、JRなら六甲道という場所で震災時の木造倒壊率80%の地域でした。子どもがまだ3歳と5歳でしたから途方にくれていたところ、丹波市に雇用促進住宅があって、仮設住宅と同じ条件で無料で入れるということでしたので、転居してきました。それからずっと前山にいついています。今ではすっかり地元民だと思われていますが、当時は親類はおろか、知り合いは全くいない状態でした。神戸にいたときは、子どもが小さかったので仕事もしておらず、そろそろ社会復帰したいと保育所探しをしようと思っていた矢先に震災に会いました。丹波市は、当時の夫がアウトドア好きで時々キャンプをしていて、知らない土地ではありませんでした。丹波市には他にも雇用促進住宅はあったのですが、当時私は自動車免許を持っていなかったため、最寄りの駅のある前山の住宅を選択しました。上の子が小学校に上がる時点で、神戸に戻るかどうか迷ったのですが、子どもが前山に馴染んでいたのと、経済的な目処も立たなかったため、ここに残ることになりました。

せっかく丹波市に住むのなら地べたに住みたいと、小さな家を建てました。有難いことに子どもがいたので、すぐに知り合いができました。神戸に住んでいた若い頃は、地域活動などさらさら考えていなかったし、役所の人との接点も全くなかったのですが、ここに来てみると、役所やJAにお勤めの人が多くて、窓口でもていねいに教えてくれたり、話が通じたりして、面白いなと思っていました。そんな時に、近所の子どもを通じた知り合いから「環境を考えませんか」と誘われたのです。周りにアトピーの子供が多かったことが気になっていました。当時は下水道が整備されていなかったため、川に直接合成洗剤が流されていて、ぶくぶくと泡が立っているという状態で、ちょっと衝撃だったのです。声かけしてくれたのは、シャボン玉石けんという純石鹼を共同購入しようというグループでした。私も、子どもは布おむつと粉せっけんで育てるものだと思っていましたので、自然な流れで共同購入し、地域の活動に参加させてもらうようになりました。

このようにして細々と動いているうちに、子どもの手が離れ、7年ほど前に子どもへの暴力防止の“CAP”というプログラムを受講し、子どもの権利について取り組むことになりました。

女性の権利について取り組むきっかけになったのは、村の集まりなどで発言するのは男性だけで、女性はどなたもしゃべらないことに違和感を持っていたからです。私が会合などで質問すると、「え！質問するんや！しかも女子が！」という空気でした。まず質問というものが出ないですし、ましてや女性は発言しないのが普通だったようです。「これって、おかしいな」という思いがまずありました。『丹波の森公苑¹』では、ボランティアさんや女性の趣味の会の方などはとても元気なのですが、地域で予算を決めるような場面には女性は出てこないし、役をもらいたくない、意見も言わない。色々話を聞いていると、言いたい事はあっても、家族や親せきに迷惑がかかっても…ということで、二の足を踏んでおられるらしい。私はこの土地に親類縁者はいないし、私個人として動けるからと、それならば、と、彼女たちの様々な声を代弁するようになりました。そのうち「変なヤツや」とは思われつつも、面白がられ、様々な会合等にも呼んでもらえるようになりました。お友達も増えたので、グループを組んで活動しようということになったんです。

岡：今はコミュニティ・センターでどういうお仕事をされているのですか。

北村：今は、コミュニティ・センターにいますが、その前は『丹波の森公苑』にもつとめていました。5年目になります。それまでは一般の会社で残業もしつつ目いっぱい働いていたのですが、子どもも大きくなったので、そろそろ自分のやりたいことをと思っていた時に、森公苑から「地域づくりのコーディネーターの仕事があるから来ませんか」と誘われたので、非常勤で雇ってもらって、地域の活動を始めました。地域の仕事をやるようになり、プライベートも地域の活動を

¹ 丹波の森公苑：兵庫県丹波市にある、豊かな自然の中で、様々な生涯学習、地域づくり活動など豊かな生活を創造するための県民による主体的な活動（生活創造活動）と「参画と協働によるこころ豊かな美しい丹波づくり」をみんな（住民、事業者、行政）で推進するための拠点。参画と協働を基調に、県民局との密接な連携のもと、篠山市・丹波市、関係機関・団体等と連携・協働して丹波らしさを活かした地域づくりを推進している施設。

するようになって、3～4年経つなか、今年には県の業務が終わるので、どうしようかと考えていた矢先にお声かけいただいて、“出会いサポート”という婚活の仕事を、週に2回、森公苑の中でやっています。“縁結びサポーター”という、これも県の仕事で、4月からお世話になっています。その前に3年計画（去年からの3年間）で県の仕事がありまして、去年1年かけて計画書をつくりました。あと2年活動しなければいけないので、活動推進委員としてコミュニティ・センターに週3回来る約束で、今年と来年は予算をつけてもらっています。

岡：それは前山地区の地域再生ですね。

北村：そうです。県内7枠あったうちの1つで、市も地域も出さなければいけないというタイプの補助金です。

岡：この仕事を、NPOで受けられたんですか。

北村：窓口は振興会ですが、NPOができたので振られたわけです。

岡：それはどのようなNPOですか。

北村：丹波市が25校区に“元気づくり事業”という5年計画で出しているお金があるのです。『丹波の森公苑』は、“県民交流広場”とあって、兵庫県の財産なのですが、それとは別にまた23年から5年、市がお金を出しています。

うちのNPOも23年から5年間でお金がおりています。23年に「地域をつくる」丹波市版のお金をどのように使うかという実行委員会ができました。中心は区長さん、自治会長さんなのですが、それ以外にも地域から来たい人がいたら入ってもらったらいいし、婦人会や敬老会といった各種団体の代表も来ていいよと言われ、私にも声がかかり参加しました。空き家の活用や、農産物、観光など5つの部会に分かれて、話し合いました。どこの部会からも、振興会という区長さんだけの集まりなら、任期が切れると終わってしまうので、もう少し長い目で見てもらいたいような仕組みが要るのではないかという話が出たのです。そこでNPO法人という枠組みをつくってやっていくべきだと、すごく盛り上がりました。それでは、「森公苑で活動をしている北村さんに助けてもらおう」という話になり、私としてはちょっとお手伝いするつもりでしたのに、NPO法人を立ち上げる書類づくりから丸投げされてしまいました。私自身、相談は受けてみたものの、NPO法人を立ち上げるなどということはやったことがありませんでした。でも、勉強になると思ったので、面白がってやっ

ていました。無事立ち上がって、理事さんを決めたりする時に、そのまま残って、今もずるずると1人でやっているみたいな状況です。

岡：NPOは独り立ちしているのですか。お給料は出ていますか。

北村：一応、地域づくりの事業のなかから活動費をもらっていますので独り立ちはしているのですが、お給料はNPOとしては出ていません。振興会のコバンザメみたいな感じなのですが、そのおかげで振興会が動かなくても振興会名の報告書ができあがるわけです。

岡：この報告書²は専門家の手を借りたりはされていないのでしょうか。

北村：自分たちでつくりました。イラストやデザインは知り合いに頼み、後半のハード部分は設計事務所が書いていますが、ソフト事業の部分は全て何度も文章を書き直しながら、自分たちで書きました。

岡：これは今から動く事業ですね。

北村：そうです。1年目にいくつか模擬事業としてさせてもらって、それぞれ継続できるのか、改善した方がいいのかを検討しながら、実践的な計画書にしたいとつくらせてもらいました。実際にそのなかから続いているのもあり、具合の悪いものもあります。最初はアンケート調査をするという話だったのですが、私1人では回らないので、アンケートはなしになりました。実際アンケートを取るよりも、来てくれた人に直接聞いた方が、生の声なので固いなあと思いました。「～するから来てくれる？」と誘えば、続けて来てくれるので、結局楽しみながら計画書をつくらせられました。今日も、最初から来てくれた人たちが、人数は少なくとも、行事があるたびに誘い合って、車に乗り合わせて来てくれます。

岡：プログラムはどなたがつくられるのですか。

北村：私が知っている先生に講師として来てもらっています。私のネットワークです。要望があれば、そこから新しいプログラムが始まることもあります。この間は、カラオケをしたいとの要望がありました。カラオケの機械はこのセンターにあります。「歌がうまい人」を集めるとなると、だれでも来にくいので、“健康カラオケ”と銘打って募集すると、みなさん来てくれま

² 「前山地区まちづくり計画書」丹波市 HP から一部ダウンロードできる。<https://www.city.tamba.hyogo.jp/uploaded/attachment/4000.pdf>

した。「時間、短いなあ」とか言われたりして。

岡：それはここ特有の雰囲気ですか。ひょっとすると西宮にしろ、神戸にしろ、人口の多い所でもできたかもというような感じですか。

北村：ここでも、本当に限られた人なのです。場所が場所だけに、車がなかったら来られませんから。だから私たちが今、一番考えなければならぬのは送迎のことです。「送迎がついています」とチラシには載せています。しかし、自分一人で頼むということは、地域性もあってどうもできないようです。少し前まで、試験的に循環バスが走っていましたが、現在は全市がデマンドタクシーを使うようになり、循環バスはなくなってしまいました。

実は、同じ市島の鴨庄という地区では、市が助成する前から自分たちで循環バスを走らせておられて、NPOがそのバスを運営するシステムをつくってました。このバスは別事業でしたので、この地区だけ循環バスが残っています。それならば、うちの地区も循環バスが始まった時にすぐにNPOを立ち上げて、運営を受けいれると言っていれば残ったかもしれないのですが、市がやってくれるからとのんびりしていたうちに、結局循環バスはなくなってしまいました。そんなわけで、最初NPO法人ができるようになった時に、バスが復活するという噂が流れて、「いつバスを走らせてくれるの」とずいぶん言われたのですが、遅すぎました。残念だったと思います。

今、日本財団などの福祉車両を、自己資金をいくらか出せば貰えるという話もあるので、地区内だけの、NPO法人の会員さん向けの事業として車両として何とかしたいという案は出ているのですが、運転手のボランティアが集まらないので、どうしたものかと思っています。

岡：来られているのはお年寄りが多いですか。

北村：そうです。今活動しているのは平日なので、65歳から72、3歳までの人が多いです。60歳で定年になってその後5年くらい働いて、敬老会などには入らないから、ちょっと自分の好きなことをやりたいなという人が多いです。子育て広場もやっていて、それは小さい子とお母さんが来ています。ヨガもやってみただけでも、続けるのは難しそうでした。

岡：こういう地域活動に参加するというのが、リタイアした、ある程度時間のある人のためなのか、地域の中で自分の居場所をつくるようなものなのか、そのあたりはどうでしょう。

北村：このNPOは、やっと1年半経ったところで、まだまだ振興会の手足と言いますか、色々な行事を言われてやるだけなのですが、地元のおじさんたちからは、例えば特産品をつくったり、都会から人を呼んできたりして、そろそろ事業を立ち上げて自立すべきだと言われています。でも私は、とりあえず安心してわいわいしゃべって、来てよかったなと思ってもらえる場所にしたいと思っています。ここの維持費は地域の上納金があって払っているのですが、少しずつは参加料をもらっていきたいと思っています。1回200～300円の参加費でも、毎週来ていると結構な金額になります。それでも来ている人は払って遊んでいってくれる。そのことが私は大事なことだと思います。こういうことが少し定着していけば、新しい発想が生まれたり、連携は生まれると思います。ここの人はNPOをつくるとか、助成金を取るといった新しいことには勢いはいいのですが、長期戦が苦手で、手を離してしまうみたいな面があります。

岡：確かに都会では起こりえないようなスピードで物事を決めることができますね。

北村：色々な事業を引っ張ってることが、「力がある」ことと思っている人が私の周りには多いですね。私はこのような場所が地域の中で浸透していき、一人でも二人でも喜んでくれる人が増えたらいいなと思っています。この点でも、男と女の考え方の違いがあるなあと思います。

岡：一人でも二人でも喜んでくれる人が増えたらいいなと思っている、その思いのもとは何ですか。

北村：私は他所から来させてもらって、仲間にしてもらい、ものすごく大事にもらっています。暮らす土地で幸せでいられるということは大前提です。その点で、自分自身の思いは叶っているのですが、次は誰にとっても叶ってほしいと思うのです。

岡：今やっておられるように、地域の中で活動しているということ自体が幸せですか。

北村：そうです。それも幸せです。

岡：自分が幸せに暮らせるということは、贅沢するとかいうのではなく具体的にはどんなことでしょうか。

北村：やっぱりこうやっておしゃべりできる相手がいったり、行ける場所があったり、安心して自分をちょっと出せる相手がいったりするというのはすごく楽ですね。やはり人です。

子どもは自分の親に対して絶対的な安心感があって、外に向かって色々な力を発揮することができるわけです。それは大人も同様で、色々なハンディキャップを持っていたり、生活が苦しかったり、自分の生活を成り立たせていくのは大変だと思うのですが、そのなかで話を聞いてくれたり、助け合ったり。ホッとできるとか、自分のホームになるような関係性がつくられれば、そこで始めて社会を良くしようというような活動の原動力になると思います。もし自分が不安定だと、そんなことはかまわれないと思うのです。

岡:でもその安定をつくるのも、周りとの関係ですよ。結局人のことをかまえる状態というのは、自分が安定して、そういうネットワークができていく状態なのでしょうね。

それはどこからか来たとか、ずっと前から住んでいたとかいうことは、きっと関係のない話ですね。

北村:そうかもしれません。考えてみると、色々な地域に雇用促進住宅はあったけれども、ここを選んで来たわけです。地元の人は、「選んでこんな田舎に生まれたわけじゃない」というようなことを言いますが、私は少なくとも選んで、ここの住宅にお世話になったわけで、またいつでも帰れるのです。母は西宮にいるし、子どもたちも別に住んで、私だけがここに1人で住んでいます。都会の友達に言わせると「めっちゃ不経済やんか。年も年だし、倒れてたらどうするの!」と。確かに不経済で、「なんで私、こんな所に1人での」と考えることもあるのですが、そう思いながらも選んで暮らしているのです。やはり選んで住んでいる所が、元気がなかったり、つまらなかったり、殺伐としたりするのは、嫌ですから。選んでいるのなら、何か自分ができることがあればしたいなという、私自身はそういう感覚ですね。

震災に遭ったことも、大きく影響しているかもしれません。明日はどうなるか分からない、と。

岡:場所というのは関係ありますか。こっちに来て楽になりましたか。

北村:それはないです。最初はしんどかったこともあるし、今でも不安だし、でもそれ以上に短い人生、せつかくここで生かされているのなら、ごちゃごちゃ言わずにやったら? そんな気持ちが一番強いです。

岡:神戸に帰るよりも、ここにいるほうが、居心地がいいですか。

北村:楽ですね。何かをしたら反応があるし、自分のやれること、やりたいことをきちんと伝えていけば、形になったりはしますから。

岡:やはり自分の思っていることが形になるというのは、1つの喜びである。

北村:そうですね。それと仮に形にならなかったとしても、今まで遠い存在だった行政の職員さんに「こんな事をしたいけど、どうやる」と聞くと、「今は無理だけど、そういう思いはわかる」と一言もらうと、立場は違っても同じ思いを持っている人がここにいるとわかっただけでも、それはうれしいです。そういう発見に出会うのは、たぶん都会よりは回数が多い気がします。

岡:自分の身の回りの環境を自分で考えるということをしてない人は、とても多いですね。自分が気持ちよく住むということに関心を持つ人は増えてきているのでしょうか。

北村:私も最初地域活動を始めたときは、「ねばならない」で、賛同者を増やすことに懸命だったのですが、表現の仕方もそれぞれだし、やりたいけれどもできない人もいるということが分かってきました。

“気持ちのワークショップ”という気持ちを聞きあうという活動を始めて、とても勉強になったと思います。やりたくてもやれない人がいたり、やり過ぎて行き詰っている人もいたり、いろんな人がいるけれども、要は自分が素直になれる場所があれば、あとは自分で決められるのだと思った時に、何か許容範囲が広がった気がします。

岡:“気持ちのワークショップ”というのはどういう方が集まっていらっしゃるんですか。

北村:子どもと女性の人権を守る“so-so.39”というグループがあって、今メインは6人で活動しています。学校に出向いたり、PTAなどでワークショップをしているんです。

岡:どこから活動費は出ているんですか。

北村:助成金をもらったり、メンバーが講師に行つて、講師料をもらったりして活動しています。このような活動の中で気付かされる部分があります。結局、決めるのは本人で、私たちは何もできないわけです。ただ溜め込んでいるので、しゃべれる場所さえあれば、しゃべりながら自分で考えて、自分で進む道を決められるのだなど、今も思っています。だからこの場所も、体

操をやったり、カラオケやったりしますけれど、みんな集まって来たら世間話になるんです。それをちょっと出すことによって、自分が楽になったり、発見したりして、自分で歩いていかれるので。

岡：それは家族が少ないからでしょうか。

北村：家族がいても、しゃべれないことはありますよね。行きずりの他人だからしゃべれることがあったりするから。

岡：でもここは閉鎖的と言えば、閉鎖的で、1人の後ろに家族がいて、親戚がいて、しゃべりにくいことはないんですか。

北村：でもしゃべる量とか、質とか、開ける窓は自分で決めることができます。だから全然しゃべらない人がいてもいいわけで、しゃべる人がいれば聞くし、共通のお話があれば、自分もしゃべるしという感じです。私はいつも根掘り葉掘り聞かないし、うわさ話はしませんし、「どう思う？」と聞かれたら、自分の意見を言うくらいで、それをしていて自分で決められます。ものすごく聞いて欲しいような人がいても、私は興味がなかったら聞かなかったり、スルーすることもあるんです。家族のことを思って、うわべだけの話しかしない人もいますが、それはそれでいいんです。その人がそうすることを決められたんですから。何度も同じことを言われたら、「何か気にかかることがあるの？」とふったりはしますが、それ以上話されなければ、それはそれで流してしまいます。やはり来られる当事者メインで、来られた方がありたいように過ごせる居場所ができればいいんじゃないかと思うんです。

岡：それは旧来の自治会等のメンバーではないところというのも、ものが言いやすいのでしょうか。

北村：先日“so-so.39”のメインのメンバー6人で飲み会に行ったんですが、そのお店の人が言うには、女性ばかりの団体で、しかも旧来の団体なら、普通は序列があったり、微妙な派閥があったりするものだけど、うちのグループはそういう雰囲気全然ない。メンバーは、みんなこの人なんですけど、なんとなく集まって、それぞれが何か困ったことがあれば言い合ったりしています。45から55歳くらいの年齢層でしょうか、年齢なども気にしないで、フランクにしゃべって、それは誇りかもしれません。

ここは閉鎖的なせいか、自殺率が高いんです。“so-so.39”の代表をやっている人も、丹波市から自殺者を減らしたいとの思いで、ずっと代表をやってくれてい

るんです。「何も言わずに逝くな」という思いが強くて、そういう場をつくりたいというのがベースになっているかもしれません。その時の気持ちにフィットする場所をいくつか持っていたら、楽になりますよね。その種類が少ないという面が、この地域にはあると思います。選択できないわけです。飲み屋さんがたくさんあるわけではないし、顔がさして、何かあっても愚痴がこぼしにくい。そういうのはやはり精神的にはよくないと思うんです。ある時は仲間内で話をして、ある時は全然知らない人と発散するという選択肢がない、どこに行っても知り合いに出会うというのは、こういう地方の残念なところかもしれません。

岡：こういう活動は、自分にとってと言うよりも、周りの人にとってということでしょうか。

北村：不思議なんですけど、自分も癒されるんです。私たちはアロマハンドトリートメントをやりながら話を聞いているんですが、マッサージをしている方が気持ち良くなってきて、すごく自分も癒されるんです。人のために、しんどくてもやるのでは、初めはできても続きませんから。話を聞いて、得ているものも多いんです。

岡：北村さんは、これは一つの自分の職能なのか、自分の居場所なのかどちらですか。これまでのヒアリングでも、「まちを元気にする」ことを職能として、その実績を他の地域で新たに展開されていらっしゃる方と、まちを元気にしながら、そこを自分の居場所として仕事とプライベートの切れ目なく取り組んでいらっしゃる方とがあるのですが。

北村：“気持ちのワークショップ”やしゃべる場などについては、有難いことに色んなところからオファーがあるんです。通常は私たちが場所を提供しているんですが、今回は小学校のオープンスクールに行くんです。「なかなか話ができない親御さんの話を聞いてほしい」と言われまして。

岡：どうやってやるのでしょうか。

北村：“気持ちのワークショップ”は、いろんなパターンがあって、小学校から高校まで行くんですが、クラスで気持ちの話をいろいろするんです。ワークシートがあって、気持ちの言葉を集めたり、低学年なら絵を描いたり、「最近、悲しいことで、どんなことがあった？」というようなことを言い合ったり。「集団カウンセリングか？」と言う人もいて、カウンセリングマインドみたいな感じはあるんですが、いろんなことを言い合っ

て、気持ちは出していいし、しゃべってもいいことなんだと言っています。今思っていることを伝えて、それを認めてもらえるのはすごく安心するから、そういうことをクラスでどんどんやってくださいということを広めているんです。怒ってても、怒るという気持ちは大事だし、「今、怒っている」と言えばいい。言う前に殴るなどということです。

岡：それは何か手法があるんですか。

北村：“CAP”を日本に紹介した森田ゆりさんが“気持ちのワークショップ”をやっておられて、私たちもそのトレーニングを受けました。ディスカッションというのは、意見に対して否定しても、人そのものを否定するわけじゃないのに、日本ではあたかも自分を否定されたかのように感じてしまうんです。それはトレーニングなんです、学校ではそれを教えてほしいですね。

そういう意味では、田舎の人もナイーブですね。Uターン組やIターン組とは話がしやすいですが、一度も外に出ていない人は、同質のなかで暮らしておられるから、意見を反対されるとパニックになってしまうところがあるんです。ですから相談するような体裁をとりながら、ちょっと意見を挟んでみるといった形とか、先方のプライドには、かなり気を遣った話し方をしないとうまくいきません。

岡：このヒアリングでお話を聞いていると、皆さん大企業に勤めている人はいない、そして自分の生活を大事にして、丁寧生きるというキーワードが出てくるんです。大きなものに巻かれずに自分で生きているとか、そういう人たちに会うんです。大学にいて学生を社会に送り込んでいる身として、全体的にみるとどう考えたらいいのかと。学生の8割が普通に就職活動をして、後の2割が就職しようとしませんが、こういう活動をしている人たちは、大きく色分けしてしまうと後者の方で、その人たちが地域を楽しくしているという状況は、どういうことだろうと思うんです。

北村：私もとにかく稼がなければいけない時期は、朝に出て夜に帰ってくるだけで、本当に少ししか活動できなかったし、そんなに手も広げられなかったわけですが、「自分のストレスの発散が活動であればいいな」くらいの住みわけで、やっていました。働かされているのではなく他の事もやっているということに、自分を安定させているみたいなのがあったと思います。当時は、シングルで子どもを育てなければいけなかったので、派遣で少しでも給料のいいところを探している状態で、仕事でキャリア云々というのは全

く考えていませんでした。ただそれだけというのが嫌で、ちょっと地域のことをやっていたり、自分の身銭を切って研修に行ったりすることで、何か社会と繋がったり、お金だけではない自分がいるということで、安定を保っていたのだと思います。だから仕事や家庭とは違うカテゴリーに何かがあると、バランスが取れるような気がします。

今の若い人は、消費することにあまり価値を見出さなくて、何かを作り出すとか、繋がるということに価値を見出しているような人が多い気がします。

岡：ヒアリングで伺った尾道などでもそうですが、家賃もほとんどいらぬような所で、パンを作って売ったり、陶芸をやったりで、ほとんど貯えがない、ぎりぎりの生活なんです。これで子どもが東京の大学に行きたいなどと言いだしたら困るだろうと心配する人もいるんですが、子どもは子どもで何とかするんじゃないのと、私なんかは思うんですけど。

北村：お金がなければ、関係性のなかで補おうと、すごくみんな親しくなったりして、その安心感というのは大きいです。

岡：佐治のスタジオに行くと、変に豊かですから。お金は全然ないけれども、お酒は山のようにあって、次から次へと季節のものは持ち込まれて、いろんな人がやってきて、いろんなものが溢れています。これは都会も田舎も関係なく、そういう人たちの集まりがまちを元気にしているような気がします。

今までなかった新しい人間関係で、べったりでもなく、あっさりでもなく、頼りきるわけでもなく、言いたい事は言える関係だけれども、何でも知っているわけではないという、そんな関係ですよ。

北村：“so-so.39”も、今4年目に入っているのですが(その前もそれぞれ関係のあるグループで活動していたのですが)、やっと今、言いたいことが言える関係になれた気がします。それまでは年上の私と、もう1人、他のメンバーより先に活動をやっていた人が、一方的に話をする感じだったのですが、今は誰の意見でも、きちんと反論してくれるような関係に、やっとなってきたんです。やはりそれも何となく信頼関係をつくりながら、それぞれがちょっとずつ成長するというか、「言ってみたもののダメだったけど、またトライする」みたいな事を繰り返しながら、トレーニングになっていたのだと思います。メンバーにとって、そういう場が心地よかったり、ダメ出しされても、それが結局のところ自分のためになるということを素直に感じて、そのことに貪欲になっている気がします。ですから発言し

て、自分で間違っただかと思えば、平気で「ごめんなさい、さっきの間違えました」と言えるわけです。だから訂正できるとか、謝ったりしながら、また会話を続けられる、そういう人間関係を持っているか、持っていないかは結構大事な話だと思います。

今、関係性が少しずつずれているから、日本人はコミュニケーション能力が低いなど感じます。

岡：でも、ずっと低かったのかもしれませんが。これまででは人口も多かったし、近かったから、摩擦のなかでごまかしながらきていたけれども、人が少なくなってきたことで、顕在化したみたいなきがします。

北村：田舎は特に同調圧力が強いから、きついですね。新しい人が入ってきても「ここに合わせてくれないと、困るんや」ですから。そのくせ、草刈り等の労働力は大いに期待されて、「これも、あれも、それも出てくれるか」と要求型になる。

岡：その要求型を乗り越えてこられたわけですね。

北村：それに関しては、非常にタイミングがよかったんです。雇用促進住宅の方は、管理人さんがいて、連絡網があって、それでよかったんですが、村に入ってその自治会に入るに当たり、自治会にお話を聞きました。その時の区長さんが、元先生だった人なのですが、自治会とはどういうものなのか、非常に丁寧に説明してくださったんです。月に一回の定会の話、川の掃除や、草刈り、公民館の掃除等の労働作業があるというお話と一緒に神社割というものがありました。地域に神社があるんですが、地域の人は氏子にあたるので、神社の維持費を年間〇〇円払っているということでした。このときの説明が、今でも秀逸だと思うのですが「信仰が関係なかったら、まして都会の人なら、わからないと思いますが、この地域の文化財を守るつもりで、寄付してもらえませんか」とおっしゃったわけです。お祭りがあれば、子どもも行かせてもらうわけですし、文化財を守るということならと、払うことにしました。お札はお断りをしているのですが、一応私は地域の文化財を守るというボランティアをしていることにして、今も払っています。その後に入った人の中には、区長も変わりますので、説明なしで、トラブルになったこともあったようです。前山はIターンが多いので、自治振興会でも話題に上がったようで、以降はそれぞれに自治会の規約もつくり、説明の仕方も考えて、だんだん変わってきました。

岡：それは外に開かれていく準備をしているようなものですね。

北村：そうです。それと代が変わると、Iターン以外にも自分の子どもたちにも説明できないわけです。ですからそれは良い機会だったなと思います。私の場合は、納得して払うことができたわけですから。そもそも私自身、氏子の意味がわかっていなくて、まずそこからお聞きしたのですが、誰も説明できない。でもみんな結構真剣に考えてくれて、面白かったです。考えてみれば、クリスチャンの方も学会の方もいらっしゃるわけで、説明するというのは、実は大事な話なんです。

第3章

ふるさと尾道・楽しい空き家再生でいい暮らしの場づくり

NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト

豊田 雅子

岡：当初はご自分の思いで始められた尾道の空き家再生¹に、どんどん周りを巻き込んでおられる状況が、外から見ていて率直に「すごい」という印象があります。まずは、ご自身がどういう思いでやっておられるのか、お聞きしたいのですが。

豊田：最初は本当に個人から始めました。アイデア自体はだいぶ前、尾道に住んでいた頃からありました。私は尾道で生まれて育って、高校まで尾道でした。大学が関西外国語大学ですので、大阪だったのですが、やっぱり出てみたら、「尾道はよかったな。帰りたい」と思っていました。でも英語が好きで、旅が好きで、ヨーロッパの街をブラブラするのが好きだったので、海外旅行の添乗員になろうと思っていました。関西空港が学生の時にできたものですから、そのまま残って添乗員の仕事を8年ほどやっていました。学生時代もバックパッカーみたいなことばかりしていて、仕事も旅三昧で、その仕事の休みもマイレージで自分の旅に行くという生活でした。

そのなかで、小さいまちをブラブラと見ていましたら、そこでまちづくりをうまくやっている魅力的なまちがたくさんあったんです。尾道も環境が揃っていて、古い建物も残っている方なのに、スクラップアンドビルドで、駅前なども再開発ですっかり変わってしまって、「もったいないな」という思いがあるなかで、空き家問題が浮上してきました。添乗員の仕事も一生続けるつもりもなかったのに、30代になったらこちらに帰ってこようかと思っていた矢先、母親が病に倒れまして、それが直接的なきっかけとなり、尾道に帰ってきました。

それ以降も仕事は大阪まで行って続けてはいたのですが、帰ってきた時から空き家を探していて、自分で第二の人生として、空き家を使って、民宿なりなんなりを運営しようと思っていました。6年くらい空き家を探していたのですが、その間こちらの人と結婚し、子どもも産みました。その子どもが2歳くらいの時に、

“ガウディハウス²”に出会って、買い取ることになりました。

岡：その前はどなたか住んでおられたんですか。

豊田：25年空き家だったんです。大家さんの家はすぐ近くであって、そこはおばあちゃんが今でも住んでいるんですが、跡取りもいないし、家も壊れかけていて、解体費もかかるし、どうしようと思っておられたところで、ちょうどよかったんです。それで個人的に譲ってもらって、夫婦でがんばって直しつつ、「この家を直して、もう一軒くらい直して終わりかもしれないけど、まだまだ直したい家があるよね」というくらい、良い空き家がいっぱいあったわけです。その頃、空き家に住みたいとか、探していると言う人がたくさん現れてきていたので、同じような思いでやっている人がいるのならと…。

岡：その情報はどうやって知ったのですか。

豊田：その頃は直接家を見に来る人もいっぱいいました。それからブログがその頃はやり出したので、ブログで毎日日々の「今日、こんな作業をしました」という報告をしていたので、そのコメントもありましたし、テレビに出たので電話がかかってくるなりして、「ああ、同じ思いの人はいっぱいいるんだ」と知りました。

一方で、私も6年探している間に、空き家の状況がよくわかってきていました。どうして尾道でこんなに空き家になったまま放置されているのかとか、空き家の情報がどうして出回らないのかとか。不動産屋さんに行っても情報がないんです。そういうことを肌身で感じながら、探していて、同じように「情報がない」と探している人がいっぱいいて、その辺りのノウハウを、尋ねてきた人に教えてあげたり、知っている空き家の情報を口コミで教えてあげたりしていました。「1人一軒ずつでも担ってくれたら助かるわ」という気持ちでした。木造だから、雨漏りしたり、シロアリが回り始めると、痛みが早いので、少しでも早く誰かが入って、直して住んでくれたらということと、1回解体し

1 NPO 法人 尾道空き家再生プロジェクト；2008年に、空き家の再生や空き家バンクの活性化事業を通して、古い町並みや景観の保全、移住者・定住者の促進による町の活性化、新たな文化・ネットワーク・コミュニティの工賃を図る目的で設立。http://www.onomichisaisei.com/about.php

2 尾道の斜面地に建つ10坪の木造住宅。昭和8年に和泉家の別邸として建てられた。2007年から空き家再生のシンボルとして、プロセスを共有しながら再生している。現在も進行中。ガウディのザグラダファミリアのようにいつ完成するかわからないという意味合いも含めた愛称。

てしまうと、もう建てられない場所ばかりなんです。やはりその古い建物で残っているから、尾道の景観が雰囲気を持たせているので、「それを担ってくれる人が探せないか」という声が上がりました。それならそういう団体にして、ネットワーク的に繋がって、尾道全体で古いものを大事にしながら、うまく活かして、自然に次の代に受け継がれていけばと考えたわけです。

ガチガチの「保存！」みたいなのはイヤでした。無茶苦茶にお金をかけて、きちきちに直して、でもあまり使わずに、博物館的になって、お金ばかりかかるといふ行政的な文化というのもどうかと思っていただけです。そうではなくて、その家の良さは活かして、悪いところは直しつつ、今の生活がしやすいようにリノベーションしながら、でも全体の雰囲気は保ちながら、という感じでしょうか。自然に色んな人が使って、使いながら次の代にという形が、自然で無理がないし、尾道らしいのではないかと考えました。

それで団体を立ち上げて、1年後に法人格を取得して、その翌年には尾道市さんと空き家バンクと一緒にするようにもっていきました。空き家バンクは4年ほどやっていて、70軒くらい決まりました。バンクが始まる前に、私たちが相談に乗っていた物件や、私たちが直して使っている物件も合わせると、この7～8年の間で100軒くらいになると思います。そんな感じで、できることは全てやっていくという姿勢で進めていますと、去年、一昨年くらいから、移住してくる人が絶えないという有難い状況になっています。

ただ、住宅程度の空き家なら、私たちもどんどん提供していただけるのですが、大型の空き家も結構残ってしまっていて、手をつけられないみたいなものもあります。元旅館や元病院、大きな町家など、個人が住むには大変な物件なので、そこでお金を生み出す仕組み、事業的なことを展開しながら、建物を維持して、次の代に受け継いでいってもらえるような仕組みを考えると、そろそろ私たちが担っていかねばならないのかなと考えています。

若い人が移住してくれるのは有難いんですが、なかなか仕事がなく、何かクリエイティブのような、若い人が生き生きできる仕事や場所をつくりたいと、商店街の町家のところでゲストハウスを一昨年オープンしました³。私も旅行業をしていたので知っているのですが、尾道は外国人にとっては穴場で、ガイドブックにも数行しか載っていません。尾道に限らず、西日本全体がそんな感じで、倉敷あたりから宮島まで飛んでしまっ、たくさん良いまちがあるんですが…。

岡:今の学生は尾道三部作⁴を知りませんから、尾道がどこにあるかさえ知らないですね。

豊田:東京物語⁵も尾道が舞台なのに、PR不足は感じますね。来れば良さがわかってもらえるのですが、知らされていないので、特に外国人や若い人にもっと知ってもらいたいと思います。今までビジネスホテルか旅館しかなかったところに、ゲストハウスができることで、尾道を知ってもらえる機会になればと思っています。ゲストハウスは一泊2,800円なのですが、積極的に滞在型の泊まり方ができる場所があることで、日帰りなら素通りするまちだったのが、一泊でも二泊でもして、まちの隅々まで見てくれる人が出てくればという思いです。一年経ちましたけれども、定着してきていると思います。外国人も増えて、結構色んな国の人が来ます。最初はよくわからないから一泊の予定で入ったけれども、面白いから連泊していかれる方もおられます。尾道を拠点にして、どこかへ行くという方など、そんな形で増えていけばと思っています。

最初は本当に会費でまわすだけのボランティアだったのですが、ここ⁶も含めて、直した賃貸物件が増えていったおかげで、ようやく自立した形でやっていけるようになりました。

岡:ここの所有はどうなっているのですか。

豊田:大家さんがいます。大家さんが放置していたのを、現状でいいから全棟を安く貸して欲しいと言って、借りて、直すべきところを直して、入居者を募集したわけです。住むところではなく、店やギャラリーや工房などで使いたい人を募集して、それぞれ入ってもらっています。

岡:今、尾道空き家再生プロジェクトのスタッフはどのくらいいらっしゃるのですか。

豊田:専属の全般の業務に当たるのが、私を含めて4人、“あなごのねどこ”が2人、あとバイトが7人くらいです。“あなごのねどこ”は毎日24時間稼働ですので、たくさんスタッフが必要です。予約のない日はめったにないですし、宿直も必要で、いい感じにはなっています。

ほぼみんな移住してきた人たちに入ってもらって、

⁴ 尾道出身の映画監督大林信彦が、尾道を舞台に発表した、「転校生（1982年）」「時をかける少女（1983年）」「さびしんぼう（1985年）」の映画3部作。熱狂的な支持を集め、ロケ地めぐりのファンを増やした。

⁵ 小津安二郎監督の1953年政策の日本映画。昭和28年度（1953）文化庁芸術祭参加作品。

⁶ インタビューを実施した場所、56cafeの入っている再生物件「三軒家アパートメント」；全室空き家となっていたアパート（旧楽山荘）をモノづくりの発信拠点として再生させた。

³ 尾道空き家再生ゲストハウス「あなごのねどこ」。2012年オープン。<http://anago.onomichisaisei.com/>

正式雇用としては2人しか雇えませんが、学生やバイトの子が移住してきて、仕事を見つけるまでの間働いてくれています。手に職がある子もいるし、自分で起業をしようと思っている子もいて、家でものづくりとかITとかデザインとか、波のある仕事ではありますので、尾道の中で仕事が見つけられれば、一番理想的なのですが…。駅も近いので、電車通って、隣町に普通に仕事に行っている子もいます。

岡：結構、尾道は大きなまちですよ。まちそのものの広がりや平野部分も結構大きいなど。

豊田：15万人ちょっとで、合併でかなり広がっています。

岡：外から来る人は、尾道のまちの魅力に気付くわけですが、帰ってこられた時は、尾道のまち自体はそんなに元気ではないと感じられませんか。

豊田：帰ってきた時よりも、出る前の方がもっと元気がなかったです。今から20年くらい前の私が高校生くらいの時は、商店街は死んでいましたね。

岡：私が尾道に来たのは、まだ雁木⁷があった時代でした。あの雁木がとてもきれいで、無くなると聞いて残念で、写真をいっぱい撮って帰りました。当時尾道は、坂のほうはロケ現場マップがあったのですが、むしろ私は海側の雁木と商店街の間の路地に井戸があったりするの、すごく楽しかったんです。あの頃、もう元気がなくなってきていたわけですね。

豊田：商店街自体も無くなってきていて、お祭りもあまり人が集まらなくなって、シャッター街みたいな感じになってきていました。私が大阪に出てから、駅前再開で、サーっと変わってしまいました。「帰らんとこかな」と思ったくらい、モチベーションが下がりました。

岡：前はどんな駅だったのですか。

豊田：駅舎はそのままなんです。駅の前がフェリー乗り場と言うか港になっていて、雁木があったわけです。それがホテルとマンションと立体駐車場などのビルが建って、それで海岸が見えなくなりました。ですからその頃まで、尾道は景観に対する意識が低いままだったのだらうと思います。変に景気が良くて、都会の真似をして、どんどんビルを建ててみたいな風潮でした。

その頃は、団体も何もやっていない小娘でしたが、「あんたらはわかってない！！」みたいな事を言っていたものですから、随分と「この小娘が何やねん」と思われていたと思います。

ヨーロッパを回っていると、“景観が共有の財産”という価値観が当たり前ですから、「都会ですっかり変わってしまったところはしょうがないにしても、尾道は戦火も免れて残っているのに、どうしてわざわざ潰すのか」と、「高さ制限もしないと、まとまった土地があると、すぐにマンション業者が外から来るから」と、盛んに言っていました。

駅前のビルが建ってしまった反対側にもまとまった土地があったんです。そこに13階建てのマンション建設計画が起きて、それができると駅を降りて山手を見た時に、それで全部見えなくなります。このときに、やっと反対運動が起こりました。そこで前の市長さんが買い取って、公園にしてくれたんですけど、それを契機に、景観条例をおかないとどんどん景観が悪くなるということで、本格的に条例づくりが始まりました。つくるところから私も審議委員として入ったのですが、「やっとできたか…」という思いでした。でも既に海岸通りなどは色んなものが建ってしまっていて、港町として栄えたんですが、その頃の名残は鞆の浦などに比べるとなくなってしまっています。3～4階建てのビルなんかが増えました。

そんなこんなが、この10～20年であって、まちづくりをやっている団体やNPOも増えて、まちも商店街もまた活気付き始めてはいます。

岡：そのまちづくりという視点、「まちづくりはおせっかいです」と私たちはよく言うんですが、おせっかいではすまないところもあるし、1人でやっても何も起こらないし、その辺りでどうやって巻き込めたのでしょうか。

豊田：私が活動を始めるちょっと前くらいから、古い空き家に住み始めた子がいたり、路地でお店を始める子がいたり、海岸通りの古いビルの一室でカフェを始める子がいたり、そういう点々の存在はあって、みんな仲良しだったんです。みんなのなかで「尾道って、こういうところがいいよね」みたいな共有の価値観があって、私もそういうのが好きだったし、もっとこうした動きが盛んになって、若い人の中で当たり前の価値観になっていけばいいなという思いがあったので、「これはもう、団体にしよう！」と思ったわけです。

岡：では地元の人たちというのは、どんな反応だったのでしょうか。

⁷ 船着場における階段状の構造物。潮の満ち干や河川の流量変化による水面の上下に係わらず昇降や荷役が出来るため、近代以前の船着場で多く見られる。

豊田：地元の人はいろいろで、UターンやIターンの人たちは尾道の良さをわかっている人がたくさんいるのですが、私たちの同級生でもずっと尾道にいる人は、車が入るマンションや山を崩してできた新しい住宅団地の一軒家がいいと思っている人もいて、本当に両極端ですね。昔から尾道にいる年をとった人たちのなかには、未だに「都会風にすれば、若い人たちが来るのではないか」と考えている人もいます。でもこういう活動をしていて、古い建物をこんないい感じに生まれ変わらせて、逆に都会の人が見に来るといのがわかると、目から鱗的なことをおっしゃる方もいて、わかってくれる人もいます。

岡：私が印象的だったのは、二軒目にきれいにされた洋品店⁸のリノベーションの仕方が、いかにもみんなでやったという感じで、あれはどのようにされたのですか。

豊田：最初にガウディハウスを買って、北村洋品店も買ったんです。全く対照的な家で、ガウディハウスは本当に職人さんが、いい時代に、いい材料を使って、お金をかけて建てた建物で、これについてはアシスタント的に手伝うことはあるんですが、やっぱり表面の仕上げなどは、職人さんをお願いしています。その時建てた職人さんの思いも受け継ぎたいし、大家さんの思いも大切にしたいと思っています。ですから変える気はないですし、そのまま復元しようと思っています。また使い方も、そのままではしか使わないつもりです。

逆に北村洋品店は、戦後の昭和30年代に適当な材料で建てられた建物で、建築的には意味のない建物です。戦後の下町の雰囲気と、その辺りは商店街がいっぱいあったものですから、その名残の洋品店として、三角の屋根とか、ウィンドウとか、昔の木製の建具等も全部残っているので、そういうのをうまく残しながら、逆にみんなでつつついて、付加価値をつけるとともに、そのプロセスをみんなで共有したいと思ったわけです。逆に家をつくるということを経験して学ぶための素材として、北村洋品店は再生しています。

岡：そのみんなというのは、リノベーションをしようと集まってきた人たちのことですか。

豊田：リノベーションを考えている人たちもですし、一般の人も募集して、10回くらいワークショップをしました。「壁塗りとか、床張りとか、タイル張りとかしますよ」ということで。

岡：それは空き家再生プロジェクトの中でやっているのですか。

豊田：そうです。洋品店は相当傷んでいて、構造をかなり直したんです。その後に表面の仕上げの部分を10回くらいにわたってワークショップをして、職人さんに教えてもらいながら、みんなで壁を塗るのを学んだりしました。ですから仕上げは素人の仕事です。もっとも仕上げはそんなにきれいでなくてもいいので、逆にみんなも勉強できて、みんなの手が加わって、その家に対する愛着を持ってもらえればと考えたわけです。そんな形で洋品店の方は直しましたので、2つの家は本当に対照的であると言えます（ガウディハウスはまだ完成していません）。北村洋品店の方は、タイルのデザインを幼稚園でもらったりしていますから、延べ100人くらいの手が加わっています。

岡：それは「こんなのやります」と言えば、集まるものですか。

豊田：集まりましたね。大きな家ではないので、1つのワークショップにせいぜい10人ずつくらいです。同じ人が来る場合もあったし、違う人も来ています。いろんな箇所に、アーティストさんの作品として作ってもらっていて、アーティストさんも5～6人入っていますし、いろんな人の手が加わって、面白おかしく家を直すことができたと思います。

岡：行政のやるワークショップは、来る人がいつも同じですし、行政から一生懸命声をかけてという形が多いのですが、きっとそのワークショップ自体が面白いんでしょうね。どういうふうにするんですか。

豊田：チラシを作って、ネット等で募集したりして、来てもらい、職人さんを紹介して、一緒にやり方を教えてもらって、みんなで作業して、一緒にごはんも食べてという感じですね。

岡：その時は、お金を取ったんですか？

豊田：もちろん毎回取ります。内容によって違いますが、お食事つきで1,500円とか2,000円とかですね。助成金が取れている分は、少し安くなって1,000円から2,000円くらいの間です。

岡：助成金がなくてもやっておられるんですか？

豊田：やっている部分もあります。助成金も工事費などは出ませんから、職人さんに対する謝礼と材料費く

⁸ 北村洋品店；かつては「子ども銀座」と呼ばれていた通りにある元洋品店を再生し、子連れママの井戸端サロンとした。

らいです。ですから参加費で食事代と諸々の何かが出ればいいという感じなので…。

岡：豊田さんの取り分は？

豊田：ないです。職人さんにちょっとでも多く払おうと思ってましたから、一つもそういうことは考えてなかったです。ですから最初の3年くらいは、私は1円ももらわずに、ずっとやっていました。家を2軒買って、持ち出しばかりでした。ワークショップに携わってくれた人もいるし、学生さんの頃から手伝ってくれて、今スタッフをやってくれている人もいますし…。

ワークショップは、単発の日帰りのワークショップもあるし、夏合宿として、1週間泊まりがけで、全国に募集して、一気に1週間で直しました。大学生向けで2回くらいと、小学生向けに1回やりました。今まで4回くらいやりました。

岡：それは尾道の違う家で、ということですか？

豊田：はい。1回目の夏合宿は、ものすごく人が多くて。

岡：そういう、いっぱい人に来てもらうというのは、何を狙っているのですか？

豊田：本当に人手も足りないし、お金も足りないし、でも素材だけはあって、大家さんは持て余しているわけですから。尾道にはその素材をつつきたい人はそんなにいなくても、都会にはいっぱいいるわけで、全国のまちづくりとか建築系の学生さん向けに、大学等にビラを配ると、てきめんに来てくれます。

岡：それは尾道の魅力でしょうか。

豊田：都会では、やってみたくてもできる素材がないですし、つつける家などそうそうないですから。やることはてんこもりなんです。作業は毎日するし、まち歩きもするし、ワークショップもしたりとか、その間に課題を出して、それを発表させたりだとか、夜も毎晩で、すごいですよ。

岡：それ、全部付き合わなければいけないでしょう。

豊田：最初は全部付き合っていましたけど、だんだん今は分業できるようになって、ましになってきました。最初の1回目の時は、家の中で、その家に泊まりながら、昼間は直しながら、その家で昼ごはん晩ごはん食べながらみたいな感じで、今思えばよくやったよねと。2回目は、その近くでカフェを開いた人がいたので、

ごはんはそっちで、寝るところも2軒あったので、分泊するとかで、直すところと生活の場所を分けることができたのですが、1回目は全部同じで大変でした。

今年の夏はやるかどうかわからないですが、去年の夏は大学生と地元の小学生をドッキングさせて、4日間ぐらいに短くしてやりました。物件さえあれば、随時やっています。

岡：それはワークショップをやるのが目的なのか、家を直すのが目的なのか、どっちが目的？

豊田：最初のきっかけは、この家を直そうという思いだったのですが、終わってからは人の繋がりとか、みんなの達成感というのは、大きいですよ。

岡：そういう人たちがリピーターになって、友達を紹介してくれたり…。

豊田：そうですね。毎年来てくれる子や繋がりのある子はいっぱいいますし、そのうちの2人くらいはうちのスタッフに来てくれています。有難いことだと思っています。それで尾道を知るきっかけになって、移住して来ないにしても、自分の住んでいるまちや故郷で同じようなことをやり始めている子もいます。みんな何か持って帰ってくれたり、活かしてくれたりしています。特に建築系の子が来るのが多くて、「就職する前に、実践の場で、自分もやれ、職人さんとも関われ、現場の雰囲気味わえてよかったです。尾道が第二の故郷です」と言ってくれるから有難いです。未だに遊びに来る時は、連絡をくれて、集まったりしています。

岡：「人を巻き込めばいいかも」というのは、直感ですか？

豊田：私は何もできないからだと思います。観光畑で育っているので、英語は多少しゃべりますが、建築の学校に行っていたわけではないので。インテリアコーディネーターの資格だけはとっていて、多少知識がある程度で、家が好きという思いだけで、大工仕事ができるわけでもないし、アートの何かつくれるわけでもないし、デザインができるわけでもない。好きだけど何か突出してできるものが1つもなくて、でもまわりにはそういうことができる人がいて、その人たちの力を借りることで、何とかしたいという感じでした。逆に力を借りないとできないから、巻き込ませていただいているという感じです。

もともとボランティアで始めているので、移住者さんにデザイナーの人がいれば、「お金はこれだけしか払えないけど」と安くデザインしてもらっていて、でもその分、うちを通してそのデザインが表に出て、仕事

が本人に来るようになる。せめてそれが私に出来る最大限のお返しでしょうか。でも今ちょっとお金が回るようになってきたので、出せるときにはしっかり出していくようにしたいと思っています。

最初は本当にそんな感じで、今考えたら「よくやってくれていたな」という感じです。お世話になった方が、山のようにいて、それだけに「続けない」という思いです。最初は、「いかだで大海原に出ているようなものだ」とよく言われました。今考えてみると、子どもを二人抱えてですから。

でもみんなの中に、絶対的な価値観のようなものがあって、協力し合う、助け合う、お互い様みたいなぬくもりを感じることができました。

例えば誰かがパン屋をやるとなると、オープンするまでみんなで手伝って、オープンしたらお店でも個人的にも、そのお店のものを使うみたいな連携が、色んなところで出てきています。

岡: “ネコノテパン工場⁹”のパン屋さんなどは、私たちは美味しいと思うけれども、なかなか一般受けしにくいですね。だからみんなでサポートしてというのは、大きいですね。

豊田: うちのカフェでも入れています。夢を持って尾道に来ている人が多いですし、技術を持っている人も多いので、それをみんなで盛り立てています。

岡: 尾道だからというのは、どうしてでしょう。

豊田: この狭さかもしれません。若い人同士で、知らない人はいない感じです。地元の若い人は別として、移住してきた人や、何か活動している人たちの間では、顔見知りではない人のほうが珍しいです。

岡: 移住してきた人というのは、東京を離れたい、街を離れたいという気持ちなのでしょうか。生活のスタイルの価値観が変わるからでしょうか。

豊田: でしょうね。人にもよりますが「ライフスタイルを変えるために来ました」とか「車をやめました」という人もいますし、畑をやって半自給自足的な生活をしている人もいますし、「時間に追われる生活はイヤだ。自分のやりたいことをちゃんと、丁寧な生活がしたい」という方もいらっしゃいます。家賃が安いので、やりやすいのかもしれないですね。

岡: こういうヒアリングをしていると、「丁寧な生活」

という言葉が、結構出てくるんです。会社勤めをして、8時間プラスアルファで繋がって、「さあ、遊ぼう」というのではなく、もう少し日々の生活を丁寧にしたら、自分のまちも丁寧に見られるし、いいまちでないといやだと。

豊田: 一般的には「町内会活動や地域活動をしていますか?」と聞くと「今は仕事で忙しいから」という言葉が、30代から40代くらいの若い人から返ってくるけれども、その価値観ではないところにあるのかなど。

まちとしては、そんなワークショップをやっているというようなことも、まちの魅力の1つなんではないでしょうか。どこどこへ行ったら何かをやっているみたいな状態ですよ。

尾道は小さなイベントをいっぱいやっています。ライブイベントも毎週のように、どこかのカフェでやっていますし、自主企画のイベントも個人単位でたくさんやっていますし、それプラス、まちのお祭りや新しいマルシェができたり、常にやっています。

岡: それはまちが元気な状態だと思うのですが、それで忙しくしているのではなくて、より丁寧に生きているということもあるのでしょうか。

豊田: みんな自分のスタイルを持って、自分の生活を大事にしようとしている人が多いので、「～をやっている誰々さん」という感じで、みんな自分のやりたいことがあって、夢に向かって頑張っている人もいますし、もう実現して活動している人もいますし、何をしたいかわからず、とりあえずいるみたいな人は少ないですね。移住者は特に、思いを持ってやってくる人が多いので、私たちもそういう人たちの相談に乗りつつ、とても刺激になるし、逆にエネルギーをもらえたり、まち自体が、人が人をつないで、また面白くなるという感じです。

岡: そういう人たちは、永住するとか、代々住むとかとは違う感覚なんですか。

豊田: 違いますね。

岡: でも、そんなに無責任なこともない…。

豊田: そうですね。最近は夫婦で来られたり、子連れで来られたりすることも多くて、普通に地元の町内会に入っておられます。

岡: でも豊田さんが、大阪で暮らしておられる時は、町内会なんて入っておられなかったでしょう。

9 空き家再生物件に入居するパン工房。 <http://pan.catnote.co.jp/>

豊田：入ってなかったです。特に私は、家もなくてもいいんじゃないかというくらい、家にいなかったの。地域と繋がってという生活とは全く違いました。住んでいる場所も場所でしたし。

私がちょうど帰る頃に、大阪も空堀とかの動きが出てきた時で、本当に入れ替わりだったんですけど、そういうまちに住んでいたら、違っていたのかもと思いますけど。

普通にワンルームを借りて、ほとんど家にいない生活ですから、尾道に帰って、「やっと人間らしい生活ができる」と。大阪の場所にもよるし、ちゃんと自分が地域とコミットしていればいいという話なのですが、私には大阪は広すぎて、尾道のこのスケール感が私にはちょうどいいのだと思います。駅から商店街の端まで行って、2kmくらいなんです。昔からこのくらいのなかで生きているので、一番安心する快適な感じなのだと思います。都会の人には「田舎すぎてちょっと」というところなのでしょうが、北に行けば山があって、南に行けば海があって、方向感覚が全て尾道の中でインプットされてますから、平野ばかりという所は落ち着かないんです。いい意味でも悪い意味でも、人が近いということが当たり前なまちなんです。

岡：人が近いというのは、どういう意味ですか？

豊田：まず、家が近い。車もない時代に築かれた町並みなので、道路も狭いから、歩く時も人が近いし、本当にうちの家なども、外の壁を共有して建っていたりします。けんかをしていても、子どもを叱っていても聞こえるし、晩ごはんの匂いもするし、二階で洗濯物を干していたら、下の通りを歩く人と目が合うし、プライバシーも何もありませんが、人の気配があるという安心感がありますね。ですから大阪で1人暮らしをしていた時は、常にテレビかラジオをつけていましたね。寂しいと思って。人が近いということに慣れて育っているところがあって、どこどこに行けば、誰々に会えると言いますか、商店街を歩いていても、絶対に誰かに会わずに済むということはないです。「これが食べたい」と思えば、あそこへとか、「これが欲しい」と思えばあそこへと、人の顔が浮かぶという、人の近さが、私は心地いいと言うか、安心なのだと思うんです。

岡：そういう所では、個店があって、それぞれの人が雇用されているのではなく、自分が何かをやっているということになってきますよね。

豊田：だから尾道商店街は元気なのではないでしょうか。大手のお店がないので、個店がほとんどで、それがまだ守られています。

岡：あれがギュッと集まったら、もっと賑やかになるのでしょうか、でも店自体は増えましたね。私は今日、海に行く路地を行ったり来たりしたのですが、小さなアクセサリ屋さんやご飯屋さんが路地に増えましたね。表が空いているから表に行けばいいのに、路地がいいんでしょうね。

豊田：そういう感じで、商店街は頑張っていると思います。新しい人も古い人もよくやっていると思います。

岡：でもお子さんがおられて、ママ友はそんな人は少数派なのではないですか。

豊田：地元のお母さんたちは、都会の方が好きだったり、新しいものが好きだったりしますけど、移住してきている人たちのお母さんたちは…。

岡：移住してきている人に、そんなに子どもがいるんですか。

豊田：いっぱいいます。パン屋さんも2人目が生まれましたし、この界限だけでも5～6人生まれていますよ。大分と平均年齢を下げていると思います。

岡：もともとの人口が少ないから、何人か移住してきて、子どもが生まれたりすると、結構影響するんですね。

豊田：ここで生まれて、来年一年生になる子も出てきているかな。色んな年代の人がいて、健全なまちになりつつあると思います。今までは70歳以上しかいないような町内も結構あったんです。空き家がいっぱいあって、1人暮らしのおじいちゃんやおばあちゃんがいっぱいいて、そういう所に若い人が子連れで来てくれて、町内会も入ってくれて、本当に健全な形になっているところもいっぱいありますね。

岡：行政施策で「子育てのできるまち」を標榜するのが、私はいやで、「そういうのでは人は来ない」と思うんですが…。

豊田：尾道では、そういうのが施策としてではなく、自然にそうなったと言いますか。私も車が入らないようなところに住んで、今もそこで子育てをしています。車が入らないからこそ、子どもが飛び出しても安心ですし、裸足のまま走り回って、昭和の下町のような風情が、未だに残っています。

岡：そういう政策ではないけれども、結果的に子育てのまちになっているということですね。

豊田：それで上手におしゃれに暮らしている夫婦もいて、そういう暮らしぶりが「ああ、いいな」と共感を得て、またやってくるというのもあると思います。

岡：でも、帰って来なかったら、全然違う生活というのもあったでしょう。

豊田：海外で暮らしていたかもしれません。イタリアかフランスあたりに移住していたかもしれません。駅前が再開発された時は、日本に住めないと思いましたから。私の場合は、母が病気になって、引き戻してくれたのが、大きなきっかけでした。

尾道は、まちの規模のわりには若い人が多いとよく言われます。

岡：それは1人ずつだから、「さあ、いらっしやい、大集合！」とやったわけではないのに…。

豊田：来た人が、いい感じで発信してくれて、その循環だったのだと思います。

岡：でも結果的には空き家を再生していったら、まちが若返ったわけですね。

豊田：空き家は負の遺産ばいですけど、見方を変えれば宝の山だと思っていて、直したりしなければならなので、大変ではありますが…。でも家賃が安かったり、自由にリノベーションできるという自由度が高かったり、そういうことが若い人にはうれしいみたいです。

岡：その価値観は一時的なものなのでしょうか、それともずっとそれでいくのでしょうか。

豊田：人にもよりますので、どうでしょうか。もう買い取ってしまって、しっかりリノベーションして、住んでいる人もいます。

岡：おしゃれに住むというのは、結構キーワードですね。海が見えて、おしゃれに住む…。そうやって住もうと思ったら、東京では家賃10～20万ですから、東京では住めないですね。

豊田：考えられないですね。5万円くらいでも高く、3万くらい…。車が入らないし、家も古いですから。その分、逆にお金をかけて内装を直すとか、家賃がいらぬ分、そんなにガツガツ働かなくても自由な時間が取れるとか、そういうことがうまくできる人はいいます。

岡：皆さんが住んでおられるのを見ると、本当に丁寧に暮らしておられますよね。

豊田：団地でも色んな面白そうなことをやっていらっしやる場所はありますよね。

岡：やっているのはやっているのですが…。いくら子育てのための住戸プランをつくるとか、子育てをしやすいまちにするために助成するとか、医療施設を整えるとか、そういう政策が出るのですが、どうも根本的に違う気がしているんです。それはあった方がいいけれども、もっと日常的なことで大事な事があるのではないか。ご近所のつきあいとか、日常的な満足度みたいなもの、例えば美味しいものが食べられるとかそういうことも含めてです。

こういうヒアリングをしていて、大変だったことを、御本人は絶対に自分から言わないんですが、一番困ったこととか、一番大変だったことはありますか。

豊田：身体的には大変でした。山の上まで土嚢袋を下げて上がってとか、肉体的労働というのは、それはもういっぱいありました。荷物がいっぱい残った家の片付けとか、傍から見たら、大変だと思います。ただ、楽しむようにしているので、あまり傍から見るとは思いません。

岡：楽しいのは、日々楽しいんですか。

豊田：日々ですね。みんなたぶんストレスの少ない生活だと思います。

岡：でもやらなくてはいけないことも、結構あるでしょう。

豊田：ありますね。でもなんとかしながら…。ものわがりの悪い大家さんだと、大変だったりしますが。毎回言うことが違う大家さんとか、誤解されるとしんどいなというのはあります。私たちが紹介した人ではなく、移住してきた人で、あまり地域に溶け込めない人とか。

岡：そういう人たちは、どうやって地域に溶け込ませるんですか。

豊田：私たちが紹介する場合は、必ずその地域の町内会長さんを紹介して、なるべく町内会に入るように言っています。結果的に入るかどうかは本人次第ですが、どこの地域も先駆者的に移住してきている人がいるので、そういう人たちを教えてあげて、アドバイスしてもらっています。

岡：住むことのテクニックというのは要るでしょう。

豊田：今は楽になっていますけど、最初の頃は古い人たちの所に入っていきわけですから、大変だったと思います。でもそういう人たちが地域に溶け込んでくれるから、後の人が入りやすい状態にはなっています。みんな仲がいいですね。

岡：それはなぜなのでしょう。

豊田：やっている事は違う分野でも、大きなベクトルが一緒なのが大きいかなと思います。

岡：新しく入ってくる人が地域に溶け込むという意味では、豊田さんの立ち位置というのは重要ですね。もともと地元の人だから、地元にとっての安心感はあるでしょうし。

豊田：私が移住者だったら、また違った結果になっていたかもしれません。

岡：「これはまちづくりだ」と、いつごろから意識されましたか？

豊田：「空き家をどうにかしたい」という思いから始まり、空き家のなかでもコミュニティをつくりたいと考えて、移住者さんを繋ぐということ、一生懸命にしていたので、途中から「空き家を使ってのまちづくりなのかな」とは思いましたが…。あまり行政的ではなく、クリエイティブな部分は絶対に持っておきたいというのはずっとあって、面白く、魅力的にという意識は常にあります。だからデザインにはこだわるようにしています。若い人の感性を惹きつけるのは非常に大事で、若い人にまちに関わってもらって、実際に自分たちの手でまちをつくっていけるまちにしていきたいと思っています。行政のまちづくりは、会議室でおじいちゃんたちが並んで、承認だけして、ちゃんちゃんで終わり、大きなお金が動いて、箱物が絡んできてみたいな、それがまちづくりだとはどうしても思えないんです。もっとまちづくりは、市民が手を動かして、汗をかいて、実際に目に見えるものにしていくべきだと。自分がやったことが、ちゃんと目に見えて変わっていく実感がないと若者には響かないと思います。私たちの場合、一軒二軒直していくうちに目に見えてわかりますから、伝わるのも早かったと思いますし、行政にもわかってもらえたと思います。自分で手を動かして、店をつくったりする若い人がいるので、そういう小さな事例の積み重ねで、まちが活気付いているという実感は、みんな持っていると思います。それができるまちであり、

まちのサイズであるということではないでしょうか。

尾道に限らず、日本全国どこでも、そういうことができているまちは多いのではないのでしょうか。大きなまちだとお金もかかるし、規模も大きくて、なかなか難しいけれど、小さいまちで負の遺産になっているモノを、安く活用することで、実際に目に見えるというパターンだと思います。

岡：目に見えるモノというところで、お店をやるとか、ものをつくるとかというのは、わかりやすいですね。またお店をすると、店の人と来る人とが話しもするし、繋がるからなおさらよいということでしょうね。

豊田：この何年かで、マーケットみたいな市場も新しくできて、お寺の境内で“手仕事市”というのをやっています。

岡：それはここの人ですか。

豊田：尾道の人で、この上を借りてくれている人です。春と秋にやっています。そういう人の動きもあるし、食料品系が中心で、オーガニック系のマルシェみたいなものを、商店街の公園で毎月1回やっているお母さんもいます。

岡：そういう人とはどうやって繋がるんですか。

豊田：その人はご主人が尾道の人で、子育て中で、ご本人はこうした活動をやりたいと思われたわけですが、ママさん同士で仲がよくて、手伝う人がどんどん出てきたという感じですね。別のNPOでは、パラソル付きのおしゃれな移動屋台で週末だけやる移動マーケットをやっています。そういう若い人が始めたマーケットが3～4つあります。

岡：高校の文化祭みたいですね。

豊田：そうです。みんな乗りよくやっています。そういうことの相乗効果で、最初は買う側だったのが、出店する人になったり、さらには本当のお店を出すようになった人もいます。

岡：その辺のハードルが低いんですね。それはまちのせいですか、人のせいですか？

豊田：みんな、そんなに難しく考えず、「とりあえず、やってみよう」みたいな感じで、みんなが手伝ってくれるものですから…。何かイベントをするにも、音楽は「あの人に来てくれる」、食べ物は「あの人が出店してくれ

る」と、役割分担ができていて、普段はみんなそれぞれ活動をしているけれども、いざ何かをやるとなると、フォーメーションを組んで色んなことができるという体制にはなっていますね。ですから何か始めようと思う人がいたら、手伝ったり、アドバイスしたりというのが当たり前の雰囲気になっています。またサロンのような場所がまち中に色々あって、そこで情報交換したりしています。

岡：9時5時で働いていたら、なかなか難しいですね。

豊田：働いていたり、通勤に時間がとられると難しいでしょうね。ここは時間の余裕のある人が多いのは事実です。団体としての活動も、8年目に入り、裏方から次の人を育てることもしていかなければいけないとも思っています。

岡：今はまちが、このお陰で来ると楽しいですから。

豊田：個人の方が来られて、見て歩ける場所が増えてるので、尾道の面白さを、もっと面白くしてもらえらる要素が、この何年かで増えてきました。

岡：昨日は実は倉敷に行ってきたのですが、非常に修景が進んでいました。ただ修景した家に誰も住んでなくて、民芸品などの良いお店はあのエリアにはなくて、ちょっと離れた裏側にあったりして、そういうまちづくりの方向もあるのでしょうか、こちらは人からですものね。

豊田：ぶらっと歩いて楽しいまちになってほしいと思います。色んな発見が多いと言うか、穴場が多いというまちにしたいです。

岡：前回のヒアリングで松戸に行ってきたのですが、駅前の古い分譲マンションの空き家に、現状復帰なしの条件で全部引き取り、サブリースで改装したい人に貸すという取組みについて聞いてきました。そこでも一番気を遣うのは、元から住んでいる人との関係だと言っていました。

豊田：昔からの人も新しい人もお互いに歩みよりは必要だと思っていて、「全部郷に従え」では若い人は嫌だし、勝手に来て勝手なことをされても嫌だろうから、そこは個人の繋がりや、お互いさまでどうにかしてほしいと思っています。最初の紹介はしますが、後は生活をしながら、日ごろの挨拶だったり、ゴミ出しだったりというところで、本当の住人になっていてもらえたらと思います。だから子育てしている人や、夫婦

の人はうまくいきやすいのですが、特に男性の単身だと難しい面があります。今、尾道では夫婦の方が多いから、安心して見ていられます。御主人が無口でも奥さんが近所づきあいしてくれていますし、子どもがいればなおさら、近所の人も喜びますから。

子どもができてから、ご近所との関係がよくなったという御夫婦もいます。最初は生活の時間が違うので、難しいところも多いです。9時までにゴミを出すルールなんですけど、古い人たちは8時までに出して、9時前に出すのが悪いみたいな暗黙のルールがあったりするんです。遅くまで働いて帰ってきて生活の時間が違う若い人には気の毒です。夜に集まって鍋パーティーをすると、「うるさい」と怒られたり、音の問題やゴミの問題はあるのですが、そういうのはお互い様なのではないかと。お年寄りにしてもお年寄りばかりだと、災害が起きた時に、誰が助けてくれるのかという面もあるわけで、そういう危機感も持っていたきたいとは思っています。みんな自分の子どもたちがいずれ帰ってくるかと言えば、帰ってはこないんです。そこは割り切って、この場所が好きで、ここに住みたいと移住してきている若い子がいるのなら、歩み寄ってほしいとは言いたくもなります。これまで何も考えてこなかったから空き家が増えてしまったし、地域の人がそれを動かそうとすることもないし、お年寄りの人ばかりだと、そういう時間感覚に慣れすぎてしまって、それはそれで若い人たちにとってはしんどかったりもするわけです。本来、普通の場所なら、色んな年齢層の人たちがいて、子どもの泣いている声もあって当たり前なので、それはそれでちゃんと受け止めてほしいとは思っています。わざわざ不便な所に、古い家を買って住んでくれているわけですから、そういうところだけでも評価してほしいと思います。帰ってこない息子より、よっぽどいいと思うけれども。結局寂しいんだろうなと思える気の毒な大家さんもいっぱいいますよ。

第4章

ハイセンスまちづくり・“やりたい”を実現させる達人

株式会社 地域環境計画研究所

若狭 健作

岡：色々活動されていますが、まちを元気にするという活動としてどのようなものがありますか。

若狭：もともと尼崎が一番のフィールドなのですが、その他のフィールドでいろんな活動をしています。

尼崎市からの受託事業としておこなっている富松団地の指定管理¹もそのうちの一つですし、今年度から始まるのは、尼崎市の生涯学習や社会教育を見直し、団塊世代や定年後の人たちだけでなく若い人がもっとまちに関わるきっかけをつくるようにフレームを調査する仕事もしています。尼崎運河クルージング²や、“尼いも³”の復活栽培プロジェクト、フリーペーパーの『南部再生』⁴をつくったり、今度、尼崎市が都市計画読本をつくることを事業化しているので、そのプロポーザルに手を挙げているところです。

また、尼崎には“21世紀の森”という構想があります。2003年くらいからスタートして、100年間をかけてこの一帯の環境を再生していこうという構想なのです。それに基づいて「中央緑地」が、この10月から本格的にオープンするので、今、様々な工事が進んでいます。ただ臨海部にはなかなか人が行かないので、市民の方々が積極的に使ったり、管理運営に関わっていくことを目指して、昨年からは毎月1度“森の会議”を開いています。自分たちの活動やこれからやりたいことを披露しあって、ここでやれることを考えるという会議で、いわゆるプラットフォームのコーディネートを見せて頂いています。

例えば、タンデム自転車（二人乗りの自転車）は、兵庫県では道路交通法で公道でも乗れることになっています。しかも臨海部は自転車道（尼っこりんリン・ロー

ド⁵）がきれいに整備されているので、中央緑地へのアクセスにこのコースを使って、タンデム自転車で走ろうか、ラジコン飛行機の愛好家の方は、このあたりでは飛ばす場所がなくて、和歌山まで行っているようなのですが、この森ならば誰にも邪魔されないの、ここで飛ばせないか、ヨガをやっている先生が、ヨガの教室ができないかなど、市民のやりたいことをここで実現するための場として、提案してもらっています。

今までは公共空間と言うと、役所に申請を出して、それがいいか悪いかの判断しかされてこなかったのですが、その間に緩やかな民意を咬ませたいと考えました。それがこの“森の会議”なのです。皆さんの前でプレゼンをすると、市民の方からも「それは危ない」とか「それはこんな問題がある」といった指摘も出てきます。今までは役所が一方的にそれを言うだけだったのですが、「役所はそう言うけれども、こういう方法があるんじゃないか」というアイデアを出したり、知恵を絞りながら、みんなでこの公共空間でやりたいことを実現しようということなのです。

岡：その「緩やかな民意」は、どのようにしてつくりあげているのですか？

若狭：事務所がそのコーディネート部分を受託して運営している感じです。

岡：その受託業務は、どのような業務にあたるのでしょうか。

若狭：コーディネート業務です。公園の管理自体は、まだ指定管理者制度になっておらず、公物管理は今、別の団体がやっています。でも来年度以降、おそらく指定管理者制度になるでしょう。最近の公園は、植栽や公物管理するだけでは、素晴らしい公園にはならないので、運営上、特にソフトの部分のコーディネート機能が必要だと県や市も考えているようです。

岡：指定管理で受けても、単純に効率よく管理しただけでは、なかなか面白くはないですね。

1 共済住宅であった富松住宅は、2023年（平成35年）の開鎖が決まっている。それまで、市営住宅として尼崎市が運営、管理するため、住み替え支援や入居者が減少しながらも最後まで居住環境を保つため、尼崎市は指定管理者の選定を行った。株式会社地域環境計画研究所は、他の3団体と共に、2013年4月より3年間の指定管理者となっている。

2 2009年より「水辺を感じる」、「工場地帯を裏側から見学」等をテーマとして、「尼崎南部再生研究室」が企画、実施。2011年には兵庫県による「21世紀の尼崎運河再生プロジェクト」がスタートしている。

3 兵庫県尼崎市のかつての特産品。江戸時代から海沿いの新田地帯で作られていたサツマイモを「尼いも」と呼んでいた。しかし室戸台風とジェーン台風による高潮で、1950年ごろには作られなくなった。2001年から「尼いもクラブ」を結成、その復活と普及につとめている。

4 2001年5月、尼崎南部の未来を考えるフリーペーパーとして創刊された。尼崎南部の身近な話題をもとに編集されている。年4回発行で、2014年7月に48号が発行されている。

5 阪神尼崎駅と、尼崎スポーツの森を結ぶ、工業地帯を走る自転車道。

若狭：ここは“21世紀の森”構想の拠点設備だということで、公園の管理だけではなくて、この一帯で起こるような「まちおこし」や、「地域おこし」、「まちづくり」のさまざまな活動を、ここを拠点に応援しようというものです。「みんなでやりたいことを持ち寄ってください」という形で提案してもらっています。

岡：これは綾野さんのところの“ことば蔵”と同じ考え方ですね。

若狭：実は、“ことば蔵”の運営のノウハウをつくるお手伝いもしました。綾野さんから“ことば蔵”をオープンする半年くらい前に「交流フロアをつくったけれども、どう交流したものか、一緒に考えて」という相談を受けて、綾野さんと一緒に伊丹市内のいろいろな活動をしている人たちにヒアリングし、その人たちにやりたいことを発表してもらい「やりたいこと発表会」をやらせてもらい、そのコーディネイトも僕がさせてもらいました。

岡：「まちが元気」というのは、どういう状態だと思われませんか。

若狭：「自分がやりたいことが実現できるまち」が元気なまちなのではないかと思っていて、しかもそれが自分の個人的な楽しみや思いで実現しているのではなくて、自分がやりたいと思ったことが『うれしい！楽しい！』と感じる人が何人も周りにいることが、元気なまちだと思っています。だから“21世紀の森”もまさにそういう場所で、1人でラジコン飛行機を飛ばしている人が、「ここで飛ばしたい」と思った、でも公共空間だから、別の人も自分の趣味のヘリコプターを飛ばしたいと言いだしたらきりがないわけです。そこで、「せっかく飛ばすのなら、ラジコン飛行機にカメラを搭載して、100年使うこの森を定点観測してください」と言うわけです。定点観測するために県がヘリコプターを飛ばすと、相当な費用がかかるわけで、ラジコン飛行機ならただでそれができる。そうするとみんながそれを見たいから「あなたのラジコン飛行機を応援しますよ」と、うまくストーリーづけをしたわけです。その旨を県に話をしたところ、「それは面白いな」となった。つまり自分の楽しみが誰かの役に立つという状態になるわけで、そうなる自分何かをやりたいとなった時に、自分がやりたいだけではなく、誰かが喜んでくれないかと考え出す。共感の輪を広げることです。それはここ数年、伊丹の“ことば蔵”や“21世紀の森”で活動していて、とても感じているところです。

岡：まちの中で人が楽しんでいるのを見て楽しむという楽しみ方があることも、まちの良さだということですね。

若狭：そういうことを見せ続けていたら、10人のうちの1人くらいは、「私もそっち側に行きたい」と思う人が出てくると思うのです。

私自身も、2001年に就職して、10年ちょっと経った頃から、自分たちだけで活動し続けるのは限界があると感じ始めました。1人の人間の熱意や思いというのは、同じ調子ではなかなか持続しないものです。それならばせっかく色んな人と知り合えたいし、色んな人との輪ができたので、そこから先は同じように「やりたい」と思った人の、やりやすい環境を整えるのが自分たちの仕事かなと、最近思い始めているところで、まさに“森の会議”のコーディネートなどはそれなのです。来る人は、今まで出会った人が多いし、人が人を連れてきたりして、どんどんシフトしてきているなと感じています。つまり元気なまちというのは、うまくアクティビティが起こるようなまちだと思います。

岡：まさに伊丹の“ことば蔵”もそういう感じですね。知り合いの女性も、何か自分の好きなことをやっているうちにいつの間にか表に出てしまっていて、気がついたら前に立っているみたいな状況が出来上がっていたのですが、本人は極めて機嫌がいいのです。

若狭：僕は伊丹の“ことば蔵”の運営会議には毎回出ているのですが、プレゼンを聞いているだけで、特に何かを教えたりはしません。ただただ「それ、めっちゃ面白そうや」と言うわけです。また、実際面白そうなことを言っているのです。

例えば英語教育に40年携わっていた方が、何冊か出ている夏目漱石の『坊ちゃん』の英訳本を読み比べるという、マニアックな講座の提案をしてきたのです。「ちょっと難しいかも」と言いながらも、運営会議の場で色んなアイデアを出し合ったわけですが、蓋を開けると60人くらいのお客さんがその講座を聞きに来て、しかもとても知的レベルの高い人たちが集まっているのです。この60人、図書館の告知で集まったのですよ。

岡：図書館がそれだけ色んな人の情報源になっていたということですね。

若狭：本を借りていた人が、そっちの行為に移ったのかもしれない。でも次はその人たちが「私にも得意なことがあるから」と思えば、運営会議でプレゼンしてもらい、我々が「それ、めっちゃ面白い」と言って、表舞台に立たせてしまうという作業をするのです。スターをどんどん発掘する流れです。

岡：そういう雰囲気があるというのは、まちの価値を上げることに繋がりますよね。

若狭：そう思います。今までサービスの提供者と受け手でしかなかったのが、少しずつ変わり始めていると感じていて、サービスを受けているだけではもったいないと、みんなが思い始めている気がするのです。自分も何かしたい、自分も何か伝えるべき言葉を持っている人たちが、この数年増えているのかなあというのは実感しています。

岡：私もそう思う人口が増えているのではないかと感じています。少なくとも私の周りにはそういう人が多くて、面白いことを仕事でやっている人もいれば、人の仕事にお客さんとして関わっている人は、遊びに行っておられるわけで…。それが、逆転したりして。ただ一方で、そういう人口は、どこまで本当の人口なのだろうという疑問もあって、いつも同じ人に会ってしまいうなあという思いもあります。

若狭：でも僕が今関わっているのは、そのまち、そのまちにいる人で発掘しているわけで、そう考えると「わりといるな」と感じています。

岡：それは高齢者やリタイア世代ですか。

若狭：『坊ちゃん』の講座を主催した英語の先生は62歳だったのでしょうか。だから高齢とは言えないですね。「言語学の大学院でマスターを取ろうと思っていたけれども、家の近くにこんな面白い図書館があるのなら、ここに通う」とおっしゃって、今や毎日来られています。

岡：住民参加とか、市民参画といった言葉がありますが、それとは違う気がしますね。役所の人たちも気分が全然違うのでしょうか。どういうふうに位置づけたいのか綾野さんなどはわかっておられるのでしょうか、他の市の方は別物だと思っておられるようです。実際は建築協定や地区計画などできるはずもない状況で、市の方から盛んに持ちかけて、できそうな所でやっとならというやり方で住民参加だと言っている人たちと、片や、バルをしながら頑張っているところも住民参加ですね。

若狭：でも公共に対する意識は一緒だと思います。バルでまちを賑やかにするのも、自分の店が儲けたいという思いもありますが、まちの魅力をみんなに知らせたいからやっているわけだし。

だから綾野さんのような行政職員は、あれを役所がすべきかと思われたら、庁内では巧みにプレゼンさ

れているはずなんです。そこはポイントだと思います。

岡：伊丹は市長もソフトとハードを一体化しなければいけないことを認識されているので、そういう部署のつくり方をしておられますね。だいたい賑わいと都市整備は対立関係にありますから、なかなかうまくいかないものなのですが。

若狭：この間お会いした富山の京田さんは、都市整備畑の人ですが、根拠付けがとてもうまいのです。一見、ソフトな事業に見えるけれども、実は福祉の分野でどれだけコストが削減できているかというストーリー付けをきちんとされているのです。

これまでの住民参加では単純に「会議に出て来い」とか、単純に面倒なことをさせていただけだったのが、ラジコン飛行機を飛ばすことですら、僕は住民参加だと思っています。なぜならその人は参加することで、誰かのためになっていて、本人が喜んでやっているということの意味づけができたわけですから。その回線を繋ぐのが僕らの仕事で、交換手のようなものだと思います。何かをやりたい人と、社会課題を繋ぐということが、おそらくこれから必要で、コネクターのようなものかなと最近非常に感じています。今までは自分たちがやりたいことを好きなようにやって、「それは社会課題に合致しているだろ！ どうだ！」と無理やり言っていたわけですが、それには限界があるし、むなしいし…。

岡：仕事として回っていく感じですか。

若狭：他のまちに行っても、そういう役割を担える可能性があると思います。

岡：尼崎の場合は助成金があったから、お金があったからというところがあったのでしょうか。

若狭：最初に活動する時はそうですね。

岡：でも今の動き方を見ていると、市も新しい局面として、そういう役割を望んでいると言えるわけですね。

若狭：そういう役割を求めています。

岡：気がついていない行政もあるだろうから、何ともいえませんが、それが重要な市民サービスになるというか、市民が元気になる場をつくることの意味合いを認め、きちんと位置づけられてきているということですね。

若狭：それは仕事として来ていますから。そういう意味では、公害の流れから和解金があって、色々な活動をしてきたのですが、それは10年で切れていて、今はもう13～4年経っているのです、これからはそれを誰かに還元しなければという局面なのかもしれないです。

岡：なぜそんなことを始めようと思われたのですか。

若狭：もともとは、大学4年生の時に、尼崎市の受託研究を研究室で受けたんです。地域資源調査みたいなもので、ちょうど2000年だったので、次の1000年後に残したいような尼崎のお宝を探すというのを、市民から募集したのです。それに何百件かのお宝が集まっていて、それをひとつひとつ写真を撮って調査する業務を学生チームで任せてもらいました。尼崎市には当時“あまがさき未来協会”という研究組織があって、その田中さんという職員の方にかわいがってもらって一緒に調査しました。そのときに尼崎って、面白いなと感じたのが始まりです。

就職活動を中途半端にやっていたのですが、どうせなら尼崎で就職をしたいと片寄先生に相談したところ、地域環境計画研究所があって、その浅野所長が公害訴訟の支援をしていて、ちょうど当時公害の和解金を使った組織、尼崎南部再生研究室ができようとしているということでした。まさにうってつけだと、この会社に入ったわけです。ですから都市計画のコンサルの仕事をしなが、そういう活動ができて、始まったのが尼崎との縁です。

当時は震災から7年経った頃ですので、震災復興のまちづくり協議会の支援の仕事が多くて、いろいろな話を聞かせてもらったり、ポケットパークをつくるのに、住民の意見をまとめたり、総合計画をつくるお手伝いをしたりと、いい経験をさせてもらいました。そういう仕事をする一方で、尼崎南部再生研究室（「あまけん」）の活動をしていると、尼崎にも人脈ができてきました。商店街の人が声を掛けてくれて「一緒に何かやらへんか」と、“メイドインアマガサキ”という尼崎のものを発掘して売り出そうという事業が始まったのです。当時25くらいだったでしょうか。

「まちを元気に」というキーワードで言うと、やはり「自分のまちがいいな」と思っている人が多いのが、まちが元気な証だと思っているのですが、尼崎はどちらかというところ「どうせ尼ですわ」みたいな自嘲的な部分があるのはなぜかなと考えたわけです。ものづくりのまちなのに何をつくっているのか誰も知らない。「うちのまちでは日本の6割の湯たんぽを作っている」と言ったら、何かちょっと自慢したくなるじゃないですか。そんな自慢したくなるものを集めようという感覚で、当時「トリビアの泉」という番組をやっていて、そのノリで、「へえ！」を探そう始めたのがこの事業です。

岡：その事業はお金がついていたのですか。

若狭：商店街も僕らのような若い者に、いきなり予算をつけるわけにはいきませんから、最初は兵庫県の震災復興の助成金で50万円出るといのがあったので、その申請書を僕らが書いて、お金も用意して、これでやろうとなったのです。そのコンペ自体も好評で、テレビにも紹介され、それを集めたアンテナショップみたいなものを2日間だけ開いたのです。これはかなり話題になって、お客さんもいっぱい来ました。そこで商店街側も“TMO 尼崎”という会社があったので、次の年度から事業化、市の助成も受けながら、TMOの事業として“メイドインアマガサキコンペ”を毎年開催することになりました。それを私の事務所が受託してやらせてもらうことになったのが、仕事へのステップというところです。

岡：それは仕事の種類としては、全然違うように見えるのですが。

若狭：そうですね。それは都市計画の仕事とは違うのですが、会社からは「違う」とは言われませんでした。そういうアイデアや企画を実現するのは好きなのです。僕は技術屋ではないので。普通の会社では「何を遊んでるんや」と言われますし、当時はそんなにお金もつきませんので、それを認めてもらえたのは幸運でした。でもそういうのを、「あまけん」なのか会社の仕事なのかという二足のわらじを履きながらできたのは大きいです。

岡：そういうテーマができたということですね。尼崎は元気がなかったですものね。

若狭：10年前は暗いと言うか、ネガティブな感じでしたね。

岡：市民と直に会って活動するのは、どのあたりからですか。

若狭：それまでもクルージングや、“尼いも”を栽培したりした時に、市民の方から「苗が欲しい」という問い合わせがあったり、『南部再生』の取材をしたら、市民の方と実際に会って話もするし、基本的にはまちの人と話をする機会は結構あったと思います。

岡：取材は、色々な話が聞けますよね。活字にする、しないは別にして。

若狭：僕らは最初に『南部再生』というフリーペーパーをつくり始めたのですが、もう今47号になっています。

まちの人と話したいとか、仲良くなりたいと思った時に、取材といえば先方も悪い気はしないじゃないですか。行けば少なくともその人の1時間をもらえるわけで、話も聞けるし、仲良くなるチャンスはあるわけです。今まで取材を何人もさせてもらいましたし、その時の人脈が、今、こんなところで、ひょっとすると花開くかなと思っているんです。

ですからそのまちの事や、そこに暮らしている人の面白いところが見えると、豊かですね。

岡：その豊かだと思ふ感情は何なのでしょう。

若狭：知らない人がいるのは、気味が悪くないですか。僕自身の家は17戸が集まったマンションなのですが、ほとんど関係性がわからないのです。今度僕が理事長になって、マンションの修繕をしなければならぬので、話し合わなければいけないのですが、「まずマンションのどこが悪いのか、見学会をしましょう」とお誘いしても、17軒のうち6軒しか参加してくださらない。非常に難しいです。参加をしてもらうには、その人たちがやりたくなる動機をすくい取らないといけないのですが、それが難しい。

住民参加も同じで、ぱっと連れてきてNPOをつくらせても、うまくいかない。10年前の状況がまさにそうで、NPOをつくったところで何も動かないわけです。それが噴出してきて、今新しく変わろうとしているところに、我々が行っているという状況です。

岡：住民参加のやり方が変わったし、NPOのあり方も変わったというのは、「何かしなければ」というやり方ではダメなんじゃないですか。

若狭：例えば団地であれば、住んでいる人たちが得意なことを持ち寄るような場があったら、一番理想的だと思うのです。「これ、めっちゃ得意やねん」と思っている住民の人が活躍できる場があったら、いいと思います。やらされている感がないわけですから。やっている感が出るにちがいません。

岡：それを何万という市民の人を相手にやるのと、小さなコミュニティの中でやるのとでは、結構違って、難しいかなと思うのですが。

若狭：せっかく掃除の好きなおじさんがいても、口が悪かったりして「あいつあんなん言うてるだけや」と、批判的になったりします。コミュニティが小さいと、人の顔が見えすぎるから、動きにくいでしょうね。

“21世紀の森”でラジコンを飛ばしていても、たぶん家に帰っても何も言われませんよ。薄まるから。

岡：次の課題はそれかなと思っているのです。

若狭：中山間地域はもっと難しいかもしれないですね。でも中山間地域は突き抜けているかもしれません。人口は少ないけど、やらないとどうしようもないという状況になっているから、すごく動機づけされた住民が、自分たちのやりたいことをやって、色々批判も受けておられますけど。

岡：でも残念ながら、どうしてもクオリティが低くなります。しかも低い所で、結構満足してしまわれる面があって、「近所の人がこれだけ来ているから、いいわ」となってしまって、もったいないですね。

若狭：どこまで求めるかですね。

岡：強く求めたら、辞めてしまわれますしね。

若狭：「なんで、そこまでやらなあかんねん。自分らでやっているだけやのに」という。でもどうせなら、クオリティが高い方が、かっこいいし、喜ばれるんですけど。

岡：だからその辺のさじ加減と言うか、まちが元気になるというのは、団地くらいの単位ではどの程度を指すのかと思っているのです。

元気になる仕掛けもだし、元気になったらどうなるのかという説明も行政にもしなければいけない。

若狭：まちに対する愛着はどうですか。

岡：昔から住んでいる人も、ここを誇りにしているかと言うと、「男山は一番の文教地区だった」と過去形での誇りなんです。

若狭：リノベーションをして住むという事例はないのですか。

岡：関大で提案はして、見せはするものの、効果のほどはわかりません。アンケートをとってみると「賃貸の設備が老朽化している」等、色々書かれるのです。普通に考えれば、賃貸なのだから、新しくなった所に引っ越せばいいはずなんですけど、見に行ってみると、物で溢れかえって引っ越せる状態ではないわけです。それまでの半生で積み重なった荷物をどけて、リノベーションなど考えられない。引越しをする人件費と時間が一番の問題で、引越しする元気がないということです。人さえ出て行けば、順次設備自体は新しくしますから、どんどん住環境としては良くなるはずなんですけど、人が動かないから、何も変わらない。

若狭：では、玉突きのような現象を起こしてあげれば いいわけですね。要は引越しのコスト、人的なコストも金銭的なものも含めて、そこが解消するとできるの でしょうね。誰かがやって、「めっちゃ良くなったで」という話ができあがれば、回転していくんじゃないで すか。生活環境はそれほど大きく変わるわけじゃない ですから。

岡：そうですね。今までやってきたことは、ちょっと 違うなということに気がつき始めたところなんです。「無印良品」でやっているようなモデルルームでは、自 分たちの「現実のもの」として見られないようです。

若狭：そこに入っている物にお宝はないですか。「家の中のもの半分かくらいに減ったらいいな」とは思っているわけでしょう。ただきっかけがないだけで、そのき っかけをつくってあげればいいのではないですか。

陶器を出したら、すごく動くと言いますけど。団地の中のを動かす、流動化させるといいのですよね。それは最初は、家庭レベルでは陶器かもしれないし、本棚の本かもしれないけど、そこが住み開きみたいな 感じで交換が起こってくる。今月は本を出して、本を 交換する。要は、「断捨離」をするきっかけをつくるの です。ただ何でもかんでもやるのは難しいので、今月 は本、来月は陶器と、わかりやすくする。お坊さんに でも来てもらって、断捨離の話をしてもらったらどう ですか？

岡：その案、もらいます！

若狭：みんな物を捨てたいという欲求は強いと思うの です。きっかけが問題です。ひょっとすると欲しいもの があって、物が増えるかもしれないけれども、そこ でまた関係性が生まれますから。

岡：身近な人がやっていることが連鎖して、まちの元 気になるというのは、本当なんでしょうか。

若狭：自分の得意なことが、誰かの喜びになったりす る場面があるということですね。あとはそういうアイ デア同士がつながるということもポイントかなと思っ ています。“森の会議”でも、「突拍子もないこと でも何でもいいから、とりあえずやってみたいことを 言ってみてよ」と言っているんです。何でもいいから 言っていると、そのうち「ああ、あの時あんな事を言っ ていたな」と実現することがあるわけです。それから アイデアがなくても、会議の場にやって来て、誰かの やりたいことを応援したい人というのは、必ずいると 思うのです。そうすると「それなら得意だから、サポー

トすることができるよ」ということも起こってくるわ けです。

伊丹の“ことば蔵”でも英語の子育て交流会を始め た人がいるのです。その人は伊丹に引っ越してきたばかりで、子どもも生まれたばかりで、乳飲み子連れ てきたんです。どう考えても1人では難しい。そう するとその会議にいた人の1人が「私も英語でそう いうことをやりたいと思っていたので、サポートしたい」と、一緒に活動が始まって、もう2年くらい毎月続いています。毎回親子連れ60人くらい集めています。

岡：それは“ことば蔵”の実績として、市としても認 めているわけですね。それで市民サービスとして市民 が喜んでいることを認めているわけですよね。

若狭：そういう事実として、図書館側はアピールして います。

岡：そういうことを考えている若狭さんは楽しそうで すね。

若狭：僕は楽しいですよ。楽しいし、僕もたまにはそ ういうことを提案したりもしています。

僕はマラソンが趣味で、いつも1人で走っているん ですが、“ことば蔵”に何人か走りそうな人がいたから、 運営会議の後に毎回1時間くらい走るクラブをつくっ たんです。そうするとそのクラブだけやってくる人が いて、全然知らない人同士と一緒に伊丹のまちを走る ようになりました。だから自分も提案して、自分の遊 び場をつくるという感覚で楽しいですよ。

岡：そのあたりの切れ目はないわけですね。

若狭：ないですね。大阪でも仕事をしています。大阪 市で今、もともとの“地域振興会”という町内会組織 をバージョンアップしようと“地域活動協議会”とい う組織を立ち上げ、我々が浪速区役所にまちづくりセ ンターを構えて、もう1年半くらいになりますが、大 阪市からの受託で運営しています。浪速区なので、新 世界や日本橋や、芦原橋、大国町、難波と、とてもディー プな地域です。これは中間支援でして、接点が多いの は町内会長さんたちで、「活動の仲間をもっと増やしま しょう」ということを一生懸命言いながら、参加する 人をもっと増やす活動をしています。

豊中市でも商工関係の仕事をしています。商店街等 の団体支援からやる気のある商業者支援へとシフトし ており、彼らとどんなことをしようかという研究会を やっています。

有馬温泉にも行っています。僕は、“メイドインアマガサキ”をやっていた関係で、商店街の振興で声を掛けられることが多くて、商店街のビジョンづくりのお手伝いなどもしています。

岡：少し前までは、住民活動に参加する人は、持ち家層で、長く住んでいる人たちをターゲットにしないと物事は動かないと言われてきましたが、今のまちづくりはそんな話は関係なくなってきました。短期間だけ住む人でも、たった4年だけいる学生でも、その間楽しく過ごせるまちづくりでいいじゃないかと考えるようになってきましたね。

若狭：地域活動の概念自体がすごく広がっていると思います。今までは子どもの見守りや夜警や、地域の運動会をするなどという地縁型活動が多かったのですが、それ以外の地域活動が増えていて、今まで地域活動と呼んでなかったものも地域活動になってきつつあります。

岡：クラブ型コミュニティと言っていたのですが、これまでものは地元クラブであって、全然クラブ型じゃないんです。またそれが市として評価されていました。昔は地元で何かするとなると、店や家を持っていない人はよそ者として無視してきたけれども、それを言い出したら、今の地域はよそ者だらけですから。浪速区はよそ者の最たるものですよ。

若狭：まさにそうで、毎年4分の1の人口が入れ替わるんです。だから今僕らが相手をしている人たちだけじゃなくて、サイレントマジョリティと言われる人たちの話を聞こうというので、調査をしています。この間は子育て世代の調査をしようと、50人くらいの街頭アンケートを実施したのです。

「地域活動に参加してみたいですか」という問いに対して、「関わりたい」という人は4割くらいなのですが、「関わりたいけれども、子どもがいるから関われたい」という人が4割くらいいて、8割くらいの人は何らかの形で地域活動にコミットしたいと思っているという結果が出ました。それがどんな地域活動を指しているのかは、もう少し調査をしなければならぬのですが、地域活動というもののイメージが変わりつつあるような気がします。

岡：地域活動というものが違うのです。男山でもそのような調査はしたのですが、「今は忙しいから関われない」と皆さん書かれていて、その人たちは子育て世代で、実はその人たちこそ関わる値打ちがあるのです。

若狭：「世話させられる側」というのが、今までの地域活動であり、町内会活動だと思うのです。今、地域活動が面白いと活動しているのは、世話をしている感覚なく活動しておられるわけです。

岡：今、福祉的にやっておられるカフェがありますが、いてもあまり楽しくないし、やっている人も楽しくない。もう少し違う方向がないものかと思って見ているのですが。

若狭：テーマがないからでしょうね。「お茶なら別に家で飲むわ」ということなんでしょう。

岡：男山でもURの敷地でカフェをやっておられる方がいて、高齢者や一人暮らしが多いのでやらなければいけないと思ってやっておられるのです。でも端から見て、楽しそうじゃない。だから、若い人たちは寄り付かない。義務感でやっておられるような活動があって、若狭さんがやっておられるような活動に転換したということでしょうか。それとも別物なんですか。

若狭：別物なのではないでしょうか。また従来型も無くなりほしくないと思います。ノリが違いますよね。

岡：それが地域で評価されるようになってきているというのは、やはり行政側にも評価してもらわないといけませんね。

若狭：それが良い事だという意味づけが必要だということだと思います。そうすればその人も胸を張ってできるわけですから。

僕らがまちを元気にできているとしたら、まちの人が「僕たちのまちっていいよね」と言えるような、今まで埋もれていた情報を、すくい上げることはできたのかもしれない。今はそういう情報だけではなく、面白い人たちが活躍する場をつくるというのが、次のステージだろうなと思っています。

最近、富山グランドプラザを手がけられた山下さんと親しくさせてもらっているのですが、僕たちもあそこに向かいたいと思っているからなのです。放っておいても、みんなが機嫌よく何かをしだすというのが、一番だと思います。

でも伊丹でも、運営会議のメンバーが少ない時もありましたし、いつも同じメンバーという時もあったのですが、綾野さんをはじめ図書館職員のご努力もあって、今年になってムードが変わって、新しい人がどんどん入るようになってきたのです。「ここでプレゼンしたら、自分のやりたいことがやれるって聞いた」と来られるわけです。

岡:その喜びって、みんなが持っているものなのでしょうか。みなさん、そういう場を求めておられるんでしょうね。

若狭:そういう欲求はあるんじゃないでしょうか。

岡:今までは便利なまちであるとか、安心・安全というのがまちの価値であったのが、参加できるとか、見せ場があるとか、自慢できるといったことが新しい公共の価値になってきて、それならばそれぞれの価値は別々だから、他都市と競合しなくていいわけです。今までの価値は、最終的には東京に負けるということで終わってしまうのですが、地方の良さとして、人口が少ないから、その分表舞台に立てる可能性も増えるかもしれないし、埋もれないで済むという価値があるとも言える。

若狭:僕らの指標は、「自慢できる」とか、今“シビックプライド”と言われてはいますがけれども、そういうことを大切にしているかもしれません。

今まで土地は高度利用をずっと求められてきたわけですがけれども、街の中を「手を繋いで歩く」という価値観は、超高度利用の話で、その概念すら超える話であると思います。富山市の京田さんなどは、そんなことをまじめにやってこられたと思うのです。「1万歩歩くと年間何百円かの医療費が削減できるので、1万歩歩くと老人が〇〇人増えたから、これで…」という話をしていたらしゃいました。

岡:男山団地で、みんなが自宅にこもってないで団地の中を歩いてくれるだけで、医療費の削減につながって、自治体も応援しやすくなるということですね。

若狭:元気なお年寄りをつくったら、どれだけ影響があるかというのを、八幡市への説得材料にする。

岡:そういう理由づけをきちんとして、行政に議会で話してもらうようにすればいいですね。

若狭:地縁のような重いバインドよりも、もう少し緩やかな、自分のまちが好きだったり、空間が好きということの方が強い気がします。

僕は今、FM 尼崎というコミュニティラジオで、“8時だよ！神仏集合”という宮司と住職と牧師がラジオパーソナリティをするような番組の企画ディレクターをしているのです。お友達の宮司と住職と飲んでいるうちに、面白い人たちなので、その人たちの話を電波に乗せたいなと思ひまして。僕らがこんな活動をする当初から、ずっと応援をしてくれているのですが、神

社やお寺も地域のバインドを強める存在だったのが、効かなくなってきた、彼らも悩んでいるのです。

神社も300年続いているのですが、氏子地域は変わらないけれども、氏子が減ってきて大変だと。そこで僕らの“尼いも”の奉納祭を神事としてさせてもらいました。もう一度地域の絆を取り戻そうとする時に、今までのように氏子さんがどうこうではなく、地域の特産品の奉納という新しいテーマを持った人たちが神社に集まりだすと、また再びバインドとしての機能を取り戻すことができるのではないかと思います。せっかくあるのですから、もう一度息を吹き込んであげると、蘇るのではないかと。やはり何百年もその場所にあったわけですから、それだけでパワーは持っているのです。色んな立場の人はいて、ゲストにはイスラム教の人も呼んだりするのですが、自分たちの主張をし合っても、けんかにしかならないから、番組のテーマは「機嫌よく」なんです。「機嫌の良い宗教対話」というのが、番組のテーマで、僕らの仕事も機嫌の良い空間やまちをどうつくるかということなので。機嫌がいいのが一番なんです。元気にならなくても、機嫌よく暮らしていれば十分なのではないでしょうか。今までラジコン飛行機などと言おうものなら「そんなのは困る！」という対立しか生まれなかったのを、「まあまあ」と。

岡:警察や行政などの間に、やはり中間にはまる人たちが必要なんでしょうね。第二の公のような存在があって、それが緩衝材になって。

若狭:僕らもそういう立ち位置を、尼崎の中で期待されているし、それが仕事になりつつあるので、「ここは頑張らない」と思っているところです。

第5章

松戸・エリアマネジメントで廃墟ビルをアートの拠点へ

株式会社 ジャパンエリアマネジメント

西本 千尋

岡：西本さんのプロフィールをホームページで拝見したのですが、学生の頃から社会で頑張っておられて、とても意識の高い学生さんだったのだなと思っていました。

西本：私たちの世代は、ちょうどホリエモンが逮捕されるという時代に学生時代を送った世代で、起業するとなった時に、ITが選択肢ではなくなった時期でした。それでNPO等非営利な分野で活動したいという仲間が、20歳くらいからインカレサークルみたいな形で、自分たちの興味の分野を元に、学生コンペなどが多くなってきた時期でした。学生が地域課題を解決するか、社会問題を解決するみたいなことが流行った残滓みたいな感じでした。ですから私だけが起業したというのではなくて、他もみんな結構やっていたと思います。

岡：出身は文系でしたか。

西本：経済です。そういう機運に乗ってしまったという面があって、サラリーマンとして一度社会人としての知見を積んでというアプローチが普通だと思うのですが、私たちは結構煽られて起業ブームに乗ったという部分があったと思います。

岡：男女雇用均等法も相当浸透していたから、就職に際して、女の子がどうこうというのは、全然なかったでしょう。

西本：そういうのは全然なく、理系出身ではないのに、まちづくりという分野に、経済や商学部や法学部の人間がアプローチするようになったのは、それくらいなのかなと思います。

岡：まちづくりに関わるのは、建築の分野が先だと思われましたか？

西本：たぶん建築をやっておられる方が先で、建築協定などの住民参加の流れで、理系の方が多かったのではないかと思うのですが、もしかしたら違うのでしょうか。

岡：大学によっては、商学部とか経済学部の先生方がまちづくりに強くて、学生たちも震災復興ボランティアに行くとか、「身体使ってやります！」的な感じで、掃除をするとかのサークルに入って、市場の再生をやるとか。私たちのような、住民参加型のまちづくりというような制度にのってまちづくりをやる人はあまりいませんでした。工学部でまちづくりをやるとうすると、先に制度があって、それにどうやって住民を載せるかということが多いわけです。なぜまちづくりのようなことをやろうと思ったのですか。

西本：出身が埼玉の川越なんです。川越には、重要伝統的建造物群保存地区¹があって、目の前にあいう建物がずっとあって続いていることについて、素直に「すごいな」という思いがまずありました。私は昭和58年に生まれていて、ちょうどその昭和58年に一番街商店街協同組合の方たちと蔵のファンである有志の方たちが“蔵の会”を立ち上げたんです。ですから同い年になるわけですが、それを目の前で見ていたんです。特にそういう団体を認識していたわけではないのですが、大学に入った頃、目の前の風景って、どなたがどんな活動をしてつくっているんだろうということに、とても興味を持ちました。そして行政計画というものだけではない、私有財産なので、私的な商業者だったり、そこに土地やテナントを持っていない人間でも、まちづくりに関われることを知りました。権利所有の関係がなくても、公務員でなくても、ただそのまちが好きだというだけで、何かこの地域を良くしていこうという活動に携われるということを知ったわけです。そして「なんて面白いものだろう！それはまちづくりというらしい！」となったわけです。

それで学生時代、駅前の再開発とか、駅前の雑居ビルとか、郊外のどこでも同じ店が入っている姿を見て、私自身結構、絶望したわけです。「やっぱり伝建地区はすごいな」と思いながら、全国の伝建地区を歩いたら、伝建地区の中のテナントさんは、実は京都の嵐山の店だったとか、各地区の伝建地区も、ハードは個性的なのに、中は川越の土産物屋も倉敷の土産物屋も

¹ 川越市川越伝統的建造物群保存地区；川越市幸町の一部、元町1丁目、元町2丁目及び仲町の各一部の約7.6haの地区。重要伝統的建造物群保存地区で、江戸時代からの蔵造りの町家の他、洋風建築や洋風外観の町家が立ち並ぶ町並みが形成され、残されている。1999年4月9日都市計画決定。

京都の土産物屋も同じなわけです。オルゴールとガラス細工の世界とか、1,000円均一ショップとか、ちょっと縮緬っぽい民芸品とかを見るにつけ、「これはどうしたことだろう」と。「まちづくり活動って、なんだったんだろう」みたいなことを、その時に感じました。

でも「観光地として人気だから盛況だ」と言われているわけです。「京都のものが川越に来て、何が悪い」と言われたら、どうしようもない。たとえば「スターバックスが田舎に入って何が悪い」と言われたら、地元の人も喜んでいて、観光客も喜んでいてわけですから「まあ、そうか」と。私自身は地元資本のそこにしかないお店がすごく好きで、ですからそういう現状に対して葛藤がありました。まちづくり業界に入ると、「それの何が悪い」というのが、共通のワードですので、そういう葛藤はいつもいつもあったわけです。商業の普遍的な、東京のものが大阪に行って、大阪のものが全国に行ってという没個性化みたいなものから逃れたいという気持ちがあったわけです。

そんななか、アトリエや工房みたいなものを構えていらっしゃる商店街に出会いました。そこでは作り手さんが一人だから、たった一つのものを持っていらっしゃる。長野の下諏訪や千葉の松戸、篠山もそうですが、そういう地域が出始めてきています。ですからまちに入るお店は、商店街活性化など、公的なものを活性化したいという気持ちではなくて、自分たちの日常生活のために、この物件を使わせてもらうというタイプの方が入ってくれた方が、良いのではないかと考えたわけです。その方たちが日常生活をどんどんより良くしていく感覚で、お庭を手入れしたり、自分たちのイベントをやったりと、自分たちの日常を豊かにしていく活動として店子さんを誘致していく方向性が面白いのではないかと思ったわけです。

そういう方たちは、2DKの壁を抜いてしまうようなリノベーションを自分たちで手探りでやりたいと思っていて、それができる“原状回復なし物件”に憧れています。松戸では、廃屋のようになった“原状回復なし物件”をひたすら集めるという活動を、3年くらい前からやっていました。仲間の1人が不動産屋²を立ち上げたわけです。

松戸というのは、上野から20分なので通勤圏内ですけれど、松戸駅から500メートルくらいの半径をひくと、廃墟物件が信じられないくらい多いのです。人口は50万人くらいいて、新築マンションはすぐに埋まります。そういう新築物件ばかりきれいになる一方で、古いマンションは空き家だらけで、廃墟マンションのようになって、ものによっては80%くらい空いている

という状況だったわけです。でもマンション一棟、何十部屋も借りるとするのは難しいので、まずは松戸の町会が集ってできたまちづくり協議会の運営みたいな事をするようになりました。まちづくり会社と名乗っていますが、官製のまちづくり会社でもなんでもなく、ただぽつと行って、不動産の免許を取って、ひたすらオーナーと仲良くなった。そして廃墟物件を借りて、全部転貸³にしたのです。もし仲介だったら、仲介手数料を一回取っただけで、二度と会わないですけれども、転貸なら中に入ったものは契約を布達することになるのですが、そのことによってオーナーさんの顔もわかるし、借りる人の顔もわかります。廃墟みたいな物件を全部借りる一方、松戸の19の町会の事務局をするようになりました。

岡：町会の事務局って、どんなことをするんですか。

西本：まちづくり協議会の運営サポート、アート事業です。町会は会員（会費）がすごく減っていますから。

岡：でも町会自体が収益が上がらないのに、どうやってあなたたちを雇うんですか。

西本：町会の事務局は毎日毎日活動しているわけではなくて、まちづくり会議というのをやっていて、そのワークショップ費みたいなものは、市役所から助成金が出ます。町会はオーナーさんたちの集まりで、歴史もありますから、町会の方たちのコミュニケーションは非常に分厚い。そこで「俺たちの物件も超空いてるんだよ」という話が出て、その不動産屋さんの会社に紹介してくれるわけです。一方で、上野に東京芸大があるものですから、みんなアトリエを探しているんです。とは言え、“原状回復なし物件”をめっちゃくちゃにして、人が住めないようにするわけでもないですから…。

岡：それは戸建ですか？

西本：戸建住宅もマンションもあります。マンションの場合は、賃貸も分譲も本当に空いてしまっているんです。そうすると例えばワンフロアで7戸空いているとすると、7戸借り受けて、6戸は転貸の物件で出すけれども、1部屋はコミュニティスペースみたいなものにあてて、アーティストの展示会がやれるようなスペースにしたり、いろんな工夫をしています。3年間で、取引も含めたら115人くらいのアーティストさんやクリエイターさんが住んだり、工房を持ったりしています。500メートルで区切っているんで、ちょっと外れ

3 人から借りたものを別の人に貸すこと。また貸し、転貸(てんたい)

2 「まちづくりエイティブ社」；JR松戸駅西口駅前を「マッドシティ」と称し、展開。クリエイターやアーティストなどによる創造的なコミュニティづくりを進め、より魅力あるエリアに変えていく、まちづくりのプロジェクト。https://madcity.jp/concept/

るところもあるのですが。

アーティストさんたちにとって、“原状回復なし物件”を、比較的安く借りられるというのは、価値なんです。その価値をその次のアーティストさんたちに引き継ぐみたいな文化が作りたかったんです。自分の私的所有で借りて、「じゃあね」で出て行く不動産の価値観ではなくて…。

借家人の出入りはもちろんありますが、かなり残っていますね。

岡：そこには普通に住んでいる人もいて、その関係は何も悪くはないわけですか。

西本：それは転貸にしているので、「まちの人ときちんとつきあう」ことをベースにしています。お祭りに参加するとか、地域のイベントと一緒にやるとか、町会の事務局もやっています。そうしないと「出て行け」と言われますから。

岡：ボランティア的な発想のように聞こえますが。

西本：領域としては、不動産屋さんとまちづくりワークショップ屋さんとコンサルと言うか、シンクタンク系の会社の一つになったような会社ですね。

岡：収支は合いそうですか？

西本：転貸なので、ある程度安く仕入れて、ちょっと高く貸したりだとかしています。自分たちが工事をして売ったら、もっと儲かるけれども、全部転貸ですから。

岡：キーは情報ですね。うまく相手にその情報が行く。物件の情報をちゃんと仕入れて、付加価値をつけて、借りてくれる人にちゃんと情報を渡すということですね。

西本：そんなに大儲かりはしてないですけど、社員は4名かな。でもコミュニティの維持管理をするスタッフが2人います。

岡：コミュニティの維持管理をするスタッフというのは？

西本：町会の運営とか、イベントをやったり…Funclubというイベントスペースを運営しています。そこに115人も来れば、イベントも結構できますし、それだけの若い人が来ると、まちの人も「なんだ、ありゃ」となりますし。既存の不動産屋さんの中で死に物件と言いますか、雨漏りしているし、傾いているし、関わ

りたくないという物件をもらってきて、既存の不動産屋さんから「これ、お前のところなら扱えるか」みたいな形でシナジーができていますね。

岡：そういう人材って、どうやって見つけるんですか。

西本：それは一番難しいのではないのでしょうか。

でも私たちは、土地を持っているわけでもなければ、商人でもなく、まちづくりと言っても専門もそんなになく、行政マンでもないの、何もない人間です。そういう人間がまちづくりをするとすると、既存の持っていらっしゃる方や、公的空間を貸してくださいと仕掛けていくしかない。そういうどろどろの大変なところを20代の前半からずっとやってきているので…。

松戸の場合は、代表が寺井という35～36歳の人なんですけど、彼は“コンポジション”というNPOを20代の時に立ち上げていて（今もあります）、渋谷を中心として、例えば公園とかビルの壁面とか、高架下といったものをアーティストに貸し出してきました。例えば駒沢公園でナイキと組んでランニングの大会をするとか、渋谷の公園をバスケットコートに変えるとか。彼は、ホームレス問題等、行政から見れば、ネガティブ要素がいっぱいあって、使われにくくなった公的な空間を借りて、マイナーなアーティストやアスリート等、マニアックな取り組みをしていた人たちに舞台として貸していたんです。つまり彼は、そういう場所を借り受け、ネゴをするとか、問題が起こったらすぐに行くといった対応のできるプロなのです。

コミュニティのお話では、町会長とか渋谷のセンター街のビルのオーナーに、「壁面を貸してください」と頼みに行って、行政やビルのオーナーから100万円とか200万円もらって、足場を組んで、若いアーティストに描かせる。そうやって公的空間や私的空間も含め、土地と壁をひたすら、若い人たちの活動場に変えたわけです。

岡：彼自身はどうやってお金を得ていたんですか。

西本：代理店として中間マージンのようなコーディネーター費を取っています。アーティストからはお金は取っていません。お金はクライアントである行政やビルのオーナーから得ています。

岡：でも場所は借りるんですよね。

西本：借りますね。借りて、活かす(利用する)までがサービス内容となります。ものすごくメディアに載るんです。例えば渋谷のパブリックスペースで、何か今も公

的で面白い活動やイベントが開催されている所は、かなり彼は関わっています。コンテンツ不足の色々な自治体から、「あいつに話したら、結構いいコンテンツを持っていて面白い」と、知名度が非常に高まっています。そういうブランディングみたいなことを実践した人です。彼は、「まちをイベント的に一週間や二週間だけ変えるのではなく、住んでもらうとか、日常を変えることがまちづくりだから、まちづくりの分野に行きたい」と考えたようです。

岡：活性化を目的にするのではなく、地元の人たちが豊かに暮らせるというスタンスですが、豊かって、何なのでしょう。

西本：土地も持っていないくて、ずっと借家人であり、権力も別にないなかで、自分たちの空間を自分たちでいじれるというのは、私たちにとっては至上の喜びなんです。そうすると家具一個作るにも、壁を塗るにも、すごく面白がってみんながやって…。

岡：その面白さがあることは、よくわかりますが、それを知っている人ばかりが集まらないでしょう？

西本：例えば無印良品を買っている女子というのは、ある程度その気配があると思うんです。シンプルで悪くないけど、もうちょっといきたいという思いもあって、シンプルで自分たちの空間を汚さないものではあるけれども、もっとゼロから1になるようなものづくりや空間づくりができるんじゃないかという世代が、20代や30代の女子が多いと思うんですけど、結構いるんです。おうちリノベでも、松戸では自分たちがリノベーションしたものの公開会やお披露目会が開かれています。これくらいの予算で、こうなりました的な感じで公開するわけです。

岡：オープンガーデンならぬ、オープンハウスですね。そういう人たちには、アート作品なわけですね。

西本：だいたいそうするとクリエイター系が集まるので、ちょっと仕事になっていくわけです。国産材でやるにしても、どこかの業者に頼めばすごい金額になるけれども、自分たちでやるとそれほどお金はかからないし、そういった暮らしぶりを、みんなでシェアするという傾向が多くなってきたと思います。

岡：松戸そのものは、もともとそういう人たちがいたわけではないから、町内会長のおじさんやおばさんですよね。その人たちはどうするんでしょう。

西本：「あいつら何をやっているんだろう」と、その人たちは面白がって手伝いに来てくれるんです。マンションの一室で、自分たちで直したものを、毎週土日にお披露目会をやっていると、「なんだ、この人たちは」と思うでしょう？ 見に行くと、すごくワイワイしていて、商店街や町会のおじさんたちは豆腐屋だったり、文房具屋だったり、うどん屋だったりするので、手伝ってくれたり、現物支給してくれたり、すごくコラボしていますね。お茶会を一緒にやったりもしますし。もちろん新参者が来たことによるアレルギーは、最初はあったし、地域の自治に全く関わってこなかった人たちからは、「あいつら何やってるの？ 実は儲けてるんじゃないの？」とネガティブな動きももちろんありました。ポジティブな動きばかりではなくて、ずっと自治に無関心だった地域の人たちが、自治的な活動をやる若い人に向かって、「ハア？」みたいな…。

岡：それって、自治的な活動になるのですか？ 自治的な活動というのは、西本さんのなかではどういう活動になるのですか？

西本：来た人たちが、自発的にプロジェクトやイベントを設けてやるとかしています。事務局ももちろんお手伝いすることも多いです。

例えば松戸の駅から10分くらいのところ江戸川という川があるのですが、そこは葦の草がボウボウで、死体が出たこともあって、近寄ってはいけないところになってしまっていたわけです。でもまちの人たちにとっては、「矢切の渡し」と言うくらい、東京と接続する良いエリアだったのに、近寄れなくなってしまった。地域の人にとっては誇りだったことを、私たちは知っていたので、みんなでいつも江戸川を掃除して、結婚式をやったり、パーティーをやったり、バーベキューをやったりして、人が使えるようにしようと考えた。まちのおじさんたちの課題と、自分たちが「いじりたい」と言うニーズが合致したわけです。それで江戸川でカヌーに乗ろうよという感じになってきた。そんなまちの中でダメになってしまった所で、「何をやってもムダだよ」となっているおじさんと、「変えていけるし、変えましょうよ」ということが普通にやれる人たちの、まちづくりっぽい活動が、私としては面白いと思っています。別に行政予算がおりないとできませんではないと思うんです。

岡：伝統的建造物群保存地区への関心からそこに行くのが、すごいですね。

西本：建物というハードを守ったのに、ソフトすなわち自分たちの暮らしの場づくりをデザインできていな

いというのはもったいないと思ったんです。そこで自分たちと同じように、自分たち以上に使ってくれる人たちがいるかもしれないという人たちに手渡すことができなかつたりとか、テナント貸したら儲かるからみたいになつたりするのは、残念ですよ。

岡:地元のおじいさん、おばあさんの気分を変えるのに、若い人の力って、どうなんでしょう。手法的なものはないですか？

西本:単に若い人というよりも、年配の方たちが大事にしてきた価値観を、なんのてらいもなく、普通に「いいな」と思える若者が現れると動き出す気がします。

岡:若い人もそれに共感するというので、元々いた人もちょっと自信になつたり、自慢ができたりするという感じでしょうか。

西本:松戸宿と言って、もともと宿場町なので（とはいえ歴史的な建物はほとんどもうないんですけど）、100～150年くらい前の建物が、いくつかわらほら残っていて、そういうのが当然マンションになっていくじゃないですか。その中に「あのまま放置しているけど、いつマンションにしようかな」とオーナーがおっしゃっている“原田米店”という米屋さんがあったんです。ものすごくいい建物で、それを借りられたことがすごく力になっていると思います。当初は「マンションにしたいから貸したくない」と言われたんです。「母が生きている間は、マンションにすることはできないけれども、そのうち壊すつもりだ」とおっしゃっていて、「あれを壊したらヤバイよね」とまちでは言っていたんですけど…。

岡:そのまちで言っていたというのは、誰が言っていたんですか。

西本:町会のボス（大御所）が言っていたんですけど、価値観は別に120%の人が「あの建物いいよね」と合意できているわけではなくて、なんとなく…。

岡:でも町会の人にとっては、他人の家だから。先に壊してマンションを建ててしまった人もいるわけですからね。

西本:当主の方に対して寺井さんが交渉して、あそこを借りられたことで、すごく伸びたのではないかと。

岡:そこが今、事務局になっているんですか。

西本:ちょっと近い所に事務局があって、そこはクリエイターやアーティストさんがいらっしゃるんです。実は私はまちづくり協議会の行政からの委託で、コンサルとして2年間、商店街の事務局として入っていました。そして私が抜ける時に、「新しいプロジェクトをやる人間が来るので」ということで、接触があったんです。私はその2年間で、なんとなく商店街の人が大事にしているものなどがわかってはいたのですが、とは言うものの地域活性化とかまちづくりというワードだけではまとまらないなという地域だった。何が活性化なのか、わからないわけです。それで『厳しいから2年間で抜けよう』と思っていて、抜けるという時に、寺井さんに会って、彼が松戸に来て見ると、「俺、ここでやるわ」となって、不動産屋さんの免許を取って、始めたんです。不思議ですけど、そういうご縁が引き継がれたんです。私などは、ワークショップで終わりとか、行政の調査報告書を納品して終わりという仕事が多かったので、そうしてまちに不動産屋を構えることで、115人とかいう大きな人が来てくれるというのは…。

岡:でもそれ、始めはすごく大変でしょうね。そこまでの物件に至るまでに、一軒ずつ「僕に貸してよ」なわけですから。

西本:でもお客さんが来るとなると、貸してくれるようになったんです。そしてある程度、寺井さんの頭の中に顧客リストがあったから、「何に使うの？」と思っているオーナーに対して、「こういう感じの人たちが借りたいと言っているんですけど」と見せていけたことがよかったのかなど。

岡:先に顧客リストがあったのですか？ 顧客リストはどうやって作ったんですか。

西本:寺井さんが“コンポジション”というNPOをやっていたから、アーティストやクリエイターの人脈がある程度あったということと、芸大生などが音を出していいというような空間を、都内から近郊で借りることができないので、そういうものに対するニーズがあるだろうという目論見もあったということです。また、アーティストやクリエイターはある意味「商店街の活性化のイベントをやれよ」と言われることが、あまり好きではなかつたりして、それを寺井さんがうまくやれるわけです。商店街のおやじさんが「これやれ」と言われたから「やれ」というような、自発性を削ぐみたいなことは彼はやらないし、アーティストやクリエイターと商店街との繋ぎをきちんとやるみたいなのところがあったのではないのでしょうか。

岡：結局それは、言われたからやるとか、「ちょっと賑やかしてよ」ではなくて、アーティストやクリエイター自身が楽しめるということですね。その人の自発性を出すというのは、どうやってやるんでしょう。元気というのは、そういうことだと思っていて、自分の価値観で自分が楽しくなることの積み重ねがないと元気にはならないのだけれども、それはどうやって仕掛けるんだろうというのが知りたいんです。

西本：「好きにやっていいよ」という空間をお渡しして、本当にそれができれば、私たちが『まちづくりだな』と感じるようなものというのは、向こうから必然的にやってくるものではないでしょうか。逆にこちらから「やってよ」というのは違う気がするのですが。

岡：でも西本さんにも『何とかなってよ』と思うのに、ならなかったものもあるでしょう。

西本：それはたぶん私が、その方たちの日常には食い込んでないからだと思います。「がんばってくれよ」みたいなことをいくら言っても…。何かまちづくりだと言われているものに予算がついて、「それをやって」と言われた時に、「じゃあ、いくらくれるんですか」「いつまでなんですか」となると、それはプロジェクトではあるけれども、その人たちの日常ではないわけです。日常の活動が発露した結果みたいなものが、まちづくりにとってはハッピーだと思うんです。アレンジもコーディネートも私たちは上からできなかったの、ただただ場所を気持ちよく借りてという、不動産の原点ですね。別に面白いことでも、すごいことでもやったわけではなく、誰もがやれる行為に留めたということではないでしょうか。それ以上のことを仕掛けたりしなかったのがよかった。

岡：そのコミュニティ専任の方がいるのも、活性化するためにいるのではなく、既存の人たちとうまくおつきあいするための守りの部隊なわけですね。

西本：問題が起こったら大変です。借りている人たちは「出て行け」と言われたら嫌だし。

岡：既存の不動産屋さんとの違いは、やはり価値観と言うか、フィルターがかかっていますよね。借りたい人を貸したい人に渡すだけではなくて、ある種の人しか借りる気にはならないじゃないですか。でもその人たちにとっては、高いお金を出してという意味ではなくて、自分の気持ちが一番幸せになれる物件として、それがたまたま安いだけの話でということですね。

西本：たぶんそうだと思います。それはたぶん色んな反省点を元に今のモデルはあるのだと思います。アーティストやクリエイターに使って欲しいと思っているおじさんが、芸大生を捉まえて「安く貸してやるよ」みたいなことは、各地で結構あるんです。そうするとパトロンみたいな人たちだから「家賃を安くしてやるから、お前ら何かしろよ」みたいな事を言われたら、アーティストは萎えるわけです。4年くらい前に、私もヒアリングと一緒に行かせていただいて、「たかが数万円のこと、やりたくもないイベントをやらされて、これを描けといわれて、もう出て行きたい」と、アーティストが言っているのを聞いて、これはうまくしないとたぶん長続きしないと思ったわけです。だから不動産を借りている事以上に、まちの人が出てこないようにする仕組みづくり、言わば対等の関係づくりです。

そのまちが、「どういうふうになるのが価値だと思っているか」の握りは大事だと思います。そういう人たちが「ゴミ出しをしろ」とか色んな要求をしてしまうのは、この辺の目標を元に、学生とその人たちがコラボするという、そのためにこっちに行くという目標がなくて、来たからゴミも出るし、電球も減るという発想なのかなと。この目標に向かって実現するパートナーとして、あまり見ていないのではと思います。

岡：パートナー感というのは、どうやって出すのですか。

西本：若者とか新参者とか外から来る人は、土地や建物や森林を持っていない、でもそういうものを持っているオーナーも「何らかの手をいれなくてはいけない」とは思っていて、まちの人も「廃墟マンションばかりになっても困るな」となんとなく思っている。でも「共有資産だから手をかけ続ける仕組みをつくらな」といけないよ」という事までは、なかなか中の人たちだけでは大変です。

岡：まちにとっての共有資産ですものね。

西本：私有財産ではあっても、空いていれば他のところに迷惑をかけるわけですから、そこに手をかけないことで、いろんな面で問題が起こっていくみたいなコモンズ的な考え方をしています。面白い住宅が松戸にはたくさんあって、そこに手をかけ続けることによって、オーナーさんも、今まで入ったことのなかった人もどんどん入ってきて、それは面白いなと私は思っています。大変ですけども。

岡：まちづくりって、「9時から6時までが仕事で、後は私の時間」なんて言っているとできないじゃないですか。NPOを立ち上げるとか、起業するとか、私など

の世代とは違う環境で育ってきていて、結構そういうことに抵抗なくいける人って、多いのでしょうか。それは世代に関係なく、人の問題なののでしょうか。

西本：でも、もしかしたら9時から5時で帰れるような仕組みを、まちづくり屋がつからなかつたのは、まづいことだったかもしれないと思っています。地域のおじさんと朝まで飲むというのは、私自身は嫌いではないし、サラリーマンでも気の合う仲間とそういうこともあるでしょうが、それが必須になるのは何か…。

岡：その辺がもっとスマートになっている世代なのかなと思ったんですけど。私たちの世代は、ほとんどが朝まで飲むという価値観で、女の人まちはまちづくりはできないですね。朝までつきあいきれないし、キャバレーと一緒にいくわけにはいかないし。40代でまちづくりをやっているという人からは、ほとんど毎晩飲みに行っているという話ばかり聞かされて、それを「自分も楽しい」と言われるから、そうなんでしょうけれど。

西本：よく「若者」「ばか者」「よそ者」と言ったり、「ずっと飲め」と言ったりしますけど、あまり私はいくことは強いたくないというタイプですね。地域は、「若者」「ばか者」「よそ者」がポツと来たくらいで、変えられるものでもないとは思いますが。でも結構そういう風潮があって、「若いヤツを呼べば、なんとかなる」とか言われるけれども、自分たちの誇りがあるからこそ、それはやってはいけないことではないかと。まちづくりは、だいたい補助金が出るので、地域起こし協力隊みたいな形で、「2年間いて、そこで話を聞け」みたいになっていますけど、職業をそのままですぐに見つけられるように、もしくは2年間補助金をもらった学生が、自分の仕事ともう1人の自分をつくれるようなビジネスというものが、確立できたらいいなとは思っています。やっぱりまちづくりは、その人がいたからできたというものでは全然ないと思うんです。すごくサステナブルで、日常があるような、人が繋ぎ手のようなものになりうるようなものなら、ありふれたパン屋でも何でもいいし、まちづくり会社と名乗らなくてもいいと思うんです。2年間補助金が出たけど、2年後に切れたから、「じゃあね」と言われたのでは…。もう1つ、もう2つの食い扶持を見つけてあげられたらいいなと思うんです。ですから補助金を取り続けられるまちづくり会社などではなく、普通に日常的にできる仕事ですね。

岡：そういう意味では、空き家物件を持っていた人たちが、空き家物件ではなくなったというのは、すごくいいですね。

西本：経済価値ですね。それが補助金の成果としてあれば、すごい価値なんです。1回埋まるだけではなくて、それが可能な限りずっと埋まっていく。出ても埋まっていく仕組みをつくれるかどうかは、すごく大事だと思います。難しいですけど。

岡：まちづくり担い手事業に私たちも応募して、色々やりましたが、結局独り相撲して終わってしまうという…。こちらでお金を持って行って、地元にお金をばら撒きながら、独り相撲で終わってしまう。つまりずっとお金を提供し続けなければ、どうしようもない状況になってしまうということです。少しでも地域の経済を動かすという成果を目指さないといけなかつたのかもしれない。

西本：地域の人々が持っていて、他に譲りたくないようなリソース「俺のものだから」というものを、信頼感とともに自分たちでその価値を上げ続けることができなくて、手付かずになっているのなら、それを儲けてくれる人に、ビジネスとして手渡すことで、自分たちもハッピーになるという循環をつくるということです。それが頭で描けないで「あいつら儲けてる」と言って、急に怒り出したりとか、急に「返せ」と言ったりとかすると、担い手は何も持っていない借家人のようなものだから、もったいないですよ。

岡：その考え方は篠山も同じですね。いい財産をそのまま放っておくのではなく、使えるものに変えていく、使いやすいものにしてあげるという。

西本：今までヒアリングしてきたのは、行政の人だったり、行政に雇われている人で、公的な立場だから、成果としては人がいっぱい歩いている風景ができれば行政としてはオーケーなのだけれども、まちの循環としてはやはりそういう視点ばかりでは立ち行かないですよ。

確かに行政として、お金がずっとなくならないということなら、今の通行量が上がればいいということだと思います。でも新しくまちづくりをやるという人間は、何もなくてどこから入るから、そこでビジネスということができないと、全くなすすべがないです。また、不動産屋さんのような、普通にどこにでもあって、誰にでもできるようなものが、実はちょっと価値だよということから、私たちがどれだけ学べるのかなと思ったりします。この事例を寺井さんが他に語る時に、「結局不動産屋さんでしょ？」と言われたりするわけです。それをずっと私は聞いていて、私自身は褒め言葉だと思っているんです。私たちはまちづくり会社が「補助金取れたから回ってるけれど、なくなったら回りませ

ん」という事例をずっと見てきて、自分たちもその中にいたのだから、「あたらしい不動産屋」モデルをつくれるというのが、自分たちにとっては価値だということだから。

岡：新しい価値を見出したいと思っているのですが、結局地価にあらわれる価値になってしまいがちです。だから京都の町家が最近すごく高くなったりしていて、ああいう現象のために「京都の町家がいい」という話をしていただけではないのに、結局京都の不動産価値が上がるという話になってしまうわけです。

西本：不動産価値が高まって、アーティストが出て行かざるを得ないジェントリフィケーションのような事態になることを、不動産屋として、どう食い止めるかみたいなことを、私たちは常々考えています。多様性がないと経済は回らないというのはわかるから、貧しい人もお金持ちの人も、ポートフォリオみたいなものをきちんと組んでいかないと。安く買って高く売れば、会社としてはハッピーだけれども、ジェントリフィケーションを私たちが助長することになったら、つまらないねと。だから良くなった所はもっと高くして、逆に安くする所を増やそうとか、色んな事を考えないと、私たちが普通の不動産会社になってしまったら、全くつまらなくなるので。儲けた利益でどのような次の価値をつくれるのか、自治的で自発的な活動を創発させられる不動産取引のモデルづくりについて私たちはずっと試行し続けるのだと思います。

第6章

富山グランドプラザ・豊かな心をとどけるまちなかヒロバニスト

株式会社 まちづくりとやま
山下 裕子

岡：今のお仕事は、まちを元気にするお仕事と捉えたらよろしいのでしょうか。

山下：元々は富山市が再開発事業でつくった百貨店と駐車場の間にある空間を、まちなか広場にするというプロジェクトが始まりました。その広場¹の目的は、「まちなかの賑わいを創出する」ことだと謳っている条例²があり、それにのっとり、その広場を中心にまちなかの賑わいを創出することを業務として雇用されています。

岡：まちなかが賑わうとか活性化するというは、どのようなことだと考えられましたか。

山下：まず単純に「人がいる景色をつくりたい」と考えました。テーブルや椅子を100席程度置いているスペースなのですが、北陸の富山は雪深いまちなので、まずオープンスペース自体が、広場が開業した2007年当時はほとんどありませんでした。この広場は、とてもオープンで、屋根だけがかかって雨と雪がしのげる屋外空間です。そういうオープンスペースに、いつもテーブルと椅子が置いてあります。都会とは違って、平日の特に日中に、私たちのような生産性の高い世代の人が座っていたら、「あの人失業でもしたのかね」と、噂されるようなまちなんです。ですので、テーブルと椅子を置いていても、最初は全く座られませんでした。まずテーブルや椅子に座ってもらうことが、私たちの最初の仕事でした。要するに、そこに人が座っているという景色をつくることによって、「ここは座っていい場所なんだ」と認知してもらうということが必要だったわけです。ですから、打合せでも何でも、事務所ではなくグランドプラザでやったりもしました。

再開発前は、小さな個店が集まる商店街でしたので、グランドプラザができた後も地権者が残り、面した所にお店を構えていらっしゃる。特に最初の時期は、個店のお客様が、グランドプラザの中のお店の前に自転車を駐輪してしまうのです。それまでは通りに面した店だったので、お店の前に駐輪をするというのは、至って普通の光景だったと思いますが、いまは、通りではなく広場という空間が面しているので、そのお店に来るお客

様だけが来る場所ではありません。1台の自転車が停まることによって、一瞬にして5、6台の駐輪ができてしまうこともあります。しかしお店の中にその5、6人がお客さんとしているかと言うと、相変わらず1人しかいないわけです。広場にとって景観を守るためには、1台目の駐輪をまずやめなくてははいけない。富山市では、その解決策として、駐輪を禁止するという方法はとっていませんでした。広場という空間をみんなにとってどういう場所にしていくのか、みんなで感じ考えていくことが大事だというスタンスではじまりました。具体的にいうと富山市では禁止事項のほとんどない条例を制定しています。ですから私たちスタッフは、最初の頃、駐輪を見かけたら、まず間違いなくお店のお客様のはずなので、お店の御主人に、「1台の駐輪を認めたら、すぐに5、6台になってしまいますよね。でもお店の中には相変わらず1人しかお客様はいませんか。この駐輪によって、ますますあなたのお店は入りにくくなっていませんか」と論しながら、お客様に駐輪場の御案内をすることに協力的に取り組んでもらえるように投げかけていきました。これもはじめの大きな仕事だったわけです。

ですから具体的な業務というのは、はっきり言ってあまりありませんでした。むしろ本³の中でも紹介している富山市の京田さんという方（現職：富山市都市整備部長）が、イベント好きである私と、もう1人のパートナーを雇用し、多くのことを任せてくれたのです。私はそれまでにイベントを企画、運営する経験があって、それを買われて雇われました。

岡：それまでは、どのようなことをされていたのでしょうか。

山下：建築設計の仕事をしなが、趣味として、人と人との出会いの場づくりみたいなことしてしていました。そういうことが好きだったのです。最近本⁴を出して、サインを求められることもあるので、座右の銘的に「出会いこそ人生！」と書かせていただくほどです。今日もこうやって先生とお会いしたことで、人生がどんどん変わっていくわけじゃないですか。自分自身を前向きに循環させていくためには、出会いや刺激というも

1 「グランドプラザ」のこと。富山市総曲輪通りと平和通りを結ぶガラス屋根のかかった広場。2007年9月オープン。

2 富山市まちなか賑わい広場条例。2007年（平成19年）3月26日施行

3 山下裕子(2013)、「にぎわいの場 富山グランドプラザ：稼働率100%の公共空間のつくり方」、学芸出版社

4 前掲、注3参照

のが、不可欠だと思っています。しかもその出会いによって、全然計ることのできないことが沸き起こっていく。それを私自身、「わからないことだからこそ、楽しい面白い」と思っているのです。

私は元々京都にも住んでいたのですが、そのころは自分の家が結構広がったこともあって、全国から京都に興味のある人たちをバラバラに呼んで、私の家でみんなで雑魚寝をしながら、京都を散歩するようなツアーを、個人で趣味としてやっていました。私は別に話の中心にいるのが好きなわけではありません。みんながそれぞれでんでバラバラに出会って、楽しくやって、その後もお付き合いしている、そういった人の出会いの場面を眺めるのが、個人的趣味として好きなんです。そこに集まる人たちというのが、私というフィルターを通してのせい、やはり割合近い感性の人たちなのでしょう。であるからこそ、初対面で、男女も年齢も業態も全く関係がないけれども、すごく楽しい出会いができるようです。これからもそんな出会いをつくっていきたいと思っています。その出会いづくりの場所が、今回の仕事では、「まちなか広場」という場所に集中して考えたということです。今までは趣味で、自宅を拠点にしていますが、富山に行ってから、北陸の地には音楽のライブの演奏家など、いろいろな方がくる機会があまりなかったのも、その機会づくりをやっていました。富山の人と県外の人だったり、音楽と何かだったり、ものづくりしている人とお客様だったり、出会いは何でもいいのですが、私たちが今まであまり行かなかった北陸の地に、縁があって住む事になったことで、この場所でまた出会いづくりをしたい、金沢と富山と能登半島などを結びながら、色んなミュージシャンやものづくりをしている人に、発表の場をつくることで、いろいろな出会いの場をつくって来ていました。

そういった活動をしているうちに、年間60回くらいの、個人としては考えられないくらいのイベントをやっていました。その時のお客様の1人が、富山市役所の京田さんでした。

京田さんは、直感的にこういう広場をつくったとしても、行政だけが関わっているようでは、なかなかうまくいかないだろう、そこで行政がバックアップしながらも、イベントを回せる人に関わってもらって、良い形で運営ができないかと考えていらっしゃったようなんです。まずは、活用委員会というのを、完成の3年前の平成16年からスタートするのですが、その場所に私をまず巻き込んで下さって、市民代表として、イベント好きとして、こういう場所ができる時に、イベントする側としては、「こういうものが必要ですよ」「こういう場所ならいいな」といった発言の機会をいただいていた、いよいよ事務所が始まるという時に、私が働きたいと手を上げ、今に至っています。

岡：富山に来られたのは、こういう施設ができるということとは、関係がなかったわけですね。

山下：関係はありませんでした。たまたまでした。

岡：住まいを移されたら、たまたまということですけども、人間というのは、「ここが私のベース」という思いはありますよね。

山下：そういう意味では、私は、ベースのない人間でして、引越しが多く、今まで鹿児島、東京、神奈川、静岡、滋賀、京都、富山と、移り住んでいます。実は春からは久留米に行く事になりました。富山はNPO⁵の理事として関わり続けます。私を育てていただいた場所なので、これからも関わり続けて行きたいと思っていますが、久留米で新しい広場⁶を準備されているので、その立ち上げの仕事を頂いたものですから、久留米に行ってこようと思っています。

岡：もう完璧に地域をつくる仕事人ですね。

山下：そうですね。そうなればいいんですけど。グランドプラザは、たまたまの奇跡かもしれないので、それを奇跡にしたくないから挑戦するといったところなんです。何らかの手段や手法があるのだとすれば、1回目だけではなく、2回目もちゃんと成功させなければいけないと思うので、もしそれが成功できたら、少しは価値があるのかなと思うんですけど…。

岡：それは今後もウォッチングしていきたいと思います。

岡：ところで、『(株)まちづくりとやま』というのは、会社ですか。

山下：第三セクターの会社で、富山市が50%出資しています。

岡：第三セクターということは、トントンで行きつづけるわけですね。まちづくりは商売にならない？

山下：現状はそうですが、そこは行政の考え方次第というか、行政との関係性なのではないかと私は思っています。

⁵ NPO法人 GPネットワーク；富山市のまちなかを拠点として、文化・芸術・スポーツの振興、子どもの健全育成、経済の活性化を図り、市民交流を促進し、市民生活を応援し、まちの賑わい創出に寄与することを目的として設立された。

⁶ 久留米シティプラザ。

岡：経済効果はわからないまでも、行政にとっての効果が指標化されて、見えた時に、どう評価されるかということですね。ただ、それが非常に見えづらい。

山下：富山の場合、市長がおっしゃっているのは、高齢者が出かける機会が増えるということは、医療費の削減に繋がるということなんです。それは明快だし、そういうことは言うべきではありますが、幸福感というのは計れませんから、金銭的には差別化できない。ですから幸福感を計る指標と言いますか、先生方には是非その項目をつくっていただきたいと思います。

岡：ところで空間的な話ですが、富山では、商店街との関係というのはどうなっているのですか。

山下：FERIO という百貨店ビルとグランドパーキングという駐車場ビルの間に、グランドプラザがあります。グランドプラザの前は大通りで、反対側は総曲輪通りの商店街です。

岡：商店街のたまりのようになっているわけですか。

山下：「ひとときのたまり場」という感じです。

グランドプラザは日本設計の浅石さん⁷という方の設計なのですが、きちんと評価をしてほしいと思います。建築の世界では最初、グランドプラザあまりは建築と認められなかったのです。だから建築雑誌にはほとんど載っていません。壁もないですから。でもあれこそ空間をつくっているのです。お陰さまで公共建築賞はもらったのですが、やっと時代がついてきたのかなと。

建築家というのは、建築に頑張りすぎる集団なので、私は建築から足を洗ったのです。でもその浅石さんは「人のアクティビティこそ、主役だ。だから僕は背景に徹する。」とおっしゃっているんです。ですから存在を消すために、ディテールにもものすごくこだわっていらっしゃるんです。非常に細やかなディテールで、そういうことを皆さんにももっと感じていただきたいです。

岡：さて、行政はそのような広場をつくったわけですが、行政が広場をつくった理由は何なのでしょう。

山下：行政が広場をつくった理由は、もともとは百貨店のバックヤードにする予定だったのですが、当時の助役の望月さん（現、国交省審議官）が、「こんなまちなかの一等地をバックヤードにしたらもったいないから、広場にしたら」と、おっしゃったそうです。そこから富山市として、やりましようとなったわけです。

⁷ 浅石優；元日本設計プリンシパルデザイナー

岡：それは完全なパブリックな事業ですよ。そこから何か収益が上がるのか、そういうものではないということですね。

山下：そうです。ですから私は全国でいろいろな広場をつくろうとしている行政がいっぱいありますが、行政が本気でやらない限りは、消費活動が起きにくい広場はつくれないので、本当の意味での公共事業でないといけないと思います。管理運営はどこでもいいのですが、つくること、整備そのものの事業費は、行政で確保しない限り、こんな一円も生まないかもしれない場所はできないです。

岡：どこかが儲けようと思っているようでは、ダメであると。

山下：ダメです。収益を上げることが先ではなく、人を集めることが先なのです。門前町はお寺があって、人がお参りに来ていたから、その人通りを目当てにお団子屋さんができたわけです。お団子屋さんがあるから、人が来ているわけじゃない。今で言うと、大病院や行政施設が集客施設がまずあって、その周りに商店街等の商いが成り立つわけです。ですから病院や行政施設が郊外に移転などしたら、途端にダメになったりするじゃないですか。その原理と一緒に、そこにたくさんの人がいることによって、団子屋さんがやっていけるようになったのです。例えば、大阪のグランフロント大阪⁸ではターゲットがお金を持った人なんです。ですので、やっていらっしゃるイベントの単価も非常に高い。地ビールが一杯 1200 円なんて、庶民はなかなか出せない金額です。ちなみに富山では地ビールが 300 円です。イベントはそこにいる時間を楽しむための仕掛けであり、お金を落とさせるための仕組みではないのです。

これまで消費というものを豊かさの指標としてきましたが、変わり始めている時期だと思います。大都会に関して言えば、もっと経済が停滞しないと、そのような考えにはシフトしないと思いましたが。未だに東京では高層ビルの建設は続いているし、大阪でもそれは続いているわけで、私にはその感覚が全然わかりません。でも私は、これからはもっと地べたに目を向けるべきで、平屋がリッチと言われる時代が来ると思っているのです。まちなか広場の運営でまずはそれを示してみたいとしているわけです。消費が豊かさの指標とすれば、都市経営として成り立たない現状が、地方都市には既にあるわけですから。富山はそれに向かって、ちゃんとシフトをしはじめていて、割合成功していると言って頂いています。車を持たずに歩いて暮らすことで、非

⁸ 大阪市北区大深町に 2013 年 4 月オープンした複合施設。約 10,000㎡の巨大な駅前広場を設置している。

常に気持ちの上でリッチな日常を過ごしているの、そういうまちが少しでも増えるように、久留米でもキャンペーンをしようと思っています。ですから富山のまちづくりに非常に私は感動しているわけですが、それをそのまま大都会に持っていったところで、何の参考にもならない。時期があるだろうと思いますので、通り過ぎるのを待つしかないのでしょうかね。

お金が反映しない広場には意味がないという考えならば、広場などやめたほうがいいと思っています。それは単なるイベント会場であって、それならばもっと機能的なイベント会場をつくれればいいんです。

岡：考え方をシフトさせるというのは、経済価値ではなく、お金をあまり使わなくても、ゆったりとまちや人を見ながら過ごせるということですね。

山下：私が“小さな経済活動”という言葉を使った時に、すごくひびく人が多かったのですが、結局歩いて暮らすことで、“小さな経済活動”が小まめに起きるんです。でもそれが実はこれからは大事なんです。しかも地域、自分たちが住んでいるまちにとっては、好きなパンを買って帰る、お団子を買って帰る、100円、200円が大事なんだと。これを大切にしない限り、金銭の循環は継続にくいように思うんです。これからは。

岡：それを大切にしていなかったから、お団子屋が潰れ、本屋が潰れ、いろんなものが潰れてしまったということでしょうか。

山下：そしてアマゾンなどで買い物をするわけじゃないですか。でも便利さを求めすぎたが故に、極端な言い方をすれば、自宅から一歩も出ずに生きていけるわけです。でも「それが豊かな暮らしですか？」という話なんです。

私が考える広場の一番の価値というのは、無目的な人にとっても、出かけられる場所があるということだと思っただけです。だから何の用事もない、何の買い物をするつもりもない、お金も持っていない人たちがやってきては、グランドプラザの椅子に座って、ぼんやりされているんですね。はじめはゼロでしたが、日差しさえ良ければ、今は満席です。みんなで日向ぼっこされています。さらにもっとうれしいのは、みんなそれぞれ生活のリズムがあるわけですが、同じような時間帯に来る人がいるわけですね。別に待ち合わせをしているわけではないし、別々に来ていたおじいちゃんとおばあちゃんが、いつの間にか1つのテーブルに座っているんです。他のテーブルは空いているのに。おまけにおばあちゃんは、ちょっと口紅を塗っていて、おじいちゃんは胸にハンカチーフをさしていたりしていま

した。そういうことが大事じゃないですかということなんです。1人で行っていたら、お金を使わなかったけれども、誰かと一緒だったら、「ちょっとお茶でも飲もうか」と、喫茶店に入るかもしれないじゃないですか。

岡：男山団地⁹の中でも、おじいちゃんやおばあちゃんに出てきてもらおうと、団地の中央センターの店舗の1つを借りて、学生が365日常駐する“だんだんテラス”というプロジェクトを立ち上げ、イベント等もやっているのですが、今のお話を聞いていて、「もしかしたら違うのかも…」という気がしてきました。というのも、イベント等、彼らは一生懸命客寄せを考えてしているのですが、逆にイベントがない時は誰も来ないということになりかねないですね。

山下：そういう意味では、グランドプラザの場合は、まちなかにあまり人がいなくなってしまった状態だったので、まずイベントによって集客はしました。やはりそれは初動としては相当重要だと思います。でもイベントをし続けてしまうと、前向きな力を備えていない人たちにとっては、わかりやすく言うと、うっとうしいんです。だからまず、近寄れないのです。「自分なんか、行っていいのかわからない」という発想になってしまう。ひきこもっているわけですから。だからまず人がいる景色を復活させるためには、週に1~2回、イベントを打つことは大事だと思うのです。それでまず、人がいるという空気感をつくる。空気をつくりながら、グランドプラザなら植栽があるので、水をやりながら、通る人全員に「おはようございます！」と挨拶をまずする。挨拶だけでもすると、最初は返してくれなくても、2~3回もすると返して下さるし、挨拶をして怒られたことはありません。そして何気ない会話をしていたら、今度はいつか座ってくれるかもしれないということではないでしょうか。やっぱりいきなりイベントに参加するというのは、相当なハードルが高いようです。

岡：イベントに参加するとか、100円でコーヒーが飲める“まちなかカフェ”みたいなことをすると、近所の喫茶店から「なにしているの？あんたら」みたいな話になりかねないから、そうではない方向を何か考えないといけないですね。

山下：そうですね。それよりも笑顔の会釈くらいの方が誘うんじゃないでしょうか。若い学生さんの存在そのものがまちの宝だと思います。“だんだんカフェ”なので、“だんだん”でいいんじゃないですか？

⁹ 京都府八幡市の185.64ha、計画人口32000人の住宅団地。1974年から入居が始まり、京都府でも屈指の憧れの住宅地であったが、建物施設の老朽化が進み、高齢化、人口減少が続いている。2012年から関西大学が団地再編に取り組んでいる。

岡：狭い地域ですと、ある人たちが来たら、こっちの人たちが来なくなるみたいなことも起こってきますね。ある人はいつも来るけれども、来ない人は絶対に来ないとか。

山下：グラウンドプラザの場合は、大きいから、それはすごく重要ですね。空間サイズとして、20メートルという空間があります。たとえば東京では狭いテーブルで、合い席させられたりするわけです。実際に見たのですが、生ビールを飲んでいるおじさんと、女子高生が合い席をさせられていました。その2人は行き場所もないので、おじさんはとにかくビールのグラスの中を見ながら、チビチビ飲んで、女子高生はコーヒーを飲みながら、スマートフォンをひたすら触って、視線は絶対に合わせないわけです。でももし、グラウンドプラザでこの2人が合い席したとしたら、会話の可能性はゼロではないと思うんです。それは大きな空間で、余白も大きく、パーソナルスペースの確保がしっかりできるわけですから、空間サイズというのは、結構重要なんです。でもだからといって、大きければいいというものでもなくて、テーブルと椅子の距離感も大事です。しゃべってもいいし、しゃべらなくてもいいという距離というのがあって、そういうのを工夫するのが、私は好きなのです。それは元々私が建築畑で、空間に興味があったためで、広場に関わるうえで、建築の仕事をやっている良かったなと思いました。やはりちょっとした通路の広さでも、自転車のスピードも変われば、歩くスピードも変わります。ちょっと狭いと、自転車を降りてくださったりするのです。

岡：なるほど、「ここで自転車を降りてください」ではなくて、降りたくなる状況をつくる。

山下：テーブルと椅子を、降りたくなる配置にするのです。要は空気づくりなんです。固定しては、空気って、変わらないです。そうではなくて、ああでもない、こうでもない、いっそのこと長テーブルにしてみようとか、個別に全然バラバラにおいてみようとか、毎日毎日、スタッフ自身が空間をもっと遊ぶことですね。

岡：それはもしかして、1つのイベントをうつよりも値打ちがあるかもしれませんね。“だんだんテラス”の前は広いんですが、そこに椅子を出すのはダメと市役所から言われていて、そうではない日もつくってもらおうとは言っているんですけど。

山下：イベントとして、それをやってしまえばいいんです。

岡：そうですね。建築の学生なので、椅子の配置なども考えて…。

山下：今日はA君の番だとか、今日はB君の番だとか、個人に任せながら。話し合っていると、また訳がわからなくなりますから、当番制にして、テーブル配置を好きにやってみよう！となんでも、面白くやることだと思います。やはり一番関わっている人自身が、面白おかしく楽しんでいないと、なかなか難しいと思います。私はハイテンションなところは、自慢できるかもしれません。グラウンドプラザはもう7年目になりますが、ずっとハイテンションでやっています。

岡：7年で、来る人は変わりましたか？

山下：それはもう、どんどん変わっています。小学生は6年経ったら高校生になります。大人はお金と時間をかけても、なかなか変えることはできないと思っていますが、とにかく子どもたちに「どんどん来て」と。“クリチバ方式¹⁰⁾”で、とにかく子どもたちのことを念頭にやってきました。それが6年経って、エコリンクというスケートリンクをグラウンドプラザでは冬の時期にやるんですが、今年は高校生がものすごく来たんです。今までは小学生以下がほとんどで、大人か子どもが多くて、中高大生が非常に弱かった。中学生は部活や「まちなかには遊びに行くと不良になっちゃう」という教育なので、来ないのは仕方がないのですが、高校生が格段に来るようになった。実はこのリンク、木曜日だけ、5時から7時まで学生を無料タイムにしているのです。その時に学生が60人ほど、ワッと来たのです。こんな現象は今までなかったので、「無料をどこで知ったの？」とインタビューしたところ、グラウンドプラザに普段から来ていて、エコリンクの受付に貼ってあるポスターの「学生無料」を見て、来たと言うわけです。要するにテレビCMとか、雑誌の告知ではなく、グラウンドプラザという場所を子どもたちの遊び場にしてきたおかげで来ていると。6年も経ったら、小学生は高校生になるわけですが、それでも相変わらず来てくれていて、ポスターを見て、木曜の5時に来たわけです。すごい現象だと思いました。

岡：親子イベントだと思っていたのが、そうではなくなったわけですね。

山下：デートイベントにもなりつつあるんです。

10 プラジルの都市 クリチバ市では、再生可能ゴミ仕分けの参加呼びかけを、生活習慣が根付いていない小学生への環境教育として行っている。

岡：でも親子の空間とデートの空間って、全然違うでしょう？

山下：違いますけど、闇がそれをつくるので、それでいいのではないですか。昼間は親子だし、夕方以降は夜が勝手にムードをつくりますから。

岡：それは夜まで開放していることの意味ですね。

山下：グランドプラザは24時間開放ですから。

岡：山下さんはどういう業務形態なんですか？

山下：基本的に、事務所運営は朝9時から夕方6時までしております。そして年中無休です。使用料を払って、借りられた大きなイベントは、設営開始から撤収終了後まで、スタッフが1名以上はつきあいます。

岡：そういう時は残業になるんですか。

山下：そうです。残業の時と、今、私自身は現場を離れているんですが、現場の事務所には4人いるので、スタッフはシフト制でやっています。ほとんどの場合、24時間にはなりませんので、長い場合で朝の7時から夜の10時くらいでしょうか。

岡：団地の交流スペースも、ある期間はイベント的には24時間使えますといった話があってもいいのかもしれないですね。そうするともっと人の幅が増えますよね。例えば11時までずらしてとか、朝と夜と別にするとか、そういうことをすると来る人はずいぶん変わりますよね。

山下：そうですね。ただ、人が住まう団地として大事にすべきところは、大事にしたほうがいいと思います。人はやはり勝手なので、自分が行った時に開いていればまた来るし、一回でも開いていなければ、それがたまたま開いていなかったとしても、来なくなる可能性は非常に高いと思います。

大人に対しては、大人に言われても変わらないと思います。でも子どもに言われたら変わります。これも“クリチバ方式”だと思います。私はクリチバの本¹¹を読み、講演も聞きに行ったのですが、それが良かったと思っています。今、富山市では“学生まちづくりコンペ”という事業もやっているのですが、学生にまちづくりに関わってもらって、しかも1事業の活動資金として上限25万円も支給するんです。そうするといろいろ

な学生が関わってくれますし、学生からの依頼だと大人も乗る場合が多いです。本当に大事だと思います。

岡：高校生くらいまではそれで行けるのですが、大学生になるとなかなかそういうふうにはいかないと思うのですが…。

山下：富山もそれは同じですが、県外から来た学生さんが、まちづくりコンペに関わったせいかわからないのですが、まちに関わったことで、就職先も富山という子が何人もいます。しかも優秀な学生ほど、そういう傾向があります。

岡：関西大学の学生は、みんな東京に行ってしましますが。

山下：でもこれからではないでしょうか。大都会ですから。極端な言い方をすれば、大都会のほうがちょっと遅れていると思っていますから。東京がまだまだ憧れなのかもしれませんが、地方都市の学生にとって、東京はもはやそこまで憧れではないと思います。

岡：確かに東京も大阪もちょっとしんどいという学生もいます。消費に追い立てられている状況にしんどくなって、気に入ったものをちょっとだけ買ってという感覚ですね。

山下：地域にチャンスを感じているのかもしれませんが。要するに就職先がありそうだという意味です。“学生まちづくりコンペ”では、学生がそういうことを感じるし、企業もこの学生はよさそうだとすると「うちに来ない？」という話になっているんです。そういう意味では富山は工場誘致が成功していて、あまり働くのに困らない地域なんです。それも大きな要因かもしれません。

岡：でもまちに関わりたいというのは、また違う感覚のような気がします。私は住宅と都市計画の研究をしています。住宅を選ぶのに様々な要件、家を選ぶ指標がありますが、家は規格化されていて特別な家でなくてもいいけれども、それがどこにあるのか、まちを選択する視点の方が結構大事で、そのまちでどんなものを買うのか、どんなものを食べるのか、どこを散歩するのかといったまちを選ぶという感覚で、これからの人々は暮らすのではないかと考えているんです。

山下：富山の学生はそういう感覚です。商店街の美味しいものや人情に触れて、このまちの近くに住みたいと、徐々になっています。まだまだ兆し程度ではありますが。

11 「人間都市 クリチバ」、服部圭郎著、学芸出版、2004

富山のお菓子作りが大好きな女の子が、東京のお菓子の専門学校に行って、楽しく過ごしているのかと思いきや、鬱寸前だったそうです。自分の作ったお菓子を食べてもらえる人がいないと。あんなに人がたくさんいる東京で、彼女が知っているのは、同じ専門学校に通っている人たちだけ。集団のなかで孤立しているわけです。また、富山の“学生まちづくりコンペ”であるにも関わらず、お茶ノ水や京都外大の学生さんが参加しています。去年は慶応大学が参加しました。結局、若い人たちは何らかのコミュニティを相当求めているのだと肌で感じます。ただその活動の場がないだけで、情報を提供すればどんどん来るのでは。ですから“学生まちづくりコンペ”では全国の大学の都市政策科的な学科があるところには、全校チラシをお送りしています。そのお陰でだんだんと認知もしていただくようになりました。

わかりやすく言うと、若い人たちは寂しいんだと思います。でも人と接してないから、きっかけがわからない。ですから強引に経験させないと経験できないんです。その強引に経験させる手段として、“学生まちづくりコンペ”をやっているように思うのです。「商店街に頼みに行っておいで、そうしたらきっと誰かが助けてくれるから」と。「わかりました…」とドキドキしながら行って、でもすごく成長します。

岡：その商店街の人たちも変わりましたか。

山下：変わりました。大人も変わりました。

今、富山がすごくいいのは、商店街の人たちもこれだけ長くやっているの、最初は「はあ？」と言っていた人たちも、少しずつ「いいなあ、僕も混ぜてほしいな」みたいな感じに、だんだんなっているんです。

岡：そんなにかかりましたか。まだそんなことを言っている人もいらっしゃるわけですか。

山下：もちろんそうです。そういう人がほとんどで、前向きに接触してくれる人は、超少数派です。でも私はよく言うんですが、世の中は何でも2:6:2できているらしいので、2の前向きで、頑張ろうとしている人たちが、6のなんとも思っていない普通の人たちをこちら側に引き寄せて、あとの2は放っておくと。そっとしておけばいいんです。どんな小さなコミュニティでも、2:6:2であって、前向きな2が「いいでしょ！楽しいでしょ！」と6の人をどうにかして引き寄せる。まず足して8になることはないでしょうが、3にはなるかもしれない。そこに向かって頑張るといことです。まず2だけで走ればいいんです。

岡：でもその2はどう発掘すればいいのですか。

山下：勘ではないですか。「こいつはいいな」という超個人的な勘です。逆に言うと、こういうことは超個人的にでないといけないと思います。

岡：地域まちづくりなんかをやっていると、6の人たちや後の2の人たちのことが気になって、あの人たちも同じように税金を払っているのに放っておけないというところがあるんですけど。声を掛けてもよけいな世話ですね。

山下：そうです。それは私は京田さんに感謝しているのですが、行政の職員であって、公共施設の管理運営をしているにもかかわらず、「良いえこひいきはしてもいい」と言われたんです。平等などあり得ないですから、あり得ない平等を謳う前に、頑張っている人に頑張ろうねと励まし合ったほうがいいと。

岡：地域で言えばPTAをやっていたり、町内会をやっている人たちは、とても悲観的で、2は2以上増えない苦しみに、日々苛まれている人たちがものすごく多いのですが。

山下：そしたら他のチームの2と出会うべきですね。その中での2を3にすることを考えないほうがいいと思います。たぶんなかなかできないので。そのかわり、他のチームの2とネットワークでどんどん知り合うんです。情報交換、平たく言うと懇親会をするんです。大阪には人が結構いるわけですから、容易じゃないですか。

岡：あとの2の人は放っておくというのは、今日の私の大きな収穫かもしれないです。でもあとの2の人も、グランドプラザで座っているかもしれないですね。

山下：そうです。また、座っていていいんです。「これ、いいなあ」って、思ってもらえたらラッキーだし、こっちのものです。そしてそういう人たちがいた時に、無視するのは一番拙い。声くらい掛けた方がいいんです、挨拶くらい。私がよくやっていたのは、テーブルの上に足を上げている人がいると、「お父さん、ここはみんながきれいなおべべを着て遊びにきている場所なんだから、くつろぐのはいいけど、足は下ろしませんか」とお誘いするんです。これ、女性スタッフがするんです。男性スタッフがするとけんかにしかなりませんから。「ううん」と言いながら、下ろしてくれることもありますし、下ろしてくれないこともあります。でも気長に接触するということが重要だと思います。私はそういうおじさんたちと、すごく挨拶できる仲になりました。

これは実際にあった話ですが、商店街の端っこで私の自転車のチェーンがはずれてしまったことがあったんです。そしたらよく来ている酔っ払いのおじさんと偶然出会い、近所の酒屋さんからドライバーを借りてきて、直してくれたんです。そのおじさんは人の役に立ったとすごくうれしそうに帰って行きました。顔見知りになるということが、すごく大事なんです。顔見知りになったら、挨拶だけでもしておくと、何かの時に話しかけられるわけです。でも顔を知っていても、挨拶をしたことがないと話しかけられないんです。それをどんどん若い人がやればいいと思います。

岡：富山にとってどういう効果があったと、7年経って思われますか。

山下：まちに出かけることが、日常的になりつつあるということと、グランドプラザは使用料がかかるスペースなんですけど、自分のイベントをしたいと思う人が増えたことですね。

岡：そういう人って、どうやって生まれたんですか。もって生まれたものもあって、イベント好きというのはあるでしょうけど、いざ何かを動かそうとすると大変じゃないですか。

山下：でもノックすることが重要だと思います。みんな「何かをしたい」という気持ちは、多かれ少なかれあると思うんです。こういう場所でギターを弾いてみたいということも含めて。グランドプラザの場合は最高20万円かかるのですが、ある程度個人にとっては高い使用料であることによって、誰かが1人でやろうとした時に、仕組みとしてなかなか1人ではできないサイズです。ですから仲間集めをするんです。すごくやりたい人は1人の方がいいのですが、その人が5人集めると1人が4万、10人でやれば2万円なんです。そういう考え方をしながら、一緒に仲間作りもできてしまう。しかも仲間がいることによって、1人なら失敗すると挫折してしまうところも、仲間が励ましたりする。そうこうするうちに、この仲間がまたイベント好きとして、サポートしたり、自分がやりたくなったりするんです。結局そういうことの繰り返しだったんです。これ、普通の人です。サラリーマンだったり、そうじゃなかったり。例えば地ビールイベントなら、単に地ビールが好きな人とか。踊るのが好きな人とか。今までは自分が楽しむだけで完結していたのが、それを手段として、方法として、人と出会ったり、人に魅せたりという、人もやってみたくなったりという、人と人とが絡んでいくという様相というのが、やっぱり楽しいんです。

先日NHKで『幸福論』という特集をやっていたのですが、その実験で、おつりがないように小銭を握りながらスターバックスで一言もしゃべらず買う人と、1,000円札を持ちながらなるべく会話をしながら買う人という実験をされていました。4人の被験者は、コミュニケーションが好きな人と、大嫌いな人がいたわけですが、全員が1,000円札を持って、少しでもコミュニケーションをして買った方が、楽しかった、幸福であったという結果が出たんです。だから人は人嫌いと言いつつも、人と全く接しないことは、やはり残念なんです。ですからそこをノックする仕掛けが、イベントであったり、運営事務所のスタッフであったりということなのかなと。イベントをすることが目的なのではなくて、手段だと思っているので、その間のプロセスのほうがよっぽど重要なんです。グランドプラザの場合は、1年前から予約が可能なのですが、良いイベントほど、自分たちのイベントが終わった瞬間に、来年のイベントの予約をして帰られます。そうすると彼らにとっては、イベントが終わって、打ち上げ、乾杯ではなくて、その打ち上げは反省会になるんです。1年後に向かってどうしていこうかと、また新しい自分たちの1年が始まるわけです。何か生きていく上での目的が、仕事以外にあるというのは、楽しくてしょうがないですよ。要するにサードスペースということだと思っただけですが、サードスペースをイベントによってつくっているわけです。

岡：そういうことを考える人って、2ですか？

山下：いろんなチームのそれぞれの2かもしれないですね。

岡：そういう人がそういうことを考えられる場所があるということが、きっといいんでしょうね。なかったら2ではなかったかもしれない。

山下：確かにサードスペースを持てる場所ということですね。不動産という意味ではなく、時間として、ネットワークとして。

岡：それを持っているまちという豊かさですよ。

山下：基本的にグランドプラザは賑わい創出のために土日祝日は空き日を作っただけではいけないんです。イベントが何も行われていない風景をつくってはいけないということが市との約束になっているんです。ですから2ヶ月くらい前になると、使われない日がわかるので、その場合は自主企画にするんです。2ヶ月前のぎりぎりの準備になるけれども、それから自主企画ができる

という仕組みです。ただ、今はお陰さまで、自主企画はないに近い状態で、どんどん借りてもらっています。

岡：収益はどうなっているのですか。

山下：1,300万円くらいの使用料収入があります。それを運営資金に補填しています。

岡：それが人を雇うお金になったり、ものを買うお金になったりと言うことですね。

山下：そうです。回っています。それと市からの2,100万円の人件費と900万円の賑わい創出（事務所の家賃込み）で年間3,000万円を補助金としていただいています。

岡：ではうまくいけば、5,500万円くらいの運営資金になるわけですか。

山下：そこまできまません。トータルで4,300万円くらいです。1,300万円の使用料収入をあげなさいという目標額を設定されていて、それくらいになります。富山市が主催の場合5割の減免、共催・後援は3割減免なので、それを抜いて銀行の通帳に積み立てられるのが、1,300万円です。減免がなければもっともといいますが、まあまあわりと優秀だといわれています。

富山市もグランドプラザでやるイベントは、つまらないイベントはやりません。ですから最初はずいぶん工夫しました。「賑わい創出が目的なのに、これで賑わい創出ができますか」と。

岡：行政にもものもうすのですか？

山下：もちろんです。行政という力がないと広場はできませんが、最初、しっかりマネジメントすべきは行政の職員だと思っています。敵は内部にいます。ですから今回の久留米の依頼に対しても、「行政に対してどれだけ発言力がある位置なのですか」ということを、最初に質問しました。「それがない限り、私が行ったところで、何のお役にも立てないので、そのポジショニングを明確につくってくださるのであれば、行く可能性はあります」と交渉しました。そういう環境をつくってくださったので、行くことにしました。

岡：久留米の方も行きたいと思います。

山下：是非来ていただいて、広場完成前から観察していただければと思います。逆に言うと、先生のような視点は非常にありがたいと思っています。まちなか広場ができたことによって、どういう可能性が広がるのかとい

う観点で、グランドプラザ初動時は、私は一現場スタッフだったので、持てなかったんです。でも最初からそういう視点を持って、数値化しておけばそれが図れるわけですから、そういう指標は是非つくりたいと思っていますので、またよろしくお願いします。ですから今思っているのは、歩行者通行量を計るということと、その中の項目として手を繋いで歩いている人の数を計測してもらおうと思っています。富山市では手を繋いで歩いている人が、ものすごくいるんです。若い人も、介護ではない、高齢のカップルも多くて、今度インタビューしようと思っているんです。あと、アルコールイベントが増えました。屋外空間でヨーロッパみたいに、気持ちのいい空間で飲むということが楽しくなってしまった人が、富山には増殖しています。どんなに寒くても、どんなに暑くても人がいます。すごいなあと思います。

岡：去年の3月にドルトムントに行ったんですが、2〜3℃のなか、広場でみんながダウンを着込んで、ストーブをガンガンたいて、外でビールを飲んでいるんです。大阪のグランフロントは今の時期、オープンカフェは誰もいませんよ。日本のオープンカフェは季節を選びます。

山下：富山は違うんですよ。あえて外に行くんです。グランドプラザはスターバックスが面しているんですが、いつでも誰かが外で飲んでますよ。スタッフは、「こんなに寒いのに」と思うんだけど。マフラーをぐるぐる巻いて、温かそうなものをおいしそうに飲んでますよ。やっぱり外は気持ちがいいんですよ。

岡：ドイツでは、広場のど真ん中で、冬に横にストーブを置いてフルコースを食べているんです。しかも50メートル以上離れた店から出てきて給仕をしているわけです。これは日本感覚ではないなと。

山下：でもそれは変わるかもしれないですね。“カジュアルワイン会”という会を、毎月第二木曜日に定期的に開催しているのですが、女性はきれいな人が来るんです。おじさんたちもちょっとおしゃべりして来るんです。やはり見られるという行為は、ちょっと快樂なのだと思えます。仕掛ければありかもしれないと思います。

岡：結婚して田舎に来てから、一度もおしゃれな服を着てないという女性は多いですから。

山下：鳴海先生もおっしゃっていますが、「お金を払ってでも、いい服で歩ける場をつくったほうがいい」と。田舎でもつくったらいいと思います。ダンスパーティーとか、正装パーティーとか、タキシード着てね。ムードが大切ですが、闇が色んなものを美しく見せますから。

岡：「もともとイベントも好きだし、人と会うのも好きだ」とおっしゃっていましたが、富山のお仕事を経て、自分が変わったというところはありませんか。

山下：今、すごく健康なんですね。もともと割に病弱な体質だったのですが、人とコミュニケーションすることによって、絆ホルモンと言われていたオキシトシンが分泌されてるらしいんです。とにかく私、この7年間、無欠勤で、病欠を一切していません。「元気の源は皆さんと会っているおかげです」と、本気で言えるくらいです。ですから変わったことと言えば、ますます元気になりましたということでしょうか。人を元気にするのはなくて、自分が元気に健康になりますよ。まちづくりにかかわると。

岡：「みんな出てきて」なんて、思う必要もないし…。

山下：それでいいと思うんです。人のことをそんなに考えなくても。自分が楽しい方がよっぽど重要だと思うし、逆に言うと、自分が楽しいことをちゃんと知っている人は幸せだと思うんです。私がなぜライブなどを企画していたかと言うと、ミュージシャンとかものづくりの人は、自分が楽しいことにちゃんと出会って、それを生き抜いている人なんです。ですからそういう人たちに、コンサート会場などではなく、もっとリアルに人として出会いたい。私が企画するのは、30人程度のライブなので、非常に生々しいんです。ミュージシャンの人となりまですぐにわかってしまう。そういう人たちと出会うことで、何らかのパッションをもらうんです。お客さんのなかには、そういったライブを経験することで、人生が変わったという人が大勢いました。1人旅に出るとか、何かを始めるとか。それが私がやりたかったことなんです。「自分の人生をもっときちんと考えましょう、あなたにとって何が楽しい瞬間なのか、言えますか」と。それが生ビールでもいいんです。「でもいつものビールばかりではなく、地ビールもあるよ」と、それが楽しみであり、豊かさだと思うんです。塩なら塩でよくて、色々な塩を人に伝えるとなると、イベントになるわけです。まず自分を知るという機会ですね。やはりイキイキした人というのは、自分をちゃんと知っている人ですよ。

岡：病んでいたり、ひきこもっている人の気持ちというのは、元気な人には本当のところはわかってないのではないかなと思うんです。自分たちにとっては何でもないことだから、「出てきたらいいじゃない」と平気で切り捨ててしまう。私たちのような比較的元気な人たちのなかで、話し合っていると、永遠にその人たちは切り捨てられるような気もするのです。たぶん後の2の人たちで、

その人たちが一番元気を欲しているのに、それすらできない人もいないんじゃないかなと感じています。男山団地でも、そういう人がいるのではないかなと感じていて、そういう面に関して、感じられるところはありませんか。

山下：非常に感じる場所があります。私の母も高齢者で、ひきこもり傾向にありますから。でも、極論を言えば、私の今の考え方は、未来にしか向かっていないので、これまでのことがどうこうではなく、これからそういう人たちをつくらないようにするために、広場が必要だと思っていて、本当にひきこもっている人に、私が何か手だてをしているかと言えば、していないし、正直、あまり考えてもいません。それは社会としては非常に大事なことだし、必要なことだと思うのですが、それをやるべき人、職種があるわけですから、その人たちに対して何か関わっていく機会がありますが、私が直接は関わってはいません。

ただ、私の祖母は晩年車いす生活で、壁に車いすをつけられているところも目にして、私はそれを非常に悲しく思いました。車いす生活の人は外出機会を非常に持ちにくくて、スタッフの人も病んでしまうんです。ですからスタッフの人に対して「グランドプラザは大変フラットで、歩道も広く、車も停めやすいので、まちなか散歩に来ませんか。」という呼びかけをしたんです。「出かけやすい時間に合わせて楽しいライブを開催しますから」と、周辺の施設に呼びかけをしたところ、2施設に来ていただきました。そういった企画を年に3回くらい、バリアフリーライブとして開催した時期もあります。ただ、やはり大変なようで、1か月以上前から準備は必要だったようです。ただ、その人たちにとっては、スターバックスのお茶をグランドプラザという屋外空間で音楽を聞きながら飲むというのは、超非日常で、とても喜んでいただけました。そういう瞬間を広場のスタッフとして、施設のスタッフの方には投げかけることができるわけです。車いすのエンドユーザーに直接かかわるのは難しいですが、そういう機会は、広場としてはどんどんやっていくべきだと思いますし、私はやりたいと思っています。

岡：自分が出たくなるまで放っておくのではなく、間に人を介することによって、奥深くに入り込んでいる人を、時々引っ張り出してあげると。

山下：そうです。年に一回でもすごいと思います。「去年もあそこへ行ったね」ときっとおばあちゃんたちはずっと覚えているわけですから。やっぱり楽しい機会というのを、わずかずつでもつくることだと思います。

岡：これまで嫌なこともあったでしょうに、本には何も書いておられません。

山下：書いてないというか、そういうふうに捉えないんです。愚痴は何も生まないし、建設的な話にはならないと思っています。私は引っ越しが多かったので、小学校は3つ行っています。子どもにとって、それはものすごい試練なんです。いじめられっ子にもなりました。ただ運動が割合できた方なので、最後の学校でヒーロー的な存在になったので、明るい素質的なところが残って、今の自分が形成されているようです。でもその時に、「人というのは勝手な生き物で、しょうがないんだ」という、クールな一面ができてしまっていて、自分の楽しさというのは、自分からしか生まれえないと思っています。どんなに「楽しいよ！」と誘われても、自分自身にとって楽しくなければ全然楽しくない。例えば私にとってアミューズメントパークはあまり楽しい場所ではないのです。ということは、自分から、自分の内側からそう思わないと、私の母もそうですけれども、どうしようもないので、気長にその人の気持ちにノックするしかないと思うんです。生き方を決めるのはその人なんです。そういう意味では、なるべく自分が前向きであるということが最善の方法であると思っていますし、そうしているつもりです。

岡：困られたこともあるだろうけれども、本に書く内容ではないということですね。

山下：そうです。広場をつくりたいと思う人が1人でも増えたらいいなと思って本を書いているわけだから、愚痴ってどうするんですか。それは暴露話で会った時に言えばいい話で、それはもう生々しい話がいっぱいありますよ。

岡：鳴海先生は「都市計画はおせっかい」とおっしゃっていて、おせっかいをしながら自分も楽しんで、少々色んなことがあっても、それでいいかと。

山下：私もおせっかいおばちゃんだと思っていますから。別に頼まれてもいないのに、いろんな人をノックしていますから。

富山では“歩行圏”という活動をやっていらっしゃる中林先生という看護系の女性¹²がおられ、歩行支援機器を開発して、使っていただくという実験を3年計画でやっていらっしゃいます。このプロジェクトで、私が素晴らしいと思ったのは、中林先生が老人会の代

表をしているおじいちゃんたちを、まずくどいたんです。中林先生が個人宅に一軒一軒頼みに行けないですし、見ず知らずの人ですから、あまり意味がない。そこで中林先生がしたのは、おじいちゃんたちをお願いしたのではなく、頼ったんです。「私はこういう歩行支援機器をつくりました。そのために実験をしなければならぬので、どうか助けて下さい」と頼ったところ、おじいちゃんたちは自尊心をくすぐられて、「よっしゃ、俺たちがなんとかしてやる」と。そのおじいちゃんたちは町内のひきこもりになっている人たちを知っているわけですから、声を掛けて下さって、少しずつ参加者が増えているんです。しかも参加すると、看護系の女子大生も参加しているのです。そこは中林先生は上手で、わかりやすく「女子大生と行く～」と謳っているわけです。

これからの社会で大変なのは、むしろ男性だと思うんです。女性はネットワーク能力もコミュニケーション能力も相当高いので、何の問題もないです。孤独死も浮浪者もほとんど男性です。このおじいさんたちをどう巻き込んでいくかが相当重要で、広場という距離感、接触距離感はずごくいいと思います。要するに積極的すぎない、放っとかれる感がある。それがお店とは違うところだと思います。あとは例えば「女子大生と行く～」というような、わかりやすいコンテンツがあるとさらにいいということです。これでおじいちゃんたちが帽子を被ったり、ハンカチーフをさしておしゃれをして来るわけですから、女子大生効果はすばらしいと思います。

12 中林美奈子；富山大学大学院医学薬学研究部准教授、研究開発プロジェクト「社会資本の活性化を誘導する歩行圏コミュニティづくり」代表

第7章

市民の“やりたい”を実現させる・伊丹のまちの仕掛人

伊丹市都市活力部参事 兼 教育委員会事務局生涯学習部参事
綾野 昌幸

岡：まずは、今やっておられるお仕事について伺いたしたいと思います。

綾野：今は市役所と、教育委員会の図書館¹と併任です。市役所の方では、主に中心市街地の活性化を担当しております。

図書館は、中心市街地ではない市役所の隣にあったのですが、かなり老朽化してきたことと、宮ノ前地区²の活性化を目指していきたいということで、一昨年の7月にこの地に開館しました。それ以前から、この図書館は、本を貸すだけではなく、人を集めて活性化に寄与する図書館にしていこうという方針が決まり、その時点から併任の辞令をいただき、現在に至っています。ですからここでの仕事は、1階と地下にあるホールを使って賑やかにしていこう、そして図書館に興味を持ってもらって、足を運んでいただこう、なおかつこの辺りを回遊していただけるようになることを目指しております。

岡：ここの前の道もいい雰囲気になっていますね。

綾野：この辺りにお家やお店が建つ時に、あくまでも願いの世界になるのですが、色合いをまちに合わせていただいたり、高さも二階建てくらいにということで、お願いしております。

岡：まちを元気にするというのは、簡単に言えば、どうということだとお考えですか。

綾野：もしかすると団地の再生という話にも関係するのかもしれませんが、行政だけでできる話ではありませんので、やはり民間の方と一緒にやりながら考え、つくりあげていくものだと思います。

ここの図書館についても、併任になったわけですが、自分だけでできるものでもないし、図書館がどういう使い方ができるのか、どうやっていったらいいのかというのも、民間の方、キーマンの方に何人か集まっていたら、運営会議を立ち上げ（それは今でも続い

ているのですが）、一緒になって企画段階から考えることを心がけました。

岡：そのグループは専門家ではなく、市民グループですか。

綾野：そうです。様々な市民グループの方にとりあえずヒアリングをしました。例えば、「あなた方なら、このスペースをどのように使っていただけますか」というヒアリングを試みたり、会議にも来られる方には入っていただいたりという感じで進めていきました。

中心市街地の活性化の時も、やっぱりそんな感じで、もちろん民間の方から「こんなのをやりたい」という声が上がってくると、それに対応しますし、行政は行政で情報はたくさん入ってきますから、「あそこはこんなのをやっているから、似たようなことをしませんか」といった提案を投げかけたりしますが、やるのは市民の方や商業者の方になるので、一緒になって、できるだけやりやすいようには心がけています。

岡：市民の方に実行していただくにしても、そう簡単にはいかないと思うのですが、そこのところはどうされていますか。

綾野：なかなか実行が難しいこともありますが、自分が楽しいと思えることは、きちんと伝えられるのでしようし、みんな面白がって、「それ、ええやん！やろうや！」という感じになりますね。

実は昨日もそうだったのですが、食事をしたり、酒を飲んだりしながら、一緒になってやる、まちの中に入りこむという面はあります。少々「公務員の立場上、どうかな」みたいなところもありますが、「それがダメならまちづくりはできません」と言っています。もちろんお金はきちりしながら、飲みに行ったり、食事をしながら詰めることは、結構あります。

岡：来られる方というのは、固まってきませんか。伊丹市役所は結構地域のキーマンをつかんでおられると思うのですが、市役所によっては、いつ行っても同じような人が出て来られるようなところがあって、実際にまちを動かしておられる人をうまく捉まえないと思うことがあります。やはりキーマンを捕まえるのは夜ですか。

1 伊丹市立図書館「ことば蔵」、キャッチフレーズは「本と出合い、ことばを交わす『公園のような図書館』。1階に交流・展示スペースがあり、イベントを実施している。

2 兵庫県伊丹市宮ノ前；旧伊丹郷町、猪名野神社の門前町。「みやのまえ文化の郷」として文教施設の整備が進められている。

綾野：そうですね。やはり時間外になることが多いですね。その時に色々な団体の方とお会いしますね。そこから固まらないように、その人が持っておられるネットワークで違う人を紹介してもらって、お話しして、少しずつ増やしていけるように考えています。

岡：それはローテーションと言うか、色々な人が2年おきくらいに変わるような形ですか。

綾野：特に定期的に変わるということはないです。今のところは、その人が興味を持ったことや、やりたいことをやってもらう感じですね。

例えば“まちコン”³でも、やるのはお店の方なので、お店のやりたい人に手を上げてもらって、あと「面白いから手伝いたい」という人に、そこに入ってもらうという感じで、その時に役割分担などもパタパタと決まっていって感じですね。「私は当日まで動けないから、駐輪場の警備をする」とか「お客さんの誘導をする」とか、「私は広告が得意なので、ポスターやチラシを作る」とか、広報とかPRをする人たちと、実際に動く人たちは、割合最近、役割分担が決まってきた、知っている人を紹介してもらって、また新たに広がったりとか、そんな感じですね。

岡：そういう人たちって、どのような人たちですか。

綾野：まち歩き等のイベントに、最初は参加者として入ってこられて、「面白かったから自分もやりたい」と言ってこられる方が結構いらっしゃいます。例えばお酒のイベントをやったら、「私も何かやりたいんですけど、どうやったらいいんですか」と、聞いてこられる方がいらっしゃるんです。

岡：行政の方にあえてお聞きするのですが、“住んでいて楽しい”ということ、意識されますか。

綾野：しますね。はい。

岡：市のブランドのなかで、「何かをやりたい」と思ったら、チャンスがあるとか、やる場があるとかいうことが、今のお話を聞いていたら、結構重要なのかなと感じました。住みたいまちの指標として、そういう要素はとても大事ですか？

綾野：そう思います。私自身もオモロいことを探して、生きているような感じですから。

³ 伊丹市の街コン「いたミーツ」は、2012年から始まり、男性200名、女性200名が阪急伊丹駅から東に伸びる100mほどの「ひがし商店街」で開催される。主催伊丹阪急東商店街、運営いたミーツ実行委員会、協賛伊丹市で7月7日に開催される。

岡：そういうことを感じている市民は何割くらいいらっしゃる感じでしょうか。

綾野：実感ですけど、お会いしている方々は、少なくとも半分はいらっしゃるのではないのでしょうか。

岡：そんなにいらっしゃるんですか。皆さんお仕事もされていて、お忙しいでしょうに、昔流に言えばサードプレイスみたいな感じでしょうか。職場でもなければ、家庭でもなくて、そういう場を楽しんでおられる方が半分もいらっしゃるというのは、すごいですね。団地でもURの持っているオープンスペースをみんなに渡して、好きなように使ってもらえたらと思うのですが、「誰がやるねん」とか、「誰が先頭に立つねん」とか「あそこの自治会がやるなら、うちはやらん」とか、そういうことがどうしても出てくるのですが、そういうところはもう違う局面に入っているのでしょうか。

綾野：そういう場所があるならば、「こんなんでいいかな」といくつかの提案をしていったら、「それなら私たちもできるんじゃないか」と、なるのではないのでしょうか。ここは場所があって、どう使うかという時に、使いたいけれども、どう使うかが見えない方がいらっしゃるから、例えばその方に合ったプランや企画などを…。

岡：その方というのは、どうやって現れるのですか。

綾野：運営会議というのを、月に1回やっているのですが、そこに来られたりとか、後は電話で…。

岡：電話というのは、ハードルが高くないですか。

綾野：高いでしょうね。それと、ここでやっているイベントがあって、そこにお客様として来られた方が、私たちスタッフに声を掛けられる例があります。

岡：どれくらいイベントをされているのですか。

綾野：一応、月に8回を目標にしているんですけど。

岡：それは自主イベントと言うか、図書館が企画されるイベントですか？

綾野：市民の方の企画と半々くらいです。

岡：イベントを企画しても来ていただくのは難しいですね。

綾野：最初の頃はそうでした。最初は図書館なので、司書の方もいらっしゃるし、2階以上には本を読んでいる方もいらっしゃるの、音の問題とか、飲食の問題等、やりとりしながらでした。最初は飲食はダメだったのですが、今はOKになっています。司書の方と相談しながら、2階以上に迷惑のかからないように調整すると、音もOKです。イベントの時は、音は注意しますし、ある程度はタイムシェアみたいな感じで、「この時間はちょっと騒がしいですけど、すみません」とお伝えしながらやっています。

岡：どんなイベントをされるのですか。

綾野：この間は、富山グランドプラザの山下さんの講演会を開催しました。今は“もったいないウィーク”というのをやっています、これは環境のNPOの方が、「私たちこんなことをしたい」というのを提案されました。山下さんの講演の前も、環境の“出前講座”をやっています、ゴミの分別の仕方や捨て方を、教えてくださいたりといったこともしています。その方などは、“ことば蔵”の窓口に来られて、「私たち啓発活動をしたいんですけど」とおっしゃって、そこから繋がりました。

岡：そういう方を受け入れる窓口はあるんですか？

綾野：ここの1階にあります。

岡：ここで何かをしたいと思いつけば、市役所ではなく、ここで受け付けてもらえるわけですね。

綾野：もちろん運営会議に出てきて、言っただければ、進める方向でやります。

岡：ここで受け付けられるのは、この場所でできることだけですか。たとえば前の道でやりたいとか…。

綾野：それは館内ということになります。

岡：“まちコン”などはどこで受け付けられるのですか。

綾野：“まちコン”は、飲食の多い東商店街というところでやりました。それまであまり活動もしておられなかったのですが、商店街の会長さんも変わられて、「何かやりたい」と。私も呼ばれて、「何かやりたいけれども、何をやったらいいかわからない」ということでしたので、いくつか提案させてもらいまして、そのうち「今、“まちコン”が流行っていて、ここは飲食店も多いし、やりませんか」というところから、「じゃあ

やりましょう」となったわけです。ですからその時は、商売の方が集まった会議があったんです。

岡：商工会ではなく、商店街の会議が契機になったのですか。

綾野：そうです。一昨年1月末の会議で提案したら、「“まちコン”やから、7月の7日の七夕にやる！」と決められました。間に合うかと心配しましたが、飲食が固まっている商店街なので、やりやすかったという側面はあります。1回目が男性150、女性150で300人集めたんですけど、結構すぐ埋まりました。集まるのは早いですよ。女性の方が早いです。

岡：伊丹でやるから、伊丹の人ですよ。

綾野：いや、伊丹の人は、案外自分のところでやる“まちコン”は顔がさすので、恥ずかしいのか、市外が多いです。

岡：市外に“まちコン”情報がネットか何かで行くわけですね。“まちコン”専用サイトみたいなものがあるんですか。

綾野：“まちコン”をまとめているのはありますね。その時も1月末の会議で、7月7日にやることになったわけですが、商店街だけではしんどいので（店舗数は20～30）、「一緒にやりましょう」と市民の方に声かけをしました。その時に、チラシをつくれる人とか、デザインできる人、当日お手伝いできる人など…。

岡：それは商店街の人だけではない？

綾野：そうですね。商店街が“まちコン”の実行委員会を持って、「やりますよ」と市民の方に声かけをしました。人集めは、基本的には商店街の人たちのネットワークもありますし、色んなメーリングリストがありますので、投げかけたら、「私はこんな人を知っているから、紹介するわ」といった反応がいろいろありました。

岡：全部タダでしょう？自分でやりたい人が、無償でやるという…。

綾野：そうです。「“まちコン”なんて、伊丹でやったことないし、オモロイやん」みたいな感じで手伝ってくださいました。まあ、それまで大分と基盤ができていたんでしょうね。

岡：その基盤って、何ですか？

綾野：一番は“バル”⁴をやってから、変わってきたなという感じはありますね。“バル”は2009年から10回目ですので、その辺りから少しずつ意識が変わってきたのだと思います。「これ、オモロイやん」と、皆さんが手伝ってくださるようになりました。

岡：“バル”は儲かっているんですか。

綾野：いつもお店の方に、2～3週間経ってから、アンケートをとるのですが、「“バル”をやってから、お客さんは増えましたか？」という問いに、今でも半分くらいのお店が「増えた」と答えておられます。当日の売上よりも、その後の振興が目的なので、うれしい結果になっています。ですから当日、うまくPRしたり、メニューを考えたりして、お客さんを捉まえられているということだと思います。

特に敷居の高いお寿司屋さんなどが、“バル”を機会に若い人が来てくれて、それ以降、若いお客さんが増えたとおっしゃっていますね。客単価は高くないようですが、また、“バル”は女性のグループの参加が多いのですが、“バル”を機会に立ち飲み屋さんデビューをされて、それから通われるようになったというの、うれしいと思っています。

岡：地域資源に新しい人の目を向けさせるということですね。

綾野：そんな事もやってからわかったことなんです。

また“バル”の時は、“オトラク”⁵という音楽のイベントとコラボしてやっているのですが、これは100組くらい出ます。演奏の機会が欲しいという人を、文化振興財団の職員がコーディネートして連れてきて、ほとんどノーギャラで、各地で演奏してくれるんです。

岡：どうやったらそういうふうになるんですか。

綾野：“オトラク”は“バル”の前からやっていました。ある1つのお店と1組のミュージシャンを繋げるということをやっていたのですが、それが“バル”の時に一気に大きくなったということです。

岡：伊丹市はサイズのもちょうどいいのでしょうかね。人のサイズということでしょうか。

綾野：“まちなかバル”ということで、中心市街地でやっているのですが、ちょうどいいサイズなのでしょう。800メートルくらいなら、ちょうど歩けるし、端から端まで歩いたところで、たいしたことはありませんから。伊丹市は市のサイズも小さいし、当然中心市街地もコンパクトなので、歩いている人や自転車の人が多いんです。

1つ面白いことをやると、色んな方が集まってきてくださいます。「“バル”でチケット買って参加したら面白かった。何か手伝えることない？」みたいな感じで。

岡：やっぱり始めは何かをやっつかないといけないということですね。市としては、サードプレイスのな、3つ目の能力を活かすみたいなことに、相当力を入れていらっしゃるということですね。

綾野：そうですね。こんなソフト事業をやるということは、市民の方や商業者の方が出てくる舞台づくりみたいな形になります。

岡：それは行政的にどういう効果を狙っておられるのですか。

綾野：最終的にはお店に儲かって欲しいと思っています。お店が減っていくのは寂しいですし、まちにとっては決して良くないことですから、個店に頑張ってもらいたいと思っています。

岡：大型店舗の方とはあまりお話はされない？

綾野：別に敵対することはありませんが、内部で上手にやられているので、特にお話しすることはないですね。最近、面白いことに、イオンさんなどが、逆に「伊丹祭をしたい」と言って来られたりするんです。車で行くような広域の商圈を持ってもらえるようなところなんです、結構地元で目を向けてくださっている感じがします。

岡：団地の再生というのは、誰かがしないと誰もしないんです。自動更新ができない。ここはうまく回り出すと、それぞれの顔が見えていて、勝手に自動更新ができますよね。それはここは地域ブランドが立ってきたということでしょうか。

綾野：お店の方も、特に若い方は、長く商売をしていかねばならないので、危機感を持っていますし、“バル”も手を上げてもらって、という形ですが、やはり若手の方が積極的です。

岡：ここにお店を持っておられる方は、伊丹の方ですか。

4 伊丹まちなかバル；2014年で第10回を迎える。三軒寺前広場特設テントを本部として、伊丹市中心市街地エリアの100店以上が参加する。NPO法人いたみタウンセンターが主体的に取り組んでいる。

5 伊丹オトラク；2005年に「もっと自由に、もっと楽しく音楽を」をテーマに市内のカフェやバーで行われている音楽のライブ情報を発信している。年間ライブは200回以上。

綾野:伊丹出身で、大阪で商売をやっていたけど、帰ってきたという方が多いですね。

岡:では、余計にネットワークが強くなりますね。

綾野:ですから“バル”をやってから、“バル”の参加店の方々に、自分たちでネットワークができたから、“屋台村”⁶というイベントを開催などという動きも出てきています。つかしんにあるキューピーさんの工場が「コラボしたい」とおっしゃってきて、去年も少しやったのですが、今年の4月、イースターの時期に卵料理のイベントをやることになりました。“バル”の参加店に声をかけたら、「やるやる」というところが結構ありました。そういう企業さんからのコラボの声かけがあれば、相談するとすぐに乗ってくれるんです。

岡:“バル”は結局、お店も儲かるけれども、そこに来る人も増えるから、皆さん歩いて来られますものね。チケットは何枚くらい売れたんですか？

綾野:前売りが3,000円、当日が3,500円のチケットが、前回で5,000枚売れました。

岡:地元の人でしょうね。

綾野:本部でアンケートをとったら、半々くらいになるのですが、地元の方はあまりアンケートには答えなないでしょうから。ただ“バル”が1つ成功したことで、後がいろんなことがやりやすくなりました。

それまで商売が儲かってもらわねばと、意識はしていたのですが、なかなかうまくいってなかったんです。例えば三軒寺前広場で、数千人、数万人の大きなイベントを開催して、周りの店舗の方に、「そこに来るお客さんをつかまえてね」と言っていたのですが、なかなか周りで、飲食や買い物をしてくださらないというのがジレンマでした。クーポン券も出したりしたのですが、当日も行かないし、1ヶ月の期限を持たせても、クーポンの使用枚数は非常に少なかったんです。ところが“バル”はお店にお客様が行かれるイベントなので、「これ、ええやん」となりました。

最初“バル”は函館でやられていて、視察をされた伊丹の市議員の方から「話があるからちょっと来い。函館でこんなことをやっているけれども、伊丹も合うんじゃないか」とヒントを頂いて、詳しく調べ、伊丹で声かけをしたんです。“バル”はお店で食事をされて、酒を飲まれて、お店を回っていかれるイベントなので、お店のデビューにはいいだろうと考えたわけです。敷

⁶ 伊丹郷町屋台村；2009年から開催。三軒寺前広場に屋台およそ15が集結して行われる。主催：伊丹郷町商業会、後援：伊丹市。

居の高いお店や、立ち飲み屋さんなど、知ってもらえる機会になるからいいなと思いました。また、一軒一軒のお店は、非常におもてなしの気持ちの強いお店が多かったので、来てもらいさえすれば、勝負できるのではないかということで、始めてみたら、参加店舗も増えてきたし、チケットの販売枚数も増えてきました。1回目は1,500枚で、今が5,000枚ですから。年に2回、春と秋に開催しています。これも毎月実行委員会をやっておられます。2回目が終わった時に、春と秋の土曜日にやると決めたんですが、例えば2月8月だと、暑いし寒いし、この時期は商売が枯れる時期と言われていましたので、僕が「2月と8月にやったらどうですか？」と提案したら、ある委員に怒られました。「そんな暑い時や、寒い時に、お客様を並ばせられへん！あかん！春と秋にしよう」と言われて、自分が恥ずかしくなりましたね。そういうお客様への気持ちがすごいなと思いました。ですからずっと春と秋に開催しています。

岡:そういう明らかに「儲かってほしい」というイベントに対して、ここ（“ことば蔵”の交流スペース）は違いますよね。

綾野:ここは違いますね。ここで、1つ意識しながらやっているのは、“まちゼミ”というのを開催しています。お店の方が自分のところのノウハウを、市民の方に教えて、ファンをつかまえてもらおうというイベントですが、それをここでやっています。

例えば“まちゼミ”の第1回は、写真館の店主さんに来ていただき、上手に撮れるデジカメの撮り方を教えて頂いて、たくさんの方に集まっていただきました。講師料は払いませんが、お店の宣伝はしてもらってもいいし、お店のファンをつかまえてくださいというイベントです。参加料もタダですし、この使用料もタダ、そのかわりギャラもタダと、ただウィンウィンになりましょうということをやっているわけです。これも毎月1回とか、2回とか、いろんなお店の方にやってもらって、「あの人がよかった」とか「あのお店に行きたい」というお客さんがおられるわけです。

岡:お客さんは結構来られるんですか？

綾野:集まりますね。写真の時などは、70人くらい来てもらいました。

岡:地盤が育っているように見えますね。この場所自体もできた当初はそうではなかったですよ。「～のように使ってもらいます」とは聞いていましたが、まだ誰もいない状態で。

綾野：その通りです。それが使えるということが知られてきたら、平日はお子様連れのお母さんが1階で遊んでいたりとかしますしね。

岡：すごいことにはならない？

綾野：すごいことにはならないですね。走り回る子もいて、危ないので職員が注意することもあります、意外に大丈夫ですね。

岡：なんでも食べてもいいことにすると、エスカレーターしませんか、パーティとかにならないですか。

綾野：酒はダメだということにしていますし、パーティとかはないですね。最初に図書館司書の人たちとは話し合っ、従来の静かな図書館とは違うということをコンセンサスとして持っていました。交流部分は国からの補助金が出ていますし、地元の宮ノ前の方たちからの要望もありましたので、“まちゼミ”のようなイベントを開催したり、普段も（最初はダメでしたが）、飲食もカードゲームもオーケーということになりました。もちろんお金をかけるというのはいけません。

岡：勉強したりもオーケーとなると、いっぱいになりませんか。

綾野：夏休みなどはいっぱいですが、ただ学習室は他にありますので、受験勉強をする子達はそちらに行きます。本来なら“まちゼミ”は、お店に行ってもらってやるのが一番いいのですが（最終的にはそれを目指したいとは思っているのですが）、お店のキャパだとか、店員さんが対応できないとか、休みの日にやりたいとおっしゃる方もいるので、とりあえずこの場所でやってもらっています。でもこれをやることで、結構ウィンウィンになって、ファンになってくださる市民の方が増えています。

岡：イベントは月に8回、そのうちの“まちゼミ”は月に1回になっているということですね。その運営は、運営会議で承認したものでやっていくということですね。

綾野：そうです。市民の方も、色々な運営会議で提案してくださるのですが…。

岡：それはどういう手順ですか。

綾野：運営会議のなかで、「やりたいこと発表」という時間があるのですが、それに入ってこられるわけです。

岡：運営会議は何人でやっておられるのですか。

綾野：運営会議は15人くらいで、「月に1回、こういうのがあるので、来たい人は来てください」と呼びかけて、フリーで来てもらっています。多いときはもっと多いですし。運営会議の事務局はありますが、固定メンバーではありません。

岡：運営会議がクローズされていない？「この場所をどう使いましょう」というのも、運営会議で決めるんですか？

綾野：運営会議で決めて、オープンです。ただ音楽等の大きな音は問題です。今も「尺八演奏をしたい」というお申し出がありましたが、館内整理日というのが月に1回第一木曜日にあるので（返却だけ受け付ける日）、その日にやっています。それが結構、演奏会にお客さんが来るんです。

岡：それは運営する側の柔軟性ですよ。

綾野：基本的にはやる方向で進み、運営会議ではどういう支障があるのかということだけ、話し合うわけです。

岡：運営会議の司会はされているんですか。

綾野：司会は職員の持ち回りでやっています。これは開館前からやっているのですが、開館してからもずっと続けています。

岡：普通のまちの中の集会所などでも、人がちゃんといればできることでしょうか。

綾野：できると思います。

岡：ここも場所的にきれいではありますが、条件として良いかと言われたら、そんなに…。

綾野：条件的には良いわけではないと思います。

岡：ご近所は大丈夫なんですか。

綾野：一応目隠しはしていますし、音は漏れないです。市民会議のなかで出てきた提案が、“もったいないウィーク”で、牛乳パックでサッカーボールをつくるとか、おもちゃの病院をつくるといったことをしました。山下さんの講演も、「使わないともったいない」と、“もったいないウィーク”に無理やり入れました。

岡：山下さんは「イベントで使っていない時に、どれだけ使っているかが重要」とおっしゃっていたので、今の状態はまさにそれですね。

綾野：そのリサイクルセンターの方には「机や椅子があったらもってきてください」とお願いして、ここに置いているんです。リユースなので、欲しい人は、箱に入れてもらって、抽選して、最終的には欲しい人に引き取ってもらいます。そんな話も運営会議です。

運営会議で市民の方からの提案は、基本的にはやる方向で進めるのですが、職員からの提案は「本」や「言葉」を意識して、できるだけそういうイベントをするようにしています。

去年の年末には“紅白歌詞合戦”というイベントを開催しました。好きな歌詞を集めてプレゼンをして、赤組と白組に分かれて競うというものです。去年のテーマは「応援」で、自分が励まされたり、人を励ましたような歌詞を募集して、赤白に分かれて対決しました。できるだけ「言葉の力」のようなものをクローズアップして、公民館とは違う特色を出そうということです。ちなみに私は白組の司会をやったのですが、女性の司会者は赤のドレスを着てこられた上に、女性のプレゼンは抜群にうまいので、僅差で負けてしまいました。だから自分たちが楽しみながらという要素は、非常に大きいですね。

岡：そういう場を、市としてもたなければならないと思っておられるのは、なぜですか？

綾野：市民の方に、楽しいまちだと思って欲しいから、楽しんでもらえる場所、遊んでもらえる場所というのは、つくりたいですね。カタイことを言えば、ずっと住んでもらいたいということになるのですが、楽しいまちだと思ってほしいというのが、大きいです。

ですからイースターをキューピーの方が提案してくださった⁷のも、それに乗っかってくださったのだと思います。やはり季節季節でそういうイベントがあると面白いし、ハロウィンも長い間やっているのですが、イースターもまた新たにということです。

岡：ハロウィンも中心市街地でやっておられるんですか。

綾野：やっています。高校生が仮装して商店街をうろうろしています。

岡：大学生は都心に行ってしまうけど。

綾野：高校生は住んでいるから。

岡：高校生が乗ってくるというのは、珍しいですね。大抵、一番知らん顔するのが高校生ですが…。

綾野：高校に商業科というのがあったので、その子たちが商店街とコラボしてやり始めたみたいですが、だんだんその高校のなかで広がっているみたいですし、高校を卒業した子が、OB・OGとして手伝いに来たりしているみたいです。

岡：子どもをつかむというのは、強いですね。

綾野：去年のハロウィンは、バルーンアートができる職員がいるので、“ことば蔵”もそれに乗って、一緒にやりました。ここには結構、商店街のイベントで仮装した子どもたちも来るので、合言葉もつくって、バルーンや缶バッチをあげたりしています。

岡：綾野さんは専任ではないということですが、週のうちの何日くらいで、スタッフは何人くらいいらっしゃるのですか。

綾野：私は週のうち2～3日、この交流フロアの専属の職員は2人です。職員の男性が2人と、嘱託の方が1人、アルバイトが1人です。その人たちを部下にもらってという形になります。

岡：結構手厚い感じがしますが、市にすれば、その人たちを雇うだけの値打ちがあるということですね。

綾野：力はいれてくれていると思います。貸し館の業務や、苦情なども受け付けてくれているのですが、そういうこともしながら、地下のホールと1階を活用していこうとしています。

小さい市であるからかもしれませんが、伊丹に住んでいる人たちは「伊丹が好き」という人が多いような気がします。それはいいことだと思っています。便利な上に、面白い、楽しいことがたくさんあれば、なおいいなと思います。

岡：綾野さんがご存じのグループは、どのくらいありますか？

綾野：20～30くらいでしょうか。

岡：伊丹市はまちづくり協議会などは、やっておられるのですか。

⁷ いたみイースターまつり；キューピー伊丹工場の協力を得て、35店舗でイースターメニューを提供する祭。

綾野:各小学校区にあります。でもそれとは別に、テーマ型で、環境や歴史など、いろんな団体の方がいらっ
しゃいます。

岡:伊丹市はまち歩きのマップもとても豊富で驚きま
した。

綾野:歴史をテーマにしたまち歩きがしたかったら、
すぐに文化財ボランティアの方が対応して下さいます。

岡:昔から人が行き来していたところだから（特に
能の舞台になったような場所が点在していて）、まだ
まだ発掘できそうですね。でもここまで至るには普
通では無理だと思うのですが、どうしたらいいので
しょう。

綾野:少しずつ皆さんが持っておられるネットワー
クをやってこられたことを中心に探していけば、でき
るのではないのでしょうか。

岡:私の叔母が、伊丹市が運営している文章を書く
教室に参加していて、そこで仲間ができて、本を出版
したと言っていました。そういう教室が浸透している
んですね。そういう場があって、そこに簡単に行ける
というのは、大きいですね。

綾野:開館前から、そういう場づくりはずっとやり
たかったんです。しかもクローズではなく、オープン
な感じで誰でも参加しやすい場ですね。今の時代、
そこで決めたことだけをやっていくというのは、進歩
もないですし、しんどいだろうなと思っていました。

岡:伊丹市はこういう場所はここだけですか？

綾野:あと三軒寺前広場というところですが、この
広場は色んな制限がかかるのですが、この広場につ
いては、山下さんに色々なアドバイスをいただきた
いと思っていました。

岡:こういう場が大事だということに気がついた市、
なぜ気付いたのでしょうか。

綾野:協働、協働と言いながら、なかなか…。

岡:中心市街地の活性ということも、その言葉だけ
を言えばお店が儲かるみたいになっていますけど、指
標としては違いますよね。どんな指標を持っておら
れますか？

綾野:一番は、車ではなく、歩行者や自転車の通行
量が増えるということではないでしょうか。中心市街
地活性化基本計画を策定させていただいたのですが、
それは1つの指標として絶対に持ちたかったんです。
やはり実際に図書館ができて、もともと通行量の少
ない地域だったのが、この辺りの通行量はかなり増
えました。

岡:図書館の門前町になりましたね。道だけ整備し
ても誰も通りませんから。

綾野:自分自身がそれまで図書館に行かない人間
だったので、逆に「どうしたら図書館に行きたくな
るのか」を考えやすかったのかもしれない。

岡:伊丹市は、今、図書館はいくつあるのですか。

綾野:ここが本館で、あと3つ分館があります。き
ららホールが設置されている北分館と、ラストホ
ール（フィットネスも併設）が設置されている南分
館と、イオンモール伊丹昆陽のなかにもう1つあり
ます。

岡:ご自身はこのお仕事について、どういう気持ち
で取り組んでおられますか。

綾野:ずっと伊丹に住んでいましたし、好きです
ので、有難いなと思っています。人と関わることも
嫌いではないので、その点も有難いと思います。実
は祖父も商売をしていたので、商売に対して馴染
みがあり、思い入れがあったということもあります。
私は事務採用だったのですが、伊丹に入ってくる
職員や中にいる職員もそうなのですが、都市デザ
イン課に行きたいという人が増えてきました。一
応、土日や祝日はないよというハードルは言うよ
うにしていますが。

岡:本業とサードプレイスを行ったり来たりとい
う感じで、楽しんでおられるわけですね。職能と
してはどう感じておられますか。

綾野:合っていると思います。ぶつかることも
ありますが…。朝の5時くらいまで、ぶつかりな
がら飲んだりといったこともあります。しかし消
極的なぶつかり合いではなく、お互い良くしよ
うと思っているのに、方向性が違うとか、意見が
違うというぶつかりやすから…。

岡:組織としては、構成が非常に良いように思
います。ある市は都市の空間を整備するところ
と、住民対応するところが全然別になっています。
また、建物を建

てるところと、環境も別で、市民の方が「こんなものが建つんです」と言ってこられても、環境の方で苦情処理になってしまって、建物を建てる方の部署に活かされてこない。また景観は市民に支えてもらわないといけないのに、市民に公募しても何も集まらなくて、バラバラなので何とかしなければいけないと思うのですが。

綾野：都市活力部にされたのは、今の市長です。それがよかったのだと思います。国交省出身で御自分はハード的なことをやられていたのですが、それだけではダメだと思われたのでしょうか。“バル”の時もハッピーを着て、10軒くらい回っておられて、良い広告塔になっています。

岡：まちの変化について、どんなところで感じられますか？

綾野：一番はまちの皆さんの意識と言うか、気持ちですね。今まで、まちづくりと言うと大仰ですが、積極的に何かをやりたいという人が少なかったように思うのですが、「こんなことをやりたい」とか、「こんな人を知っているから紹介してあげる」という人も多くなりましたし、商売人の方は「危機感をもってやらなあかん！」「何でもやりたい」、「自分ではこういうことをやりたいが、どうしたらスムーズにやれるのか」といった相談がきたりしますので、住んでいる方の意識が変わってきたのが、一番かなと思います。もちろん数字的に、通行量が増えたとか、イベントの入場者数が増えたといったこともありますが、それよりも意識変革は強く感じます。今までもあったのかもしれませんが、前に出るようになってきたと思っています。

岡：それはやはり、始まりは「楽しいから」でしょうか。

綾野：そうだと思います。仕掛ける側も遊んでいますよ。自分たちが楽しまないと、お客さんも楽しくないと思っていますから、楽しんでやっています。

岡：意識が変わったと実感されているのはすごいですね。運営会議に何十人も集まるというのが、めんどろくさい事のはずなのに…。

綾野：みんなの前で話をするというのも、ハードルが高いとは思いますが。そこをもっと下げた方がいいのかなという気もしています。いつも来られる方もおられますし、環境の方などは何ヶ月か前に来られるようになって、2月にやりましようとなったんです。

岡：どうしても市役所とやっていると、福祉的になってしまうんです。母子家庭を助けるイベントとか、困っている人を助ける類のことを提案されるわけです。「学力が低下してきたので、子どもたちに勉強を教えたい」と提案されるのですが、モチベーションの方向としては違うと思うんです。「楽しいからおいで！」「成績上がったら、楽しいよ」と、どちらかというところちらの方向に持っていかないと。気持ちの上でボランティアではないですよ。

綾野：それはそうですね。自分自身が楽しいというのは、重要だと思います。

団地再編叢書 vol.13

まちを元気にする方法 － 仕掛人6人へのインタビュー

2015年11月30日 初版第1刷発行

企画・編集 岡 絵理子 江川直樹 倉知 徹 宮崎 篤徳 / 関西大学 戦略基盤 団地再編プロジェクト室

発行所 関西大学 先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

電話：06-6368-1111（代表） 内線：6720

本書は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成23年度～平成27年度）」によって刊行されたものである。

